# 戦国提琴譚

麻返（あさがえり）　務（つとむ）

## プロローグ　豊後国府内城下（ぶんごのくにふないじょうか）

「はやくわたしを抱いて……激しく。声をださせて……」

ゴクリ…。場違いにも思わず生唾（なまつば）を呑んでしまった。

だって異国風（いこくふう）の姿をした美女が妖艶（ようえん）な声で訴（うった）えるんだもの。

ぼくはそうっと手をのばし、彼女のからだを持ち上げた。そして下の膨（ふく）らみに顔をよせる。

いいのか。ほんとうにいいのか。どうなるのだろう。

迷いはある。でもなんとかしなきゃという思いがぼくを動かした。

左手を首にのばしてツボをおさえ、右手を構え、彼女の敏感なところに触れた。

彼女が軽く声をあげる。

そして優しく、教わったとおりに、右手を動かした。優しく愛撫（あいぶ）するように。

彼女の声は優しく強く激しく、あたりをふるわせた。

途切れることのない高めの声。その声に宿った彼女の力が、

周囲の兵士を吹き飛ばした。

そう。いま、ここは、戦場なんだ。教会堂の扉を破って押し入って来た敵兵を彼女の声が押し返す。

左手を動かして奏でる旋律が、粗野な兵士を狂わせる。

「逃げろ！」

ぼくの背後でおびえていた信者たちに怒鳴る。

「早く！」

敵兵に対してなのか、彼女に対してなのか。教会堂に集まっている町衆たちは怯えてなかなか動けない。

「巻き添えを食うぞ！」

足でテーブルを蹴飛ばす。倒れた音で我に返ったのか、一人がわああと叫んで逃げ出した。

それをきっかけにミサに集まっていた老若男女たちが走り出す。

彼女の声はきっと町衆たちを守ってくれるだろう。

少なくとも音の響いている中では。

「何言ってるの」

「え？」

「わたしはあなたさえ生きていてくれればいいの。だからあの人たちのことはしらない」

「きみのことをあんなに讃えてくれた人たちなのに？」

「わたしがほしいのは、あなた」

「ありがとう」

「さあ、思いっきり弾いてみて。わたし、まだまだ強いわよ」

ぼくは右手のボウを大きくうごかして大きな音を出す。左手を細かく動かして軽快な旋律を奏でる。

出てくる音が波動となって敵を撃つ。

波動は教会堂の壁や柱まで壊してしまった。

ミシミシきしる音がする。

「やべっ！」

ぼくもここから脱出だ。

一瞬の隙をついて、町衆の逃げ出した扉から回廊に走り出た。ここまでは敵はまだ侵入していない。が、時間の問題だ。

後ろから巨大な音が襲って来て、地響きがした。教会堂が崩壊したのだろう。塔の先端にあった鐘が落ちた音がする。

これで少しは時間かせぎになる。
自室に戻り、彼女を入れるケースを背負い、刀をさして、再び彼女を抱えて外に出る。
残念ながらそれ以外のものはもちだせない。

だって戦争だもの。敵兵そこまで来てるもの。
「逃げるの？」
彼女がたずねる。
「もちろん」
「戦士のくせして？」
「戦士じゃない」
「刀さしてるのに？」
「敵を倒すためじゃないから」
「武器でしょ？」
「君は？」
「楽器」
「ぼくは、演奏家さ」

○

故郷を離れて、あてのない旅にあったぼくが、たまたま立ち寄った遠い港町に、彼女はいた。旅で知り合った老人の用心棒として一緒に訪れた南蛮寺で、初めて彼女の音に触れた。くびれた琵琶のような形をしていながら撥ではじくのではなく、短い弓に馬の毛を束ねて張ったボウというもので、絃を擦る。唱う女性の声のようだった。
と思ったら本当に女性の声がした。
「あなた、誰？」
昔、平安の宮廷に「玄奘」という琵琶があって人格を持っていたという言い伝えを聞いたことがある。ぼくは驚くこともなく自分の名前を教えた。
「わたしはムーサ・エラトー。あなた、気に入ったわ」
「ぼくも君の音色を気に入った」
「音色だけ？　こんなにスタイルもいいのに」
「見た目も好きだよ」
南蛮寺の教会堂のテーブルの上に置かれていた彼女と話をしていたところに奏者が戻って来た。
「気に入りましたか？」
「きれいな調べですね」

「弾いてみますか？」
言葉の巧みな南蛮人がボウの持ち方や彼女の持ち方を教えてくれた。
押しつぶしたヒョウタンみたいな形の箱を左の肩に乗せアゴで押さえる。箱から伸びた棹を左手で支え指で絃をおさえる。アゴのもとから左手にむかって伸びる四本の絃を右手に構えたボウで擦ると、彼女の喘ぐような声がでる。
「おう。うまいですね。」
それでも初めて聴いたときのような音ではない。
「しばらく弾いてみてください。」
老人がしばらくこの南蛮寺に滞在するというので――なんと盲僧琵琶奏者の老人はキリシタンの宣教師なのだ――そのままぼくもそこで南蛮楽器の稽古をつけてもらうことになったのである。
「この楽器は人の言葉を話すんですか？」
南蛮人の師匠は
「そう聞こえるでしょう？　まるで人の言葉のように弾くことができるんです」
どうやら会話はぼくとだけ成り立つらしい。
「そうよ。わたし、気に入った人としか話したくないもの」
二人きりになったときに彼女は言った。
「あなた、うまくなっているわね。もっと、上手に弾いて。そうするともっとすごいことができるわよ」
「？」
旅にでてから、彼女と出会って初めて心の平安を得たような気がした。
南蛮寺に居候をきめこみ、老人や神父たちの用心棒に出歩く以外は彼女の弾き方の練習で日をすごすうちに、町の人たちにも知り合いができ、頼まれ仕事なども舞い込むようになった。土地の領主の家来衆とも仲良くなった。
いくつかのマドリガーレやコンチェルタートを覚えてやっと人に聴かせられるようになったころ、彼女はぼくを海岸に近い林の中に連れ出した。
「あなたの歌をきかせて」
「そんなのないよ」
「いいの。いま作って。心のおもうままに左手をわたしの首にはわせて。」
言われたままに音をだしてみたがどうしてもよい響きにならない。
「ねえ。あなた心を自分の中に押さえ込んでいるでしょう？」
「そんなことはないよ」
「うそ」
「……」

「まあ、いいわ。でもおぼえておいてね。わたしはあなたの楽器なんだから。あなたの歌をうたうんだから」

南蛮寺に帰る道、おかしな気配を感じた。かすかに遠く、武器の音がする。ケースの中でコンと音がした。

「わかってる」

木の陰に身をしのばせて音のした方をうかがう。下草にまぎれながら人影が見える。かすかな木漏れ日に光るのは槍の穂先だろう。

敵兵。

それほど数はいないから攻撃の下見に出た部隊か、作戦上の任務を与えられた分隊だろう。このあたりだと南蛮寺を経て国主の館の裏手にむかうルートになる。これでも南蛮寺の用心棒だから老人や神父を守らなくてはならない。急いで戻ろうとして振りかえったら、兵士がいた。

瞬間的な判断で刀を抜き首を切る。返り血を浴びないように飛びのきながら、瞬時のことに立ちすくんだもう一人の兵士の首も切る。おそらくこの二人で附近を警戒していたのだろう。あるいは彼女の歌声が聴こえて様子を探りにでてきたのかもしれない。

できるだけ声をあげさせないように処分したのだが、それでも音はするし、先の方の部隊がうごめきだしたのがわかる。走る方向をさとらせないよう、進路を変えながら南蛮寺にむかう。

南蛮寺の鐘の音が聞こえてきた。今日はミサのある日だ。いまごろ教会堂に町衆が集まりだしているのだろう。神父は鏡を前に髭の手入れをし、服装を整えているころだ。老人は楽士たちと楽器の準備だろうか。

ミサの日で開け放たれている南門にとびこみそのまま教会堂脇の庫裏にとびこむ。

「老人！」

「何かありましたね？　島津が攻めてでもきましたか？」

不思議な人だ。こちらが言う前にすべてをわかってしまう。目が見えないだけに特別な能力でもあるのだろうか。森の中の敵兵のことを伝えると老人はくっくっと笑いながら、

「わかりました。あなたは教会堂の信者さんたちに連絡をしてください。」

「わたしは、あなたの用心棒です」

「いいえ。あなたはもう戦士ではありません。楽士です。よろしく頼みましたよ」

そういって杖をとり立ち上がった。

「さあ、いきなさい。」

目がみえないながらも慣れた様子で部屋を出ていく。

「さあ、いくわよ」

「え？」

「わたしを持って。そしてあなたの歌をきかせてちょうだい。思うようにわたしを弾いたら、面白いことがおこるわよ」

いたずら気な響きをもつ彼女のことば。

途中で若い神父と一緒になった。

教会堂に入る。神父と楽士が入ってくるのはいつものことだ。町衆の長老がにこやかに会釈したとき、大きな音がした。いつの間にか閉ざされていた南門に敵兵がしかけてきたらしい。

神父が軽い調子で町衆に告げた。

「今日のミサは中止にします。隣の国が攻めてきました。みなさん一緒に逃げますよ」

もう少し緊張感をいれろよ！　と内心ツッコミを入れる。

一瞬、何がおきているのか理解できなかったらしい。町衆の動きが鈍い。

急いで会堂の扉を閉めて閂をかけたのと南門が破られたのが同時だったらしい。

「急げ！　裏から逃げろ！」

扉に衝撃がかかる。町衆が立ち上がる。そのとき、彼女がぼくに言った。

「はやく。わたしを抱いて。」

ぼくもうすうす気づいてはいた。老人も知っていたのだろう。彼女が戦う楽器だということを。彼女を弾くときにからだ中を駆け巡る血の滾(たぎ)りは、戦場に立ったときのそれに近い。だからこそ、彼女を弾くのは怖かった。戦いと遠いところに居たかったから。でも、しかたがない。戦場に巻き込まれてしまったのだから。彼女が甘くささやく。

「……激しく。声を出させて」

# 第一章　山崎街道

雨が降り出した。こまったなあ。彼女は雨が苦手なのだ。濡れるのはもちろん、湿気にもよわい。しかたなしに街道沿いの阿弥陀堂に飛び込んだ。埃が湿気をすって息苦しい。

「なんとかしてえ……。こんなのやだあ。おうちかえるう……」

彼女が弱気だ。

「無茶いうなよ。雨に濡れないだけましだと思え」

「くう。じゃあ、弾いて。歌わないとやりきれない」

じつは、あまり弾きたくない。これまでの旅で経験済み。彼女の歌声が幽霊の声に間違えられて騒動ばかり。……ぼくが下手なわけじゃないからねっ。

そうはいっても、湿気った中でケースにいれておくのもかわいそうだし。

せっかくなので阿弥陀様にでも聴かせようかと、幸い燃えさしの灯明が残っていたので、火をともしてみた。ふくよかな仏様の顔がぼんやりと浮かび上がる。

彼女をとりだしてカッチーニ作曲のマドリガルを優しく弾く。

雨だし、集落は少しはなれているから、小さく弾けば大丈夫だろう。

数曲弾くとあたりが暗くなってきた。今夜は阿弥陀様と一緒かな。極楽浄土にはほど遠いが。

「もっと大声だしたい」

「ダメ。また騒ぎが起こる」

「んもう……いけずう……」

「どこで、そんな言葉を……」

ふいに、気配がした。あわてて明かりを消す。彼女を抱え、須弥壇の後ろにまわる。

ぱらぱらと音がするのは、笠に雨があたる音だ。だんだん大きくなって途切れた。そして扉がゆっくりと開く。

誰かが中をうかがっている。息をひそめる。彼女の首を持つ手に力がはいる。いつでも構えられるように。彼女のテンションがあがるのがわかる。

少し開かれていた扉が、押される。明かりが漏れる。どうやら提灯をともしているらしい。

「ハテ。怪しげな音が聞こえたが。狐狸が歌うか、妖怪が経読むか」

殺気のこもったおどけた言葉。

提灯をかざして人影が入ってくる。旅の道中に使う携帯用の提灯。持ち主の家紋が付いている。

……よく、知っている家紋。

「サテ。隠れても尻尾がでているぞ」

彼女を弾く。ガリレオ作曲のマドリガーレ。
「奇妙な音よの。何ヤツ？」
彼女を弾きながらゆっくりと、姿をさらす。
笠をかぶったまま高く提灯をかざした相手の目がぼくをとらえた。その目を見返しながら一曲奏でて彼女をおろす。にっこり笑って語りかける。
「やあ」
「なんだ。お前か」
「そんだけ？」
「何か不満が？」
「いや……べつに」
「そうか。それの音だったか。それ、なんだ？」
「南蛮の楽器だよ。てか、久しぶりの再会なのに、なにその態度。もっと驚くとかしようよ」
「わあ、いつだったか家の誰にも言わずに黙って勝手に家をでていった生き別れの迷惑な弟じゃないかあ。げんきでいたか。びっくりしたあ」
「あ、はい。わかりました。ぼくが悪かったです。ごめんなさい」
実をいうと、ぼくの実家はここからそう遠くはない。家を出た者としてあまり近づきたくはなかったが、京に出るにはこの道が最短だったのと、その……やっぱりふる里を一目みたいという気持ちがありましたっ。
実家は近くにたくさん居る小領主の一人で、将軍の奉公衆も務めた家柄だ。ただ、ぼくが生まれる前に始まった戦争以来続いている争乱で、領地付近に手を出してくる大名とよろしくつきあわないと大変なことになるので、
「オレはいまは左京大夫さまと契約している」
とは兄のことば。左京大夫とは近江国の大守で現在、将軍の二条殿の側近として力のある有力大名だ。先代が人格者として慕われていた。
「それで兄さん、なんで、こんなところに？」
「おう、それよ。で、話す前になんだ、お前、そりゃなんだ？　家を出てから何やってんだ？」
「天下放浪の旅芸人だよ。南蛮楽器弾きながらの」
　　ダン！　カキン！
言い終わるか終わらないか、いきなり兄が刀を抜いて襲ってきた。反射的に手が刀を取って、受けた。兄の目が鋭くぼくの目をのぞく。
「ずいぶん腕のたつ芸人だ。」
冷ややかに笑って刀をおさめた。
「でも、戦うのはやだよ。血をみるの、キライなんだ」

彼女と巻き込まれた、あの血にまみれた悲惨な事件は思い出したくないし、語りたくもない。もう人を斬るのはやめたんだ。

「宝探し、やらないか」

「どういう展開？」

「革嶋越前殿を覚えているか？」

「ああっと……あの責任感のつよそうな、娘にだけは甘いおっちゃん……で、あってる？」

「そうそう。いまウチと一緒に左京大夫さまに仕えてるんだがな。つい先日、腹切って死んだ」

「え？」

「将軍家にな、代々伝わる宝物があってな。先日それが盗まれた」

「その責任をとらされたわけ？」

「二条殿が近衛殿のご息女をいただくことになってな。その婚儀の品としておさめるものだったんだ」

「その宝物をさがせと？」

「お前、父上が大切か？」

「きらいじゃないよ。」

父はぼくを兄よりも可愛がってくれていた。黙って家を出たぼく。父を思うと胸が痛む。でも、父のその豊かな愛情がぼくに出奔を決意させたとは思っているまい。

「次に狙われるのは父上だと思うんだ。」

「どういうこと？」

「いま御所様――二条殿を左京大夫様がお助けしているわけだ。そこに至るまでのゴタゴタは知っているだろう？」

「まあ、何となく。細かな裏事情までは知らないけど」

「まさにその裏事情でな、二条殿を貶めて甥にあたるお方を将軍にしようとする一派がいるわけだ。今回の宝物紛失事件は、二条殿を困らせるためなんだ。そこで、まずは婚礼の段取りを指揮していた左京大夫様を失脚させようとしたんだな。そのために直接の管理責任者の革嶋越前殿が左京大夫様の身代わりに腹を切ったってわけだ。」

「忠臣だねえ。最愛の姫はどうなったんだろう？」

「左京大夫様の嫡子、四郎殿がご執心でな。どうやらその方面での策略もあるらしい」

「は？」

「敵の一派が切腹のどさくさに姫を手に入れて四郎殿に与えて味方につけようと、な」

「親子の仲、悪いんだ？」

「だが、姫は家来に守られてどこかに落ちのびたそうだ」

「で、宝探しの話は？」

「うむ。幸いというかなんとか、というか、これはヨイチのヤツの手柄だが、近衛殿には宝物を探し出す猶予を五十日間いただいた」
「ヨイチって……」
兄さんの親友。
「ああ。お前のあこがれのあいつな。あいつの母方の実家が、そっち方面に力があってな」
「……いま、どうしてるの？」
「ヨイチか？　いまは二条殿の側近さ」
「出世したね…。領地を守るために権力者におもねるどっかの誰かとは段違いだねえ」
「生まれがちがうの。御落胤なんだから」
「案外、兄さんはあの人の家来になるかもね、将来」
「もう家来みたいなものだ。まあ、それでヨイチとオレとで宝物を探すことになったのさ」
「みつからなかったら？」
「父上が責任とって腹切ることになる。左京大夫さまが父に命じた仕事だ。実際はヨイチとオレとで探すんだがな」
「だから、手伝え、と？」
「そう。旅芸人にぴったりの仕事だろ？」
「どこが!?」
「宝物っていうのがな、〈初音の鼓〉なんだ」
「ってアレ？　千年生きた狐の革で作られたっていう楽器？」
九郎判官源義経公が兄頼朝公と仲が不和になり、京を追われた。そのときに愛妾静御前と別行動をとらねばならず、自分の形見にとその鼓を渡したところ、革にされた狐の子が親を慕って義経公の家来佐藤忠信に化けて、静御前に付き従って守ったので、再会の後に義経公が褒美として狐に自分の名前と鼓を与えたって話がある。以来その鼓を〈初音の鼓〉と呼ぶ。
「河連法眼館に攻め入って来た敵をやっつけたあと、子狐がその鼓をくわえて空を飛んでどこかに消えて行ったんじゃなかったけか？」
「そう。それ」
「将軍家が持ってたんだ……。って、それを探せと？」
「楽器弾きなら見つけられるだろう？」
「いや、それ、おかしいから」
とかいいながら、ひょっとして彼女がいれば、見つけることができるかもと思っている自分がいたり。
「探して、くれるよな？」
兄の笑顔。ったく調子のいい。
「気をつけとくよ」

「そうか。見つけたら……そうだな。父上に連絡しろ。たぶん八幡の家のほうに戻っているだろう」

「ぼくから？　いいのかな？」

「大丈夫だ。お前のことずっと心配してたからちょうどいい。顔を見せてやってくれ」

ぼくと兄とは双子だ。ぼくが弟。昔気質の父にぼくら兄弟はかなり鍛えられた。剣術だの馬術だの弓術だの水練だの謡だのなんだの。さっき打ち込んで来た兄の刀を反射的に受け止めることができたのもそのおかげ。

ぼくらは競うように、というか競って腕を上げ続けた。さっき話にでていたヨイチとか、ほかにゲンザ、マンスケとかも競った相手だ。

しかし、そうなるといろいろ面倒なことがおこる。そう。家督相続の問題。父はぼくを可愛がってくれていたが、父のようにはなれない。それは兄に才覚がある。だから身をひいた。家をでた。そして彼女と出会った。

「その南蛮楽器はどうしたんだ？」

「うん……まあ、もらった」

「バテレンにか？」

「そんなとこさ」

「京の近辺、堺ですら、見たことがないな」

「西国でね。出会った」

「遠いところまで、いったんだな」

少し、うらやましそうな顔をする兄。

「南蛮楽器を聴かせてくれ」

ま、いいか。傍らで静かに話を聞いていたであろう彼女を手に取る。

「お兄さん、すてきね」

「ふん」

フォリアを数曲、弾いてみた。兄は静かに聴いていた。雨足が遠のいてゆく。

曲を聴いていた兄のからだがビクンとはねた。刀をとる。

だれかが、走ってくる。静かに曲をとじた。

チュチュチュチュチュという音の軽さ。若者だろう。ズチャチャチャという響きは男が大勢。濡れた地面の音が気持ち悪く音をたてる。

兄が明かりを消して御堂の扉の脇に控える。ぼくは迷ったけど彼女が戦いたそうだったので、そのままボウをおろして待つ。

軽い足音が消えた。御堂の前に止まったらしい。続く鈍い足音がとりかこんだようだ。

刀を抜く音。扉の隙間から様子を見ていた兄が一瞬の間に手をのばして誰かを中に引きずりこんだ。あわせて、ぼくは低絃を響かせる。彼女が吼えた。

波動が堂内に踏み込もうとしていた男たちを襲った。

男たちは外に吹き飛んだ。兄たちも壁にぶつかって倒れた。

彼女を仏様の後ろに置いて、

（「ちょっとお！わたしも戦いたい～！」）

ぼくも刀を取る。いつしか雨はあがっている。

「なんだ、今の？」

さすがは兄。すぐに身をおこす。

「気にしなーい」

横には小柄な若武者姿の者が気絶していた。けっこう美形。

「邪魔立てするか！」

外には武骨なおっさん集団。どちらの味方をするかはいうまでもない。兄と外にゆっくりとでてゆく。

「妙なる調べを邪魔立てする無粋な者にいわれとうはない」

なぜ兄は気取るかなあ。ここで。

「ぼくたちは美しい者の味方なのさ」

ま、ひとのこと言えないか。

ふたりで刀を抜いて構える。雲間から漏れる月明かりに照らされて、双子美剣士登場。

ダっと一人が踏み込んでくるのを跳ね返す。それをきっかけに次々撃ちかかってくるのだが、残念だなあ。ぼくたち強いんだ。

とはいえ、ぼくは人を斬ることはやめたんだ。語りたくないあの事件以降、大刀の刃はつぶしている。でも太い造りでかなりの打撃力。ほとんど金属製の棍棒。これなら、血をみないで敵をつぶせる。

え？　戦うことまでは否定してないよ？　こんな時代だもん。

一方、兄はキレイに人を斬る。かわいそうに、おっさんたちの何人かが腕を切り取られてもがいている。

ほんの数撃で敵戦力はほぼ壊滅。うめき声が気持ち悪い。

あと一人。どうやら親玉らしい。覆面をしている。刀を抜いた。

そのとき雲が月を隠した。漆黒の闇。気配だけがたより。スローモーションで、さぐるように刀と手を動かす。ときおり近くを風が切る。太刀筋で兄かそうでないかがわかる。見込みを付けて左手で突いてみた。ぐうっという音と何かが落ちる音。思わず探ってみる。なんだか棒状のものが手に触れた。と思うまもなく、武骨な誰かの手。胴のあるあたりに刀を降る。

かわされた。

落とし物を拾いつつ、立ち上がるとだれかの背中とぶつかった。飛び退くところを切る刀。
これ、兄だ。
「ぼく」
「おう、悪い」
じょうだんじゃない。兄の刀はマジ切れるんだからね。
そして雲間が広がる。
明るくなった瞬間、敵影を認めて二人で襲う。残念ながらぼくの刀は空振り。兄の刀は相手の覆面を切ったらしい。月明かりに顔が現れる……はずが、
「ちくしょー」
手で覆って逃げ出した。それをみて戦闘不能になっていた面々も退きだした。
「弥陀の浄土を穢しちまったなあ…」
兄、誰に対して気取ってるの？
御堂の中に戻る。兄は美少年剣士が気になっているようだが、ぼくは彼女の方が心配だ。別の意味で。
「ごめんね」
（「ぶう。なんでわたしを混ぜてくれないの」）
「兄さんも一緒にやっつけちゃうでしょ」
（「へたくそ。へぼ楽士」）
「ごめん」
彼女がいうには、上手にひけば、ピンポイントで攻撃できるのだとか。でも、まだそこまで弾けない。
「なにか言ったか？」
「いや、べつに」
彼女をケースに戻す。
兄が気合を入れて美少年剣士を気づかせた。
「大丈夫か？　どこか痛むか？」
「……あなたがたは？」
やや低めの作ったような声。背伸びしたい年頃？
「とおりすがりの正義の味方」
だから兄は何を言っておるのだ。
「やつらは…？」
「追い払ったさ。よかったんだろ？」
「わ、わたし一人で撃退できたものを」
あらあ？　態度悪いよ、この子。

「そうか。獲物を横取りして悪かったな」
にっこり笑う兄。
少年は眼をそらす。ちょっとふくれた感じがなまいきそうでカワイイ。
「あいつら、何者だ？」
お決まりのセリフをはくのはぼく。
「あなたがたには関係ない」
「これに心当たりは？」
さっきの棒状の物。布にくるまれた巻物らしい。
「知らない。関係ない」
「そうか。じゃあこれ、ぼくたちの物にしていいね」
「かまわん」
これを奪われて殺されそうになって逃げてきたのではないか、と思ったのだけど違うらしい。
「兄さん、なんだと思う？」
「？　どれ」
御堂からでて月明かりに巻物を広げる。なんだか人の名前がたくさん並んで、下の方に黒ずんだシミがある。
「や、こりゃ、連判状!?」
「レンパンジョウ？」
一瞬、息を吸って何かを語りだしそうだった兄の口がとまった。黙々と巻物を見てゆく。見終えて口元が歪んだ。にやり、と。
「もーらった♪」
「……べつに、いいけど、何それ？」
「ふふ。とってもいいものさ」
「？」
「ま、お前にゃあ、関係ねーよ」
くるくるくると巻き戻してさっさと懐にしまい込んだ。ふふん、と眼を細めて少年を見る。
少年は唇をきっと結び床の一点を見つめている。
「さて、夜も更けた。今夜はここで寝るか。少年。きみも一緒にお泊まり。べつにおにーさんたち、きみになーんにもしないから」
朗らかに爽やかに兄は少年に声をかけて、さっさと転んでしまう。
「ほれ、弟も寝ろやい」
ぼくは少年を見る。少年がこっちを向いた。きりっとした顔立ち。少し大きめの目の瞳に宿る何かを思い詰めた表情。
「兄さんの言う通りさ。このあたりは休むところはほかにない。夜明けを待とう」

彼女のケースを抱えて、壁によりかかって眼をつぶる。
薄目でみていると、しばらくぼくらを見ていた少年も、やがて横になった。それを見てぼくも少しやすむことにした。ケースの中からコンという音がした。

明け方近く。
少年が目覚めた。ぼーとしていたが、だんだん状況を把握したらしい。ぼくらが寝ているのを確認すると、身支度をして御堂を出て行った。
「朝飯、食わんでいいのかな」
寝たまま、ぼそっと兄の声。
「あの子の勝手でしょ？　てか朝飯ないし」
むくと起き上がった兄は、壁によりかかったままのぼくをチロリと見て、
「付いて行ってあげてほしいなあ」
「なんで？」
「やっぱさあ、気になるじゃん？」
「惚れた？」
「そーゆー意味じゃなくてねえ……」
「何か思い詰めた顔してたね、あの子」
「人の心を音楽でときほぐすのが仕事でしょ、旅芸人さん」
「そうきたか」
「どうせあてのないお宝さがしなんだから、一緒に行ってあげたら？」
「兄さんがいけばいいじゃない」
「そうもいかないのさ。これから行くところができた」
懐を叩いたのは、昨日拾ったアレのことだろう。
「ま、いいけどね。あの子がなんていうか」
「きっと、また襲われるよ。助けてあげようよ」
「へいへい」
立ち上がって刀をさし彼女を背負う。まあ、ちょっと気になる子ではある。
「じゃあ、お宝、よろしく」
兄が笑う。お前の仕事じゃないのかよ。
阿弥陀様に一泊のお礼の挨拶をして御堂を出る。昨日雨が降ったせいか、風が軽い。まだぬかるんだ地面に新しい小さな足あとが続いている。数歩目で立ち止まって力が入っているのは、あたりに散らかっている血まみれ手首のせいだろう。気持ち悪い。ぼくだって吐きそうだ。
「兄さん、後片付けしていけよ。罰があたるぞ」
中に声をかけて、いそいで足あとを追う。血をみるのは、いやだ。

ケースの中でコンと音がした。

足あとは峠の方にむかっている。遠くに少年の後ろ姿が目にはいった。焦るように歩いてゆく。この先は昼でも物騒な暗がりになる。昔、主君の一大事に失態をおかした足軽が恋人と落ちのびてきて、このあたりで狩人をしていたら間違って人を殺し、本当は山賊に殺された義理の父を自分が殺したと勘違いして切腹した、なんて伝説が残るところだ。

あら？　出たよ、山賊。少年を誘拐する気だな、ありゃ。最初、かるく声かけて挑発しながら仲間が囲みをつくっていっている。

お、刀の柄に手をかけたね、少年。山賊は……ん？

「え～、こんな山の中でヤルのお？」

「昨夜、欲求不満のままにさせちゃったからな」

少年を囲む相手はかなりの人数。駆けつけてぼくの刀（型棍棒）で一人一人打ち崩すのも時間がかかるし、疲れる。だから彼女に歌ってもらおう。

刀を抜いた少年。からかうように取り囲む賊たち。少年が強がっているのがわかる。賊たちは手練だ。いたぶろうとしているな、ありゃ。

頭の中で旋律を組み立てて、

「さ、いくか」

まずは和音から。緩やかに、おそく。たっぷりとボウをつかって。

波動が広がる。木々の葉を枝をなびかせて広がる。

手前の賊徒がよろけた。いっせいにこちらをふりむく。よし。

和音を分散させよう。ウォーミングアップがてらアルペジオ。ボウも小刻みに。

波動が泳ぎだす。ゆっくりと歩き出そう。

連中、固まってるな。何がなんだか、わかるまい。ふふふ。

同じように少年も固まっている。多少、被害が及ぶかもな。勘弁。

さあ、主旋律。山賊への打撃のテーマ。重々しく濃厚に、そして快活に楽しく。

空気が渦を巻く。彼らとの、まだすこし遠い距離を旋律が走る。うねるように。鞭のように。

まずは手前の賊をうつ。左右の賊をうつ。奥の賊に襲いかかる。

正面から波動をうけて、奥の賊が飛んで山肌に激突した。

ついでに少年も打ち据えた。このあたりコントロールがきかないのが未熟なんだよなあ。

和音でしめて、すこし距離をつめよう。

くらくらと賊がたちあがる。刀をぬこうとしているな。逃げるかと思ったのに。

「そうこなくっちゃ」

彼女が朗らかに言う。このお転婆め。

賊の一人が少年に手を伸ばした。山賊への打撃のテーマ、再奏。第二撃。

ま～た少年も一緒にふきとばしちまった。アザだらけにしちまうかなあ。きれいな肌なのになあ。

そうこう弾いているうちに、やっと現場に到着。

演奏しながらなので、スピーディーな動きができなくて、いまひとつ格好が悪い。

アゴで彼女を押さえているから話せないし。だから眼力で勝負だ。

地面に転がったままの少年の前に立って、賊徒を一にらみ。視線が交差。

「く。引け！」

勝った。ついでだ。追い打ちのテーマ。最後に和音を連続させて結び。逃げる連中を波動が後ろから追い、転ばせる。二人ほど崖から落ちた。

ボウを持った右手をかざして決めポーズ。

（「ふう。気持ちよかったあ」）

「よかったな」

（「でも、もっとしたかったな♡」）

「また、こんどね。少しはうまくなってた？」

（「すこしはね。でもまだまだね」）

「そうスか」

（「え、もうおしまい？」）

彼女をしまう。ケースの中でコンコンうるさい。

「なんなのだ！　いまのは！」

少年が叫ぶ。

「見ての通り、聴いての通り」

「南蛮の魔術師か、お前」

「いや。単なる日本の旅芸人」

「今の衝撃はまともじゃない！」

「あのさあ。ごちゃごちゃ言う前にさあ。言うことあるでしょう？」

「なんだ？」

「賊にからまれてるとこ、助けてあげたんだよ、ぼく」

「はあ？　こんな泥だらけにしてくれて？　助けた？　どこが」

「まあ、それを言われると」

「だいたい助けを頼んだ覚えはない！」

少年はむすっと口をへの字にしてそっぽを向く。ふくれた感じがちょっとかわいい……。

「とにかく、立ちな」

手を差し伸べてみた。

「うるさい。大きなお世話だ！」

「小さな親切のつもりだけど」
「それが、うるさい！」
一人で立った。ふん、と歩き出す。あとを追うと、
「ついて来るな！」
「旅は道連れ」
「断る！」
「また襲われるよお」
「一人で平気だ！」
「平気じゃなかったでしょお？　昨夜といい今といい。なんだかさ、心配だから、送って行くよ」
「ヒマ人め」
「そう。ヒマなの。退屈で退屈で。天下御免の退屈男（たいくつおとこ）」
「私は慰（なぐさ）み者ではない！」
「あたりまえじゃない。あ～……あ、じゃ、契約しない？」
「契約？」
「そう。ぼくはねえ。基本、旅芸人ではあるけれど、サイドビジネスで用心棒（ボディーガード）もしてるんだ。あ、ただし人は殺さないよ。血、見るの嫌いだから。でもさ、さっきみたいに襲われたときは、かならず撃退してあげる。だから、さ。どこまで行くかしらないけど、道中の用心棒として、やとってよ。」
じっと考え込む少年。その顔立ちを見ると、全体の見た目より年上なのかもしれない。
「やとってくれたら、南蛮音楽、無料聴き放題サービスしちゃうよ」
ちょっとの沈黙。
「……でだぞ。」
「ん？　なに？　きこえない」
「……見つかるまでだぞ」
「何が？」
「わたしは探し物をしているのだ。それが見つかるまで、しかたがないから、用心棒としてやとってやる！」
「おありがとう、ござ～い。では、早速（さっそく）一曲」
「いらん！」
「でも契約の記念に」
「こんな山の中、風情（ふぜい）もなにもないところでか？」
「それもそうね」
「いくぞ」

少年はスタスタ歩き出した。

# 第二章　西国街道

峠を越えると集落があって、飯屋が店を開いたところだった。そろそろ往来も増えてくる時分。だって京と西国とをつなぐメイン街道だからさ。

「お腹、すきませんか？　ご主人さま」

「……」

朝からまだ、ほんのわずかな付き合いでしかないのだが、こいつの性格が少しずつわかってきた。素直でない。お腹すいてるのだろうに、返事ができない。

「飯屋によりましょうよ。少し、仕事させてくださいよ」

「仕事？」

「旅芸人ですよ、ぼく」

飯屋はけっこうにぎわっている。こいつを席に座らせて亭主に朝粥を注文したあと、営業の許可をもらう。南蛮音楽なのでむこうも興味を持ったらしい。彼女をとりだす。あわててかくれる少年。

「何やってん？」

「おまえ、この飯屋をふきとばす気か？」

「ああ」

苦笑。山の中の戦いが軽くトラウマになったらしい。

「だいじょうぶですよ。これは楽器ですから。奇麗な音が出ます。ご主人さまも聴いてみてくださいね」

店の真ん中付近に場所をとる。彼女を出した瞬間に注目をあびる。軽くチューニング。その音がますます注目を増やす。ご主人さまもあたりを見渡して安心したのか、席に直る。

息をすってまずは口上。

「と～ざ～い。おたちよりのみなさま。朝も早くに旅のお仕事おつかれさまでございます。今日の長い旅路の前に心にひとときのやすらぎを。旅の安全契約成立商売繁盛家内安全を。手前、花の都のフロレンテ丸が、南蛮音楽にてみなさまのためにお祈り申し上げますれば。お耳をお貸しいただきたく、そのため口上、さよ。」

一礼して彼女を抱く。絃にのせたボウをやさしくすべらせる。朝だからそう激しい音楽でないほうがいい。最初はさわやかな調べ。フレスコバルディ作曲のカンツォーナから数曲。本当は合奏がいいんだけど。残念だな。営業のたびに、そう思う。老人の用心棒をして府内の南蛮寺にいたころが、いつも思い出される。あのころはリートやオルガンと合奏したっけ。

静かな曲でおちついたところで少し華やかな舞曲。最後はトッカータで閉めて、終演。お代は聴いてのおかえり。けっこうはずんでくれた。これで朝食代はＯＫ。ご主人さまの分までね。とはいうものの、演奏後、好奇心に満ちた人々の応対で飯は食わずに時間を食ってしまった。

「はやくしろ」

「待ってくださいよ。すぐ食っちゃいますから」

いそいで粥を流し込む。といっても、熱いぞ、これ。

「遅い」

「んなこといわれても…」

飯屋を出ようとしたとき、声をかけられた。

「そこのお二人」

ぼくより少し年上らしい、精悍（せいかん）な武士。

「面白いものを聴かせてもらった」

軽く会釈。ご主人さまは仏頂面（ぶっちょうづら）。

「これからどちらへ行かれる」

ご主人さまをうかがうと腕を組んでそっぽを向いている。

「道を下って参ります」

「では同道（どうどう）してよろしいか」

ご主人さまをうかがう。

「……勝手にしろ」

「よろしゅうございます」

「そうか。わたしはヤスケと申す。この子はユスト」

みると十歳くらいの子が後ろにいる。

「南蛮音楽が気に入ったらしい。道中、相手をしてやってくれんか。ほれ」

ヤスケが子供の背中を押す。

「こんにちは」

腰をおとして子供目線でごあいさつ。

「こ、こんにちは」

はにかんでいるのが、かわいい。

「いくぞ！　はやくしろ」

鋭いご主人さまの声にびびってる。

「ご主人さまぁ…、おとなげないっすよ、こどもびびらせて」

「ふん」

ヤスケという武者とこの子に従者四人と一緒の旅になった。ヤスケはこの先の土地の領主の家臣で、主命（しゅうめい）でユスト君を迎えに出かけたらしい。ユスト君のお父さんが熱心なキリシタン

で、南蛮音楽も昔から耳に馴染んでいたらしいが、さすがに彼女の音は初めてで、興味を持ったとのこと。

ぼくがユスト君と話しているもんだから、ご主人さまは不機嫌である。

「失礼だが、あなたはあの楽士とどういうカンケイなのか？」

当然の疑問だろうなあ。ヤスケがご主人さまに質問する。に、しても質問のニュアンスが微妙に下品な感じがするのは気のせいだろうか。

「……」

ご主人さまぁ、もう少し愛想よくしてくださいよ。

「フロレンテ丸殿のことばだとご主人さまということだが」

「……」

もっとも不機嫌というより警戒しているというほうがいいのか。

「なにゆえ旅に楽士を連れていなさるのか？」

「……そなたには関係ない」

「うむ。たしかに。失礼申した」

「申し訳ありません。ご主人さまは無口なもので」

われながら無理なフォローだと思う。

川沿いを下っていくつか集落を過ぎたあと、にぎやかな街に着いた。丘の上に領主の館が見える。

「お城下に南蛮寺ができてな。これからこの子を連れてゆくのだが、もしよければそこで少しばかり休んでゆかれないか。いや、それより南蛮楽器の演奏を所望したいのだが」

どうやら、ヤスケが使えているのはここの領主のようだ。

「ご主人さまぁ。寄らせていただきましょうよ」

探し物をしているというご主人様さまだが、行くあてがないことくらいは気づいている。

「……」

口をへの字に曲げて不機嫌そうにぼくを見るが、拒否はしていないようだ。どちらかっていうと、素直にうんといえないで照れてる感じ。

「じゃあ、お言葉に甘えまして」

ヤスケが爽やかに笑ってユスト君がはにかむように笑った。

○

「老人！」

ユスト君を連れて行った先でぼくを出迎えたのは、なつかしい老人だった。

「おや。これは……フロレンテ殿」

「お知り合いなのか？」

ユスト君の疑問をヤスケが聞く。
「いまのご主人さまの前のご主人様です」
「この方にはたいへんお世話になりました。いまここにこうしていることができるのもこの方のおかげなんですよ」
「ほう」
ヤスケが目を剥く。ユスト君がうらやましそうな顔をした。今のご主人さまも複雑な表情を浮かべている。
「そうそう〝恋人〟はお元気かな？」
ご主人さまが息を呑んだのが聞こえた。
「〝恋人〟？」
ヤスケが興味深げな声を上げる。
「これのことですよ」
彼女のケースを軽く叩く。中でコンコンと音がした。「これ」が不満らしい。
「そうだ、久しぶりに聞かせてください。ここにはオルガンもある。わたしもリートを弾きましょう」
夕方から演奏会をひらくことになった。今夜はここの教会に泊まる約束もできた。
「昨日があんなでしたから、よかったですね。ハライソハライソ」
あてがわれた部屋の隅で壁を睨んでいる仏頂面のご主人さまに語りかける。
「ところで、ご主人さまぁ」
「……」
肩が少し動くので返事とわかる。
「ご主人さまの探し物って、どこにあるか見当はついているんですかあ？」
「……」
「じつはぼくも探し物があるんですよね。ちょっとしたお宝」
「……」
間がもたないので彼女の手入れでもしよう。ケースを明ける。
（「ふふ。〝恋人〟ですって♡」）
「〝恋人〟ねえ……」
彼女の声はご主人さまに聞こえてないだろうから、独り言のように彼女と話さなくてはならない。けっこう気をつかう。
「たしかに女性的なフォルムだし、声もきれいだし。大好きだしな」
（「うふ♡ありがと」）
ボウをとって軽く音をだす。
「優しくなでるといい声あげるし」

（「ぽ♪」）
「そ、その楽器は、なんなのだ？」
やっとご主人さまが反応してくれた。
「南蛮楽器ですよ～。ビオロンというんです」
「そうではなくて。山の中でのことだ。あれはいったい……」
「内緒ですよ、あんなことまでできるっていうの」
（「あんなことってなによ♭」）
「黙っててね」
（「ぶう♯」）
「ちょっとした南蛮の魔術です」
「楽器に魔がとりついているのか？」
「さあて？　確かなのは、ぼくがこの楽器を愛していることと、この子はぼくを裏切らないということです」
（「ありがと……嬉しい♡」）
「でも、まだ、未熟で、申し訳ありませんでしたご主人さま。敵と一緒にふっとばしちゃいました」
「よくわからん。ただ……その……キレイな音色だな……」
「ありがとうございます」
ご主人さまはどうやら恥ずかしがりやらしい。きっと山の中で助けたことの感謝をしているのだろうと好意的に解釈しておこう。
夕刻の演奏会までに老人やここの教会堂の楽師との合奏練習などをしたりユスト君が様子を見にきたりした中、ご主人さまは黙々としていた。それでも演奏会には顔をだしてくれた。
演奏は老人のリート、神父のオルガンで、モテットを数曲。後半は参列した信徒の町衆が合唱として参加して賛美歌を唱えて終わった。ヤスケが深編笠の武者を連れてきていたが、ひょっとするとお忍びの領主かもしれない。
「久しぶりの合奏。やっぱり、いいね」
（「楽しかった♪」）
彼女も満足そうだ。
「楽士殿」
部屋に帰る廊下でかけられるバリトン声。ヤスケだ。
「いかがでした？」
商業スマイルで訊く。
「きれいだな。不思議な響きだった」
「ありがとうございます」

「どうだ。うちのお殿様に仕えないか」
やっぱり領主を連れてきていたか。
「楽士としてですか？」
「それだけでは、ない。そなた、実は相当達者であろ」
トン、とさしている刀の柄を叩いてみせた。
ポーカーフェイスで応えよう。
「まだまだ未熟です。それにぼくにはご主人さまがいるので」
「あの若者か？　あれは……」
「ヤスケさん。ぼくは今が気に入っているんですよ」
笑みを顔に張り付かせて、ヤスケの目をみて答える。少しの沈黙。
「そうか。惜しいな」
「御領主様にお詫び申し上げてください」
爽やかな笑顔で答えよう。
ヤスケは去って行った。縁があればまた会うこともあるだろう。

○

翌朝。遠い山並みの向こうが白々と明けて一日の好天が思われる中、教会堂の清掃と礼拝が行われている音を聞きながら、ぼくらは出発した。老人との別れにわずかな感傷があったものの、いまはこの若者と契約中だ。無愛想で無口なご主人さまの用心棒として、旅をともにする。兄から頼まれた宝探しの用事もあったけど、あてもないからこのままの旅を続けよう。
そういえば、ご主人さまも探し物があると言っていた。まあ、なんとなくわかるんだけど。
だってねえ。ご主人さまを襲った賊と、その賊の持っていた連判状。それを嬉々として持ち去った兄。ということは、ご主人様、きっと関係者だわ。だから、兄はついてゆけと言ったのだろうし、たぶん、探し物も同じじゃないかなあ。
〈初音の鼓〉。
単なる楽器ではなく、狐の精が憑いている楽器。ご主人様は彼女のことを「魔がついているのか」と聞いた。楽器に魔が宿ることがすぐに連想できたことも、ご主人様の探し物が〈初音の鼓〉である可能性を示すだろう。しかもこの若さからみるとヨイチの手の者か、革嶋の家の者に違いない。ひょっとすると……
「どこにいきましょうねえ？」
「堺」
「へ？」
「人の集まるところに、探し物があるかもしれない」
振り返りもせず、歩いてゆく。

たしかに天下の珍品万物が集まるという堺ならお宝も流れてくるかもしれない。
川沿いの街道を下る。予想通りの好天で気温も高くなってきた。ご主人さまも、強がっているけど、ちょっとつらそう。
「休みませんか？」
支流の流れ込んでいる河原に臨む土手のほとりの木陰に腰をおろす。隣にご主人さま。汗をかいていても、香ばしいのは若さゆえか。うらやましい。いや、ぼくも若いけど。
水筒の水もぬるんでいる。
それでも川を渡る風には涼気が宿っていて、ほっとする。
少しの間、風の音を聞いていた。木擦れが音楽に聞こえる。彼女と洋楽ばかりを弾いていたから、少し新鮮。こういう音楽もあったのだな。
彼女を出してみる。
（「どうしたの？」）
黙って、曲を作ってみる。木擦れの音はボウを小刻みにふるわせてトレモロで。渡る風の音はポルタメントをたっぷりきかせてビブラート。
（「あ、ちょっと、嘘…」）
彼女がめずらしい声をあげた。
波動が広がってゆく。でも攻撃的な波動ではない。ご主人さまは波動をうけて背筋をのばして遠くをみる。そのままゆっくり目をとじる。
あ、ご主人さまってまつげ長っ。ツンとした鼻。ちょっと色っぽい唇とアゴのライン…。
少しだけだけど、きままにあたりの景色を音楽にしてみた。
ぬるやかな午後の風と流れる川の水。そして木陰に休む美人。
そのとき。
気配がよぎった。
ふりむく。
年上の男がいた。
「なにやつ！」
「それはこちらのセリフだ。いきなり音をだして。魚が逃げてしまったではないか」
美形というよりは知的な、そうヨイチくらいの、つまり五つくらい年上の、落ち着いた男。
知的に見えるのは額が秀でているからだろう。釣りの道具をかかえている。ただし魚籠からは魚ではなく、黒っぽい木片がのぞいている。
「珍しい楽器だな。南蛮のか？」
「いかにも」
彼女をしまいながら答える。
「キリシタンの者か」

「いや。単なる旅芸人。もっとも、今は副業絶賛営業中」
「副業？」
「剣客商売」
「そなたが有名な秋山殿か？　そんな歳には見えぬが？」
「あ、いや、そうじゃなくて……すみません。ぼくが悪かったです。はい」
「表面だけのギャグは簡単にすべるぞ」
「はあ……ごめんなさい……」
ご主人さまが目を丸くして見ている。とゆーか、マジメに返されるとは思わなかった。
「だが、いい音だった。南蛮の音は珍しかったが、それより、この長閑な午後を思わせる響きがなによりだった」
何者だ、こいつ。
「おありがとうござい」
「お代はなしだがな」
「なん…だと」
「だから、そういうギャグはやめろといっておる。南蛮音楽士は死神か？」
わかるこいつもこいつだぞ。てか、お前だって表面的ギャグしてんじゃん！
「まあ、それでもせっかくだからこいつをやろう。だから我が家に来て一曲たのむ」
といって魚籠から出ている黒っぽい木の塊をとりだした。
「なんスか？　え？　これって…」
「どうやら大黒天の木像らしい」
「え？　これをお釣りなさったんですか？　ほんとうに？　そこらの破れ寺から盗んだのではなく？……ごめんなさい。刀の柄から手ェはなしてくらさいっス」
「おまえにやろう」
「いや、持っていたほうがいいっスよ。大黒天を拾えば千人の頭になると言いますし」
「たった千人？　天下には千人以上いるだろう。ますますいらん。やる」
たいしたもんだ。天下を獲る気だよ、この人。
「わたしも人から千人もらおうなんて思いませんからねえ」
「じゃあ、捨てる」
と、この人は大黒天像を川に放り込んじゃった。ぷかぷかと下流に流れゆく大黒天像。
「いいんスか？」
「かまわん。それより、どうだ。これから我が家にきて母のために一曲弾いてくれないか」
ご主人さま――あいかわらず不機嫌そうだ――の様子をみながら
「いやあ。でも、先に行く予定もありますんでね」
「どちらに行かれる」

「堺の方へと」
「で、あれば今日は我が家で休んでゆかれよ。なあに大物浦にむかう道筋だ。明日、大物浦に出て船にのれば夕方には堺に着く」
「あー…と」
横目でご主人さまをうかがう。勝手にしろという顔つきだ。
「じゃあ、お言葉に甘えまして。宿代は南蛮音楽聴き放題ということでよろしいでしょうか」
「かまわん。母に聴かせてやってくれ」
魚籠を下げて歩き出す。かなり、腕がたちそうなやつだ。暢気な釣り帰りに見えて襲われればいつでも応戦できる殺気を宿らせている。
「お前というやつは……」
ぼそっとご主人さま。頭をへこへこしながら詫びる。
「でも、これで今夜の宿も確保できたということで」
「む」
少し、距離があった。木陰で休んだときはまだ高かった日が傾き、あたりの景色がすこし赤くいろずむころ、男の家についた。背後に竹藪のある大きくも小さくもない民家。もし特徴をいうのであれば、庭の片辺にある夕顔棚だろうか。
「ただいま、戻りました」
「おかえりなさい。重兵衛殿」
奥から年配の女性の声がする。
「客人をお連れしました」
「こちらへ」
「上がられよ」
お？　言葉つきが変わってないか？　視線を感じるとご主人さまが見ていた。心配げな視線。だいじょうぶ、とうなづく。心配が疑いに変わった。なにそれ？　信用ないの？
奥の座敷に妙齢の婦人が座っていた。気だるそうに脇息によりかかっている。釣果を久吉という名の召使に渡した重兵衛が婦人の前に座して挨拶をする。われわれは部屋を仕切る唐紙の外にひかえる。
「そちらは」
「たまたま行き会いました旅の主従で、面白いものを持っておりましたので、母上様のお慰みにと同道していただきました」
「面白いもの？」
「南蛮の楽器でございます」
婦人が一瞬顰蹙――眉をひそめることね――したものの、しずかに声をかけてくる。

「倅が無理をいったのであろう。すまぬことよの。どうも腰をいためての。ここしばらく動くことがままならぬ。出迎えもせずに失礼であった」
「いえ、こちらこそそちらさまのお言葉に甘えましてご無礼いたします」
平伏する。ご主人さまは軽く会釈をしたまま婦人を見つめる。それでいい。
「こちらが手前の今の主で、わけあって旅にでております。事情で名をあかすわけにはまいりませぬが、わたくしは警護を勤めております者で、南蛮楽器に心得がありますゆえ、普段はフロレンテ丸と名乗りまして芸人の真似事をいたしております」
婦人が値踏みするようにご主人さまを見る。その視線をはねかえすようにご主人さまがアゴをひく。寸時の沈黙を重兵衛がやぶる。
「さて、まずは釣ってきた魚で夕餉といたしましょう。旅のお方、今夜の部屋にご案内いたそう。夜になったら南蛮楽器を聴かせてください」

「キャラ、かわるね～」
通された一室で重兵衛に思わず言ってしまう。
「言うな」
少し苦い表情をした。
「浪宅ではあるが、由緒ある家の大刀自だ。あの風格だと自然とこちらも身が引き締まってああなる」
「よく、わかります」
「そなたもキャラがかわっていたぞ」
「そりゃあ、ね」
そこに召し使いが風呂がわいたと告げにくる。
「汗をかいたであろう。まずは流されよ」
とご主人さまをみる。
「い、いや、わたしは…」
「遠慮はいらない。あとでフロレンテ丸殿にたっぷり南蛮音楽を聴かせてもらうゆえ」
「遠慮ないの、あんただろ」
「久吉、久吉」
「へい、旦那様」
「湯殿にご案内せよ。あと着替えもな」
「へい。どうぞ、こちらへ」
「だから、わたしは……」
少し頬を赤くしてご主人さまは遠慮する。

「ご主人さま。ご好意はうけましょう。なに、このフロレンテ丸がたっぷり演奏して御礼いたしますからご心配なく」
「いや、そうではなくて……」
「行きますよ」
強引に腕をとって立たせる。
「お入りになっている間は、外を警護しておりますね」
重兵衛に聞こえないようにささやく。
「！」
鋭く睨むのをスルーして笑顔。
「こちらでございます」
久吉と呼ばれた召し使いが裏手の湯殿に案内してくれる。そこにも夕顔棚ができている。
「さ。ご主人さま」
なかば強引に押し込み、戸口の前に刀を肩によりかからせて、いかにも警護然として座る。
久吉が着替えを持って来た。
「ご主人さまァ、よろしいですかあ」
様子を伺って戸口を少しあけると湯船にとびこむ音。
「お着替え、おいておきますね」
湯殿の中に入って壁の棚に乗せる。
「あ、すいません。漬かられている間に、ぼく、軽く汗流しますね。ごめんなさい」
さくっと脱いで裸になる。
「な、な…」
あわてるご主人さまを無視して湯をからだにながして軽く手拭で擦る。もういちど流して、水気をとって着替える。
「お背中、ながしますか？」
「い、いらない！」
「失礼いたしました」
すぐに外にでる。はあ、さっぱりしたあ。
ややあってご主人さまが出てくる。湯にあたったのか頬が桜色をしている。
いきなり睨まれた。上目使いで。なにか言いたげに口をとがらせているが、ことばがみつからないらしい。
だからにっこり笑ってあげる。
「さっぱりしましたね。夕餉もそろそろできるみたいですよ」
さっさと母屋にはいってしまおう。
あとからむすっとしてついてくるご主人さまがかわいい。

部屋にもどって彼女の確認。
（「どうしてひとりにするのよ」）
彼女はお怒り。
（「なにかあったらどうするの？」）
「お湯に浸けるわけいかないからなあ」
（「ひとりにしないで」）
「さびしかったかな。もうすぐ歌えるからね」
「お前は楽器と話せるのか？」
ぶっきらぼうにご主人さまが訊ねてくる。
「そう、見えます？」
「……」
睨(にら)んでる。
「よい音楽を演奏するにはね、楽器と心を通(かよ)わせることが大事なんですよ」
「通っているのか？」
「さあ、どうでしょう？」
ケースのふたをしめる。コンと音がする。
「ただ、お代をいただけるくらいには、演奏できますよ。もっとも、ここは宿代(やどだい)でチャラですけど」
笑ってごまかす。
久吉(ひさよし)が夕餉(ゆうげ)が整ったと言ってくる。
婦人と一緒の食事かと思ったが、意外と重兵衛だけだった。まあ婦人は古風な方らしいから当然かもしれない。
「大黒様以外にも釣っていたんだね」
鮎(あゆ)が旨い。
「ここからは少し遠いが、なかなかの穴場(あなば)なのだ」
「天下を獲る気？」
「もちろんだ」
「いいね、そういうの」
「お前は？」
「天下には興味がない」
「面白いな。腕は相当に立つだろうに」
その目に皮肉な光を一瞬宿らせた重兵衛。
「そこそこ自信はあるよ」
「手合わせしてみたいものだ」

「そういうの、嫌だな」
「なぜだ？　自分の力を試そうと思わないのか？　天下取りをめざさないのか？」
「血をみるのは、キライ。それに天下を獲ってその先どうするの？」
「戦のない世の中にするというのはダメか？」
「あなた、そんなこと思ってないでしょ？」
「……」
「別に批判はしてないよ。闘争心というか競争心というか、それって大切だよ。でも、そういうのではない生き方を探してみたいな、と思うんだ」
「どういう生き方なんだ？」
「それを見つける旅をしているというのが正直なところかなあ」
「それが南蛮音楽なのか？」
「そうかも。そうそう、母君さまに聴かせるといっていたけど、聴いてくれるのかな？　古風そうな人みたいだけど」
「それは大丈夫だ、というか、近所の面々に声をかけてるから、そろそろやってくるぞ」
「は？」
「今日は月並みの日だ」
「いいのか？　念仏会に南蛮音楽なんて？」
「まあ、余興だな。普段と少し違うのが、いいのだ」
「……ま、いいけど…」
「そういうわけで、すこし念仏がうるさいですが勘弁してください」
重兵衛はご主人さまに頭をさげる。むしろご主人さまのほうが驚いていたり。
「あ、ああ、うん…」
そのあとはとりたてて話すことでもない。夕餉がすんだころ、近所の面々が集まり、紹介されて南蛮音楽を数曲弾くと、あとは念仏、「なんまんだーぶ、なんまんだーぶ」の合唱となってひとしきり騒いで解散となる。
「なんなの、あれ？」
とは彼女の疑問。
「ミサみたいなものさ。月に一回、祈りをささげる」
「あれが？」
「キリシタンのとはちがうけど、祈りがあることは同じなんだよ」
「よく、わかんない♪」
嵐が去ったような静けさの中、婦人に声をかけられた。もちろん腰をいためているということで呼び出されたわけだが。
「なかなか面白い音曲でした」

「ありがとうございます」
「村の皆々も驚き楽しんでいたようです」
「なによりでございます」
「でも。旅のお方」
「はい？」
「なにより倅、重兵衛にとってよかったと思います」
「は？」
婦人がくすっと笑う。
「あの子は……あの子という歳でもありませんが、親にとって子はいくつになっても子どもなのですよ……あの子は親の口からいうのもなんですが、孝子です。わたしの前ではいい子でいようとする。わたしの価値観の中にいようとする。でも、今回は自分で見つけたものをわたしのもとに持って来た。初めてのことです。そろそろ、わたしのもとから旅立つのでしょう。あの子はあなたの南蛮音楽について何かいっていましたか？」
「面白い、と」
「それだけですか」
苦笑する婦人。
「でも、進歩したかもしれないですね」
「重兵衛殿は……」
婦人の顔が引き締まる。
「よい親御さまをお持ちでございます。お子さまのことをよく考えていらっしゃる」
「あなたは？」
「親の期待につぶれた弱者でございます」
「……」
平伏して婦人の前を下がった。
部屋に戻るともうご主人さまは寝ていた。隣の部屋から明かりが漏れる。のぞくと重兵衛が読書をしていた。

○

ゆっくりと朝をすごして重兵衛の家にわかれを告げた。今日はこれから湊に出て、堺までの船便を探すだけだ。婦人からは渡海屋という船宿を紹介されている。ゆるやかな風の吹く中をてくてくと歩く。ご主人さまは相変わらず無口だが、昨日より、さらに一昨日より、すこし懐いてくれたような気配をみせてくれる。ときおり、話しかけたそうなそぶりを見せつつ、ことばが見つからないかのように足を速める。

さすがに、湊はにぎやかだ。河口を利用してつくられた波止場を背に船宿が並んでいる。旅の商人らが往来し、また宗教者や武芸者の姿も見える。旅芸人もいる。それらの人々が船宿を選んだり、大道芸をみせていたり、露天商を営んだり、賑やかだ。

渡海屋はすぐに見つかった。

待合に海の見える二階の立派な部屋に案内されたのは重兵衛の母の力だろうか。

「この部屋は昔、義経さんが泊まられた部屋でしてな」

挨拶に来た亭主、十八代目渡海屋銀平さんが由緒を語る。

その昔、兄頼朝公から追われることになった義経公主従がここから脱出したのだとか。

そんな部屋をあてがうのは、それくらいＶＩＰ待遇をしているということなのだろう。ということは、謝金もそれだけかかるということだ。やれやれ。

潮待ち風待ちをしている間、いつものように営業して小銭をかせごう。亭主に南蛮楽器演奏の許可を求めると、珍しそうにしながら、プライドだろうか、しかたない、皐月さんのご紹介だからだとかなんとか、ぶつぶついいながらも許可してくれた。

一般客のいる一階待合処で営業。

なかなか混雑している。

いつものように口上を述べてマドリガーレやカンツォーネなどを演奏する。

ほどよいところ切り上げようと最後の軽やかな舞曲を弾いている時、奇妙な視線を感じた。

店の入り口に、編笠をかぶった二人連れがいる。一人は女性。一人は男性。

「あら？」

彼女が反応した。

コーダをきめて演奏終了。お代を貰っていると、二人連れがゆっくり店に入って来た。店の者とやりとりをしている間もこちらに気を集中させている。殺気でも好奇でもない、ねっとりするような気配。

「なんか、変……」

「なんか感じるかい？」

「う～ん、これまでにない感覚。なんだろ？」

「ふむ……」

とりあえずお代を集めて彼女をつれて箱段を登って二階の海の見える部屋に戻る。二人連れの視線がまとわりついてくるのを感じる。

当然のことだが二人連れがＶＩＰ待遇のぼくらの部屋まで来られるわけはなく、彼女のボディを拭いてケースにおさめる。

（「気をつけてね…」）

彼女の不安はこれまでにないもの。何がおこるのだろうか。楽しみにしている自分がいる。

「集まったか？」

「お足(あし)ですか？　そこそこっす」
「ふん」
なんとか口をきこうと努力しているようなご主人さまである。
「にぎやかだな」
「怪しげな二人連れがいましたよ」
「怪しげ？」
「なんかねー。こっちをガン見してくるんですよねー」
「ガン見？」
「なんていうか……探るような目でこちらをじろじろ見るというか」
「南蛮楽器が珍しいからではないのか？」
「それもあるんでしょうけどねえ……単に珍しいからというより、なんか……そう、獲物(えもの)を探す獣(けもの)のような目というか」
「楽器を盗もうとしているのではないか？」
「ですかねえ？……そういう手合いは慣れているんですけどね。いや、ひょっとすると山の中でご主人さまを襲ってきた、あの連中の仲間かなあと思ったりもするんですけどね？」
「わたしではなく、お前をねらうのか？」
「目立ちますもん。南蛮楽器を持ってる旅の者なんて、日本にぼくぐらいのものですよ？　ご主人さまを探すのなら、南蛮楽器弾きをさがせばいいってわけでしょうが」
「あ……」
「だから、気をつけてくださいね」
「やっぱり、お前と一緒なのは間違いだったのだろうか……」
「だいじょうぶ。きみのことは、ぼくが守るから」
ご主人さまの目を直視(ちょくし)して力強く宣言して爽やかに笑ってみせた。
「っつ…」
そっぽむいたご主人さまの頬が赤くなったよ。かわいい。
「ぼくのそばを離れないでくださいね」（にこっ）
「ななななな、な、何を言っている」
「襲ってくるなら堺に着いてからでしょうけど、舟の中とて油断できませんよ」
「わ、わかってる！」
からかってみたけど、まずいなあ。ちょっと本気になりそうにかわいい反応だ。
ご主人さまがむすっとあっちを向いてしまったので、彼女をいれたケースを近づける。
（「なんか、面白くない」）
珍しくケース越しに声をかけてきた。返事がわりにケースを叩く。
「きみは、ぼくを守ってくれる」

小さくつぶやく。ケースの中でコンと音がした。

そこにほどよく店の者。堺への舟の準備ができたとの案内。

「いきましょう、ご主人さま」

と手をさしのべる。ちらっと目にして黙って立ち上がるご主人さまの手が一瞬だけぴくりと動いた。

舟には二十人くらいが乗り込んだ。

「あれか？」

ご主人さまが二人連れをきいてくる。他の乗客が商人らしい姿をしているので編笠姿の男女連れは目立つ。

舟が埠頭を離れて漕ぎだされる。櫓を漕ぐ音が浪音にまざって、船頭の水夫に指示する掛声の伴奏のようだ。

「そんなに強く見張るものではないですよ」

ご主人さまに注意する。見張るというより睨むみたいに二人連れに視線を集中している。緊張が伝わってくるのだけど、それ、疲れますよね？

「むう」

「ほら、座りましょ？」

むこうは以前ほどこちらを注目していない。

航路が安定したとみえて、船頭が客の前に姿をあらわしてご挨拶をする。淡路島やら生駒の山並みやら眺めの説明などを始めるのを、興味深く聴く者もあり、聞き流して談笑する者もあり、長閑な舟旅の景色だ。

二人連れは黙って遠くを眺めている。

船頭は古い伝説を語りだしている。大物浦に顕われた平家の武将の亡霊の話。渡海屋の初代の主人がその亡霊に憑かれたとかなんとか。

時刻は夕方に近くなっている。

瀬戸内の夕暮れ。

西に薄紫の雲が海神の軍旗がはためくようにたなびいて、入り日がさしている。まだ上天に残る青さが海面を深める中に一筋の航路のごとく茜色の反射光が淡路島と六甲山の隙間にのびてゆく。

彼女がコンと鳴った。

二人連れの女性の抱えた包みが揺らめいて見えた。

異変がおきた。

茜色の光の道の向こうから仄に黒い雲が海面を走り寄ってくる。

人々が――ご主人さまも――ぎょっとする中、船頭と女性とぼくだけが静かにそれが近づくのを見つめている。

「おお、出よったか」
と船頭がつぶやいたので、
「まさか、クルーズのアトラクション？」
「平家の怨霊や、あほ」
「いや、客に　あほ　はないでしょう」
「きっと源氏に縁（ゆかり）ある何かが乗っとるんやな。たまに出るんや」
妖し気な雲が近づくにつれて浪が荒くなっていった。
多くの乗客たちは床に伏してごちゃごちゃなにか言ってる。念仏を唱える者もいる。
ご主人さまも青い顔で床に座っている。腰が抜けたなんてったら怒るんだろうな。怒らせてみようかな。
二人連れの男の方はさすがに編笠を上げて妖し気な雲を見ている。しかしむしろ女性の方がしっかりと立って、まるで妖雲を迎え撃つかのようだ。どうやらここは連中のターンらしい。
妖雲が次第にはっきりしてきた。雲にまかれながら先頭に白装束の狩衣に銀色の烏帽子（えぼし）、長刀（なぎなた）を持った古風な武将がいる。両脇にも同じ白装束で銀の鉢巻（はちまき）をした武者。さらには松明（たいまつ）を掲げた白装束の兵士たち。
武将の幽霊が低く響く声をあげた。
「そもそもこれは、桓武天皇九代（かんむてんのうくだい）の後胤（こういん）、平知盛（たいらのとももり）が幽霊なり。あら珍しや。義経ゆかりの者どもを。思いも寄らぬ浦波の、声をしるべに出（い）で船の、知盛が沈みしその有様に、海に沈めてみしょうぞ」
亡霊は夕波に浮かんで、長刀を取り直し、波頭（はとう）の巻く辺（あた）りをうち払い、潮を蹴（け）立て悪風（あくふう）を吹きかけてくる。
舟が揺れて悲鳴があがる。
その時、女性は少しも騒がず、かぶっていた笠を捨て、亡霊を睨む。
目が細く鼻筋も高く整った顔立ち。淡い桃色の唇が頬の間で妖艶だ。
包みの結びがするっとほどける。包んだ布が消え、包まれていたものが手に出現する。
鼓だ。
大人の女の白い手がしなやかにゆらいで、鼓の皮を叩く。
　カーン
　カンカンカンカンカン
　カーン
高い打音が海の上に響き渡る。
音にあわせて、押し寄せていた平家の亡霊が消えてゆく。
消えるというよりは、鼓、いや女性に吸い込まれるような光景。

さすがに武将、平知盛はしぶとく、長刀をふるって女性に撃ちかかろうとするのだが、鼓の音に苦しそうだ。

比べて女性は笑みを浮かべ、ゆるやかにひときわ大きく鼓を叩く。

ターン　タ　ターンタ　ターンタ　ンタンタ　ターン

亡霊の苦悶が舞に見える。

タタタタ　ターンタ　タタタタ　ターンタ　ターンタ　ターンタ　タタタタ

「東方降三世〜。南方軍荼利夜〜叉〜。西方大威〜徳。北方金剛夜〜叉〜明〜王〜。中〜央大日。大聖不〜動明王〜」

鼓を叩く女性の唇の隙間から漏れる声。

知盛の亡霊は舳の碇を忿怒の相で持ち上げて女性にむけてぶつけようとするが、

ターーーーーン

ひときわ高く打たれた鼓の音、一瞬のゆらぎのあと、消えた。

亡霊たちを飾っていた妖雲が霧散して薄暮が戻る。

ふっと女性が笑うと、鼓は包みにくるれてその手にあった。

「安心おし。平家の亡霊はこの胡蝶さまが片付けたよ」

「おお〜」

舟の中に拍手がわく。アトラクションぽいなあ。とは思ってみたりするが、そんなことよりこの女性、ただものではない。

賞賛をうける女性——胡蝶の視線がぼくらをとらえる。挑戦的なまなざしだ。

ケースの中の彼女がコンと鳴ってつぶやいた。

（「ちょっと。何、アレ？」）

間違いないだろう。目の前の不思議と彼女の反応。

「〈初音の鼓〉……」

つぶやくとご主人さまの顔が驚愕した。

（「だけじゃないわ。あの女、人間じゃないわ」）

「やはり……」

いろんな意味で「やはり」なんだけど、とりいそぎ蒼い顔ですくっと立ち上がり刀の柄に手をかけて胡蝶のもとへ勇みよろうとするご主人さまをひきとめた。

「なにをする！」

それにしても華奢な肩だ。男の肉体じゃない。

勢いにご主人さまの肩に腕をまわすことになって、そのまま耳元でささやくことになった。

「場所をわきまえましょう。足場も悪い。陸に上がるまで辛抱、辛抱」

胡蝶はぼくらにむけた挑戦的な目をやわらげ、口元に笑みをうかべて、連れのほうをむいた。

平常が舟の中に戻ってくる。

船頭は何事もなかったかのように、水夫に指示をだしている。
「……お前は、なにを、どこまで、知っているのだ？」
ご主人さまが視線をそらしてたずねてくる。
「ほとんど、知りませんよ。推測はしてますが。そう、二条の御所さまのところから大切な何かが盗まれたこと。責任をとらされて忠臣が一人腹を切ったこと。それをめぐっていろんな人物が盗難品を探索していること。それくらいでしょうかね」
「お前、本当は何者だ？」
「西岡（にしのおか）の生まれなんですよ。ご主人さまとであったときに一緒にいたのは、ぼくの双子の兄です。いまは左京大夫（さきょうのだいぶ）様の手の者になってますがね」
「双子？　……お前の実の名は？」
「名前は捨てました。でもね、ぼくは革嶋越前（かわしまえちぜん）さまと、何度か会ったことがありますよ？　責任感のあるかたで、愚直でマジメ、でも家族には愛情豊かな優しい人でした。亡くなられたと聞いて、それをとても悲しく思っています」
「ち……え…では……まさかお前が……」
「ねえ、ご主人さま。あなたも西岡ゆかりの方でしょう？　ぼくも西岡の者で、わけあって家を出ました。そして今はあなたの用心棒（ボディガード）で、南蛮音楽士です。これも何かの縁（えん）でしょう。だから、ぼくは、あなたのそばで、あなたを大切に守ります」
「ば、ばか。マジメな顔で何を……」
ご主人さまの顔が朱に染まる。
「そして、ぼくは、兄から、〈初音の鼓〉を探すように頼まれました」
ご主人さまの目を覗き込む。
「ご主人さま。そばにいても、いいですよね？」
見つめ合って、そしてご主人さまが折れた。
「た、頼む」
目をそらした。うん。かわいい。彼女とは別な意味で、惚れそうだ。ってか、惚れたかも。
（「なに、やってんだか！」）
「なにやってんのよう？」
声が重なる。彼女と、いつの間にか近づいていた胡蝶。
ご主人さまの慌てぶりがおかしかったが、それどころじゃないですね。
「騎士（ナイト）の誓いとゆーかーあ。契約の確認てゆーかー」
「ふん。あんただね？　巷（ちまた）で噂（うわさ）の南蛮音楽士って」
「花の都のフロレンテ丸」
「そう？　あたしは胡蝶（こちょう）っていうの。舞姫さ」
「先ほどは見事なお手前（てまえ）で」

「ありがと。ねえ、南蛮音楽聴かせてよ」
「堺に着いたら営業しますよ」
「ここじゃだめなのかい？」
「はい」
「客の注文でも？」
「同業者の方はお客さんとは思っておりませんので。あ、ですからさっきの鼓の技にもお足(あし)はさしあげまんせんので」
「なんだい、それ」
「お見事でした。亡霊退治」
「退治してはいないけどねえ」
「名のある由緒深い鼓のようですね」
「そうみたいね。貰(もら)ったものなんだけどね」
「どなたから貰いました？」
「一緒にいる男さ」
「何者ですか」
「さあね。興味ないし。それよりさ、南蛮楽器、聴かせてくれないのなら、見せてよ」
「ここではだめですよ」
「なぜだい？」
「潮風がね、よくないんですよ」
「潮風が？」
「南蛮はね、ここらと違って乾いた土地だから、湿気があると、音が悪くなるんですよ」
「南蛮に行ったことあるのかい？」
「こいつを譲(ゆず)ってくれた南蛮人が言ってました。それに実際、雨の日は音が悪いんですよ」
「ふうん？」
「鼓も潮風にあてるのはよくないですよ」
「知ってるよ。でもこいつは平気さ」
「なぜですか？」
「だってふつ……おっと。あんた、誘導尋問巧(うま)いねえ」
「胡蝶」
そこに胡蝶の連れの男がやって来た。まだ編笠をかぶっていて顔を隠すようにしている。あきらかに挙動不審。
「はいよ。じゃあね、フロレンテ丸だっけ？　堺についたら聴かせておくれよ、南蛮音楽」
「はい、よろこんで」
「同業者だから、お代はないよ」

「あちゃ」
二人連れが離れてゆく。
（「ちょっと。なんなの、あれ」）
彼女が緊張した声をだす。
「？」
（「ものすごい妖気よ。気づかなかった？」）
「〈初音の鼓〉？」
（「ちがう。たしかにあの楽器もただものじゃないけど、あの女、楽器よりもすごい妖気を出している。あまり近づきたくないわ」）
「それほど？」
（「ま、わたしには勝てないと思うけど……」）
「いまひとつ自信がなさそうだね」
（「東方の妖魔とは戦ったことないからね」）
「キリシタンの神とは？」
（「そりゃあ、昔はもうしょっちゅう……ってなに言わせるのよ！」）
「覚悟はしておこう」
「何を言っているんだ？」
ご主人さまが不機嫌そうに訊ねてくる。この不機嫌さはあれだな、そう照れ隠し？
「ちょっと、楽器とお話を」
「やはりその楽器にはなにかがとりついているのだな？」
「頼もしい、味方ですよ。ぼくの伴侶（はんりょ）です」
「……お前はわたしを守ってくれるのではなかったのか……」
「もちろん。こいつとともに守ります」
「……」
なんとなく気まずい沈黙が走ったのを船頭の堺到着アナウンスが助けてくれた。

# 第三章　国際都市

神父たちの話によれば、堺は彼らの国の都市に似ているという。確かに有力な商人たちの組合による都市の経営というのは、領主による地域支配というのとは異なる姿で、同じ南蛮貿易で栄えていた府内の湊だって最終的には領主の管理するところだった。

どこか異国情緒を求めて堺に降り立ったものの。

「だいじょうぶですか？　ご主人さま」

「うるさい。ほうって……うっ」

ご主人さまの船酔いでした。

亡霊騒ぎのころなどは気がまぎれていたものの、最後の最後に、船酔いしたらしく、波止場に降りて数歩歩いたら、いきなり物陰に駆け込んだので、あわてて追いかけたら、たいへんなご主人さまのご様子だった。背中から寄るな触るなオーラがでている。

少し落ち着いたのかよろよろと歩いて出て来たのだが、どうみても大丈夫ではなさそうだ。

まあ、これは時間が解決する問題ではあるから心配はないけど。

「ふらついてるじゃないですか。ほら」

とからだを支えてあげる。

「っ……！」

ふりほどこうとするけどうまくいかないらしい。

「あばれると、またこみ上げますよ。甘えてください」

ニコッ。

ポっ。

うん。やっぱりかわいい。ケースの中がコンと鳴る。

「宿をさがしましょうね」

肩を抱いて歩き出す。

波止場のある広場から奥に向かってやや広い中央通が伸び、そこから網の目のように細い路地が張り巡らされ、さまざまな店が軒を並べている。軒下には独特な看板がにぎやかだ。ことばが違ってもわかるようにだろう、何をあつかう店舗か、ほとんどは見てすぐわかるデザインだ。もっともフクロウと杖がデザインされた看板の店はのぞいても何をあつかっているのかわからなかったが。店主は紅毛人だったから外国の何かをあつかうのだろう。

田中与兵衛商店という大きな店があって脇で旅宿も経営していたのでそれを選んだ。瀟酒な風情が気に入った。旅芸人にはふさわしくないが、ご主人さまの格にはあうだろう。「魚屋旅館」という名の通り、魚料理が得意らしい。

「食べないならいただきますよ」

などと、床に伏せているご主人さまに非情な声をかけ、夕餉をたいらげる。

そのままご主人さまは寝入ってしまったらしい。

ひまにまかせて彼女をとりだす。

「なに？」（ツン）

「ごめんね」

ボディを撫でる。

「なにが？」

「なんとなく」

「知らない」（プイ）

ボウをとって彼女を構え、表の狭い路地にむかって開かれた窓枠に腰を乗せ、心のままに弾いてみる。不用心かもしれないが、なんとなく心の中のわだかまりが音楽でなければ発散できなくて。

絃にボウをのせて、ゆっくり小さく音を出す。彼女のこと。ご主人さまのこと。その想いを旋律にして、しずかに小さく弾いてみる。

ふわっとした波動が夜の堺の街に広がってゆく。

「あ、ちょっと……」

彼女がタメイキのような声をあげた。

家を出て、気ままに生きて行こうと思いながら、どこかで自棄になっていたとき、彼女と出会って、生きる楽しみを知った。聴いたことのない世界が広がっていて、彼女を学ぶのが嬉しかった。彼女を知るのが幸せだった。ただそれだけの中、戦いにまきこまれて彼女と逃げるように旅を続けて、兄と出会い、ご主人さまと出会った。

兄は捨てたはずの世界をぼくにつきつけた。ご主人さまと一緒に。

〈ご主人さま〉なんて呼んでいるけど、家来になった覚えはないし、単なる用心棒として雇ってくれているだけの話。でも、世話せずにはいられない。どこか魅かれるところがある。

目的のある人生ではない。

だから兄の頼みも気楽にひきうけた。もともと兄を嫌っていたわけではないし。困ってるなら助けるのもいいな、とただそれだけのはずだったのだけど。

どうしたんだろう。ご主人さまと一日一緒にいただけで、なんだか、人生が、楽しくなった。二日一緒にいて力がわいてきた。三日一緒にいたら切なくなった。それは彼女と一緒にいる幸せとは別のもの。

彼女がいるから幸せ。
そして、ご主人さまがいるから楽しい。
二つの感情が不安定にからみあっている、いまの心を旋律にのせて、夜の街に解き放っちゃった。

タン

乾いた音が響いた。
出たよ。

タン　タン　タン　タン

窓の下にギャラリーが出来ている。
その一角に、胡蝶。
そりゃあね、来るだろうさ。あちらも妖かし楽器だもんなあ。
ぼくの旋律にあわせて〈初音の鼓〉がリズムをいれる。
その間合いが心地よい。
乱れた想いが胡蝶のリズムで整えられていく。
まずい。
胡蝶に乗っ取られそうだ。
ぼくを彼女を支配するかのようにリズムでリードしてゆく鼓の音。
そろそろ終わろう。
ひときわ高く、いま、ここにいる自分の楽しい幸せを歌いあげて。
和音で締めた。
ギャラリーから拍手がわく。
軽く会釈して、
「と～ざ～い。ただいまの南蛮音楽。奏でましたのは、本日、ご当地、堺にやって参りました花の都のフロレンテ丸。明日より辻にて大道演奏いたしますれば、みなさまよろしく足をおとめいただいて、お楽しみいただきますよう。今宵はまずは顔見せのご挨拶」
「鼓の伴奏は、舞姫胡蝶。あわせまして明日より波止場特設舞台にて舞々興行いたしますれば、あわせてご観覧いただきたくご挨拶」
「「そのため口上、さよ」」
一層の拍手。
なんだろう、この絶妙のコラボレーション。

いつしか窓の下まで来ている胡蝶を見おろす。胡蝶も見あげる。視線があう。にやりと笑った。美人だ、こいつ。皮肉な笑みをかえす。

ふいっと胡蝶がきびすを返して去り行くとギャラリーが道をあける。人垣の中の一本道を去る胡蝶を見ていた瞬間。黄金の太くてしなやかな鞭のようなものが胡蝶の背にたくさん舞った。反射的に彼女の絃を弾く。目前の空気が歪んだ。

「何者だ、あいつ」

窓を閉める。

「たぶん、古い魔物か神かね」

彼女の声がマジメだ。

「勝てる？」

「自信、ない」

「え？」

「っていったら心配してくれる？」

「ばか」

「大丈夫よ」

彼女のボディをやさしく撫でてケースにしまう。

ほっと一息ついて振り返ると。

寝ていたはずのご主人さまがほわっとした顔で見つめている。どアップで！

「ど、どうしたんですか？」

さすがにあわてたわ。薄桃色の唇をわずかに開けて、力がぬけたようにしなだれかかてくるのを両手というか、胸でうけとめる。華奢でやわらかな、からだ。あ……まずくね？　あたってね？　晒布でおさえていても、さすがにこれは気づくよ？　ご主人さま……お姫さま。

「ちょ……、ご、ご主人さま…」

胸に飛び込んで来たのを見下ろすと、上目づかいで、切な気な顔でにらんでくる。

あ、理性が……というところで、

コホン…

咳払いひとつ。

「ごめんくださいませ」

障子の向こうに低い声。あわててとびのくご主人さま。

「は、はい」

なにうろたえてんの、ぼく？

すうっと障子が開き、おだやかな、それでいて不屈の精神の持ち主ですといった面構えの男が一人。
「亭主の魚屋与四郎でございます」
挨拶された。
「あ、はい。どうぞ」
お邪魔いたしますとはいってきたあとに使用人が三人、なにやら道具を持って入って来る。
亭主と名乗った男はあらためて丁重な礼をする。
「なかなかよいものですな。南蛮音楽は」
どうやらさきほどの演奏へのリアクションらしい。
「うるさくして申し訳ありません。なかなかよい宵だったもので心が動きました」
亭主は笑まいで返事をして、
「耳によいものを戴きました御礼に、茶など一服馳走いたしましょう」
使用人たちが手際よく準備してゆく。
湯が沸くまでの間に南蛮音楽の話などしつつ、出された南蛮菓子なども味わってみる。
「そちらの若いお方は、からだの調子は戻られましたか」
亭主がにこやかにご主人さまの方を向いて話しかける。ご主人さまは菓子の甘さに油断していたのか、慌てて、頭で肯んずる。
「なにより」
「ご心配いただきまして」
「舟旅は慣れない者には内海でもきついですからね。それに他の者から聞きましたが、平家の亡霊が出たとか」
「ええ。舟弁慶さながらに出ましたよ。もっとも今回は女弁慶でしたけどね」
「ほう？」
「舞姫胡蝶が鼓を鳴らして退けました」
「舞姫胡蝶どのはさきほどあなたと一緒に音楽を奏でていた女性ですね？　噂は聞き及んでます。東の方の生まれとか」
「そうですか。わたしは西から参りましたので舟で初めて会いました」
「おや、てっきり一緒に旅をしているのかと」
「いいえ。さきほどは興にまかせて奏でていたところにふいとあらわれまして、なんだか、ご当地到着のお披露目演奏みたいになってしまいましたが」
「よろしいではないですか」
「ご迷惑をかけたかと」
「いえいえ。うちの宣伝にもなりますし」

しゅんしゅんと湯が沸く音。茶碗をとりだし茶の粉を入れて湯を注ぐ。さらさらさらと撹拌して、

「どうぞ」

とだされた。

「ご主人さまから」

と渡す。え？　と驚くご主人さま。

「そのままいただけばいいんですよ。そしたらぼくにまわしてください」

慣れない様子で茶をいただく。熱そうだ。舌をやいたな？

渡された碗に残った茶をいただく。へへ。間接チュー♡

茶の渋さで南蛮菓子の甘みが落ちる。口の中に残るほどよい苦さが旨い。

飲み干して碗を亭主に返す。

「見ての通り慣れない者で不調法をお許しください」

「お気になさらず。もう一杯いかがですか？」

ご主人さまはもういらないという顔。

「いただきました」

おことわりした。

亭主はそのあと少し雑談をして下がっていった。

道具を片付けた使用人が布団を敷いてくれる。高級旅館だなあ。稼がなくっちゃ。

そしてご主人さまとふたりきり。

さすがに亭主登場前の甘い空気はどこかにけしとんで、二人でさっさと床につく。

明かりを消すと窓の外が月明かりで白い。たたたたたと表を犬みたいな動物が駆けてゆく音。

堺の街の夜が更けてゆく。

翌朝。散歩がてら波止場に出ると舞台が組み立てられていた。三間四方で奥と上手に楽士の座を作り橋懸かりを設けた本格的な舞台の造り。半ばあっけにとられて眺めていると、

「あんたら、いつも一緒だねえ」

胡蝶が声をかけて来た。ご主人さまに緊張が走る。

「ご主人さまとその用心棒なのさ」

「どうみても恋人同士だよねえ。どんな棒なんだかねぇ」

いやらしい笑みを浮かべて胡蝶がからかって来た。ご主人さまの頬に朱が走る。

「朝っぱらから下ネタかよ。それよりずいぶんと本格的な舞台だな」

「あたりまえじゃないかさあ。胡蝶さまをあんたみたいな大道芸人と一緒にするんじゃないよ」

「見たところ、楽士やら謡(うたい)やら、大掛かりになりそうだが、男連れの二人旅じゃなかったのか？」
「ああ、あの男は関係ないよ。あたしらとは別の世界の者さね。そう、そこの……彼氏、と呼んどく？」
「ご主人さま」
「なんだろね……」
呆れた笑いを浮かべられた。
「ゴシュジンサマと同じ世界の人だよう」
「ん？」
「まあ、あんな男はどーでもいいさね。小物(こもの)だよう。それよりさ。昼前に一興(ひと)行うつからね。見においでよ」
「ああ。せいぜい見物させてもらうさ」
「待ってるからね♡」
ご主人さまをエスコートして舞台前を離れる。
「鼓をとりかえさないのか？」
不満そうにご主人さまが声をひそめてきいてくる。
「機会をみて。朝から、にぎやかなことをするものではないですよ」
「しかし、やつが逃げたら」
「逃げませんね」
「なぜわかる？」
「ここまで大掛かりなことをしてドロンなんて、芸人なら、しません」
「芸人なのか？」
「人に見られることを好(す)いてます。こそこそしませんよ」
「鼓を処分してしまうとか」
「あれほどの楽器を手放すわけないじゃないですか」
「むう…」
「ともあれ、見てみましょうよ。評判の舞姫胡蝶(まいひめこちょう)の舞々(まいまい)を」
「……じつはあの女に惚(ほ)れたのではあるまいな……」
「あ～、もしかしてご主人さま、妬(や)いてくれてるう～？」
「ば、ばかっ。なんで、お前なんかに妬くのだっ！」
え～……昨夜のあの空気はなんだったんだよう……。
なんてことはおくびにもださず
「はいはい」
と軽くスルー。

「む……」

あれ？ツッコんでほしかったのかな？

「さて朝餉ですかね」

魚屋に戻る。

朝餉を済ませるとあまりすることもなく、部屋でだらだら過ごし、街もにぎやかになってきたころを見計らって営業に出た。営業届は昨日のうちに魚屋さんを通じて組合に提出してある。

ご主人さまを宿に一人置いておくのも不安なので、連れ出すことにする。

堺の街は京都や尼崎などに比べるとはるかに国際的でにぎやかだ。それでいて整然と秩序があるのは、組合の力によるのだろう。露天で勝手に商売をするものはなく、定められたエリア（メインストリートとところどころにある広場）で市をたて、また大道芸も街の所々に立つ衛兵によって場所を指導される。並ぶ建物は色調も意匠も調和するよう設計されているし、街全体がひとつの芸術のようだ。その中を行き来する人々もさまざまで唐天竺南蛮日本それぞれの言葉と風俗とがとけ込んでいる。

衛兵に指示された場所で営業。これまでにない稼ぎ。さすが国際都市。

「つかれませんか？」

数カ所で営業を終えて、ご主人さまに聞く。

「もちろん、つかれている」

「ひとまず戻って休みましょうかね」

小路を魚屋の方に歩いてゆく。広路に面した大店の裏手をぬける道で、人通りが少ない。

「ご主人さま。楽器をお願いできますか？」

「え？」

彼女をなかば強引にご主人さまに持たせる。

「左先の小道に入りますよ」

ますます狭い道に誘導する。

「どうし…」

「シッ」

刀（＝金属製棍棒）の柄に手をかける。

後ろに男がひとり。

前方にも男がひとり。

上にもいる。

塀の向こう側の土蔵の屋根の上から男が降って来たのを、刀で叩き落とす。その勢いで後ろの男を逆さ袈裟懸け。そのまま円を描いて身を翻し前方の男を叩く。手応えから見て生身の

人間らしい。たたき落とされた屋根から落ちて来た男が立ち上がるのを蹴倒し、頭を地面に打ち付けて気絶させる。体勢を立て直そうとした前方の男の腕を粉砕する。

「きゃっ」

後ろの男が立ち直ってご主人さまを襲って来た。踏み込んで鳩尾を突く。うずくまる男の後頭部をつかんで地面に叩き付けて額を割る。

幸い、敵は三人だったらしい。加勢がないようなので、ご主人さまの手を取り、連れて逃げる。そのまま進んで角を曲がると広路に出る。露天商の並ぶエリアで人通りが多い。混雑にまぎれた。

「怖くありませんでしたか？」

「大丈夫だ。ほら、大切なもの」

彼女を受け取る。ケースの中でコンと鳴った。

「ありがとうございました」

「何者だろう？」

「ご主人さまを狙う一派の手の者ですね」

「わたし？　お前を狙ったのではないのか？」

「ぼくは狙われる理由がないのです。あるとすればご主人さまから遠ざけようとするくらい」

「なぜだ？」

「ご主人さまをほしがっている者がいるのです。だいたいぼくたちの出会いが、ご主人さまが襲われてたからじゃないですか」

「なるほど。そうか」

「胡蝶と連れ立っていた男の手の者でしょうね」

ぼそぼそ話しているうちに魚屋に戻った。

ちょうど亭主が時間をもてあましていたらしく、茶の席によんでくれて、咽をうるおす。

そろそろ胡蝶の公演が始まる時刻だ。波止場の方からドーンドーンと太鼓の音が届く。

「わたしも見にゆこうと思っていたのです」

亭主与四郎も一緒に波止場の舞台に出かけることになった。

並んで歩くと与四郎は大柄な体つきだった。ぼくより頭半分くらいは背が高い。ぼくのアゴくらいまでしかないご主人さまなどは、すっかり子供に見えてしまう。巨人が、小柄なご主人さまの足にあわせてゆったりと歩く。ますます風格が出る。ぼくらって引き立て役？

与四郎の脇で警固を勤めるのが源三郎という同年代の男で、こちらもまた武人のような気配を持つ男である。与四郎はなぜかこの男を「鍋」と呼ぶが、古くからのつきあいがあるらしい。京都の出身で、ともに茶の湯を学ぶ仲間であり、いまは魚屋に居候をしているとのこと。初対面のときからぼくとご主人さまを値踏みするような目で見るので、あまり好きになれない。

朝見た波止場の舞台の周囲にはいつしか竹矢来が組まれ幕が張り巡らされている。小さな櫓を組んだ下が木戸口になっていて見物料を取るようになっている。

与四郎が木戸口の番人にひとことふたこと話しかけるとそのまま通されて、桟敷に通された。都市の重役として木戸銭は不要らしい。

桟敷席の並びには与四郎と同じような、あきらかに富裕階級と思われる人物たちが座っていた。その中でも与四郎は若いほうだろう。「天王寺屋さん」「納屋さん」などと呼び交している。二人とも源三郎と似たような空気を持っている。南蛮音楽士とその連れという紹介をうける。軽く会釈をするにとどめる。むこうも噂を聞いていたのだろう。査定するような上から目線で挨拶された。

チョーン

開演を告げる析が鳴った。ざわついた場内が静まってゆく。

舞台正面奥に楽士がならび、上手脇に合唱が着座する。

四人ずつあわせて八人。皆一様に似た顔立ち。男にしては色が白くて、目が細い。ケースの中でコンと鳴る。

口上があって、楽士が音楽を奏で始める。竜笛一声。大鼓がカーンと高く張りつめた音を上げる。

やがて橋懸かりから鼓を手にして胡蝶が現れる。

英雄の物語を語り歌い、舞う。戦に出た武将が部下に裏切られ、無人島に置き去りにされたが、脱出して復讐する物語。

胡蝶の張りのある声には、そこはかとなく色気が混じり、力強くも妖艶な、不思議な魅力が宿っている。

舞の一挙手一踏足の動きの優美でいながら鋭く止めるメリハリある動き。

踊るときにチラと見えた生脚の色気。

「うわ、いい脚」

思わず声にだしたら、ご主人さまに汚物を見る目で睨まれた。

「あの脚に、金だしてもええわ」

ぼくのつぶやきに応えてくれたのか源三郎が感無量といった声をあげた。

一曲目が終わり、楽士と同じ顔をした口上が幕間の漫談を入れる。

二曲目。平家物語に題材をとった曲。戦の中で若く散った命の物語。散らした武将の心の悲しみ。

撃ち取られた若武者はきっとご主人さまくらい……。

ちらりとご主人さまの横顔を見る。敵を見るように舞台を睨みつけている。

〜思えばこの世は常の住み家にはあらず……

若武者を撃ち取った壮年武将は嘆く。

〜人間五十年化天の内をくらぶれば夢幻のごとくなり……

わかるなあ……なんて、すっかり胡蝶の舞台にひきこまれてるし。

終演、そしてカーテンコール、初回限定のご当地お目見え口上。

の、はずが？

「ところで、今、ここに素敵なお友達が来てくれていまーす」

あれ？

「みんな、もう噂になっているから、知ってるよねー？　今日も朝から辻々で不思議な音を奏でていた」

あ、やっぱり？

「正面桟敷席。みなさまおなじみ、堺の街の執政官のお歴々の間にひっそりと隠れていますけど」

うわ、どうしよう。

「南蛮音楽士の、花の都のフロレンテ丸さんでーす！」

劇場中の注目をあびる。

つーか、胡蝶。どんなノリで口上してるんだよ。キャラちがうだろ。

仕方ないので、ご主人さまを隠すようにして立ち上がり客席を見下ろす。

「フロレンテ丸さーん」

甘く胡蝶がぼくの営業名を呼ぶ。歓声があがる。手をふって応える。

「フロレンテ丸さん。胡蝶、お願いがあるンですけどお、アンコールにゲストで一曲弾いてくれません？　そしたら胡蝶、それにあわせて、舞います！」

うおおおという客席の声。天王寺屋と納屋とがにやにやとぼくを見ている。一方、思わぬ展開に不安げなご主人さまの顔。ふと与四郎をみると静かな視線でぼくを見ている。決心がつく。

「ご亭主。申し訳ないがウチのご主人さまをいっときお預けします。よろしくお願いします」

「わかりました。お預かりしましょう。よい演奏をしていらっしゃい」

桟敷の通路の端から梯子を降りる。きゃああという歓声。あれ？　ぼく、女子に人気ある？

舞台正面にまわる。

「ステージに上っちゃダメよ」

急に彼女が話しかけてきた。緊張している。

「上がるとあいつの結界にはまるわ」

「ん」

舞台正面の階段の脇に立って胡蝶を見上げる。

「あん。舞台に上がってよ」

「いいや。辻音楽士はね。ステージには上がらない。ここで弾くよ。いいだろ」

ニカっと笑ってやる。

「そんなあ」
さっさとケースから彼女を出す。ボウを張って調絃（チューニング）。客席を向いて口上。
「舞姫胡蝶のお招きで、花の都のフロレンテ丸。南蛮舞々の音曲つかまつりましょう」
さっと南蛮風のお辞儀（じぎ）をすませ、彼女を構える。チラっと胡蝶を見る。
キリっと一瞬、素（す）の視線をさらしてすぐに営業の笑みに戻った胡蝶が身構える。
第一声、和音。全音。続けて三小節、和音を進行させる。劇場に静かに波動が広がる。
波動は舞台との境界でおおきな揺らぎを見せた。
和音を響かせる間に心の準備だ。
これは彼女と胡蝶の戦いなのだ。ぼくの心が彼女の戦いをきめる。
曲想はサルタレロ。三拍子で攻めよう。軽快にメロディを刻みだす。
ぼくは彼女とともに戦う。なんのために。ご主人さまのために。どうして？

どうして。

そう。
だって。好きになったから。
かわいいじゃないか。いじらしいじゃないか。
大切にしてくれた父親のために。なにもわからないのだろうに。
ふるえながら。意地をはりながら。男の姿をして。
とりかえそうとしている。父を失わせたものを。
だからご主人さまのために。革嶋の姫のために。
ぼくは音楽で戦う武士。音楽を奏でる彼女はぼくの魂。
ぼくは彼女とともに戦おう。かわいい人のために。
だからぼくは弾く。
彼女とともにある喜びを。
かわいい人を守る喜びを。
楽しい舞曲として。

などと意を決して演奏していたわけだが。
「わかったから。恋も愛もいいから。だからもっとパワーをちょうだい」
彼女の戦いはそんな甘いものじゃなかったらしい。
即興の旋律を弾きだすと胡蝶がそれをうけとめてからだを動かしだす。
リズムをつかんで、〈初音の鼓〉で拍をとる。
その拍が、旋律とぶつかるところが戦いの現場らしい。

胡蝶の拍がぼくの旋律をとらえたとき、舞台の楽士が拍を補強しだす。
一拍を太鼓、二三拍が鼓。大鼓が一小節おきにカーンと響く。

ドン　タタ　ドン　タタ（カーン）　ドン　タタ　ドン　タタ（カーン）

竜笛（りゅうてき）はぼくの旋律をアレンジしてかぶせてくる。
こいつら、三拍子にノッてくるとはあなどれないやつら。
「旋律を奪われないで！」
彼女が叫ぶ。胡蝶は舞いながら不規則に〈初音の鼓〉をエコーのように響かせる。

ポン　ポポポポポ　ポーン　ポポポポポーン　ポポポポ

舞う顔が笑みを浮かべている。
客席は手拍子であわせる者、拳を振り上げるもの、からだを揺するものとそれぞれだが、ぼくらの楽舞に興奮しているのは同じだ。
桟敷を見る。目をみはりながらわずかにからだを揺すらせている天王寺屋や納屋、源三郎。
口に手をあてて、目を大きくして見いっているのがご主人さま。ぼくの気持ちは届くだろうか。
興奮の坩堝の中、静かに端座しているのが魚屋与四郎（ととや）だ。
「こいつ……単なる魔物じゃ、ない…」
彼女がうめく。
「もっと！もっと！ちょうだい！」
ちょうだいって何を？　などとツッコミをいれる余裕もなく、旋律を激しくする。黒檀（こくたん）の指板の上をぼくの左指たちが駆け巡る。

チロリロリロロロ　トレレレトレトレ　チローリトレトレ　チロリロトレトレ…

リズムがあがる。
「く……こいつ！こいつ！こいつ！」
彼女が必死だ。対する胡蝶は笑顔で舞うが、顔色はあおい。目は真剣だ。
舞台の楽士たちが必死になって旋律をおいかけるその顔も緊張に満ちている。
盛り上がってゆく音楽と華やかに舞う胡蝶。着物がはだけるくらい激しく舞うので胸と脚がきわどい。
ぼくらの演奏なら波動で客席くらい軽く吹き飛ぶはずなのだけど、互いの力で相殺されるのか、客席の熱気のせいか、波動の影響が全くない。
「あ、もうダメ！　フィナーレ！」

彼女が絶叫。最後の和音を弾ききる。

ズジャン！（ドン　カーン　ポーン）

弾ききったボウを天にかざし、ポーズをきめる。

舞台では胡蝶が伏している。

観客から熱狂的拍手。舞台近くに座っていた一人の若者が無表情に涙を流しながらスタンディングオベーション。その若者にひかれて劇場総立ち。

胡蝶が顔を上げる。踊る中で髪がほどけ垂れた前髪の間に光る目。軽く開かれた唇。首から肩にむけての白いライン。伸びた左手には〈初音の鼓〉が握られている。この艶かしさ。

視線が会う。ゆっくり彼女はたちあがり、着衣の乱れを直して、すっくと立つ。舞台の上の舞姫が客席を見る。一礼。

ぼくもあわせて一礼。

そして舞台際に歩み寄って来た胡蝶と、舞台下のぼくと、握手。拍手が沸く。

ふたたび一礼。

「これで今日の公演はおしまい。わたし、もうダメ。フロレンテ丸ったら、激しいんだもん」

客席がどっとうける。やめてほしいなあ、こういう冗句。あ、ほらご主人さまの視線が痛い。

苦笑いしてまた一礼。彼女をケースに戻そうとして

「だいじょうぶ？」

こっそりたずねる。

「ダメ……」

やさしくケースにおさめる。

「おつかれさま」

そしてケースを抱え、あらためて客席に手をふり、退場する。このまま桟敷には戻れない。去り際に桟敷をみたら与四郎が頷いて、ご主人さまを促していた。たぶん、舞台裏で会えるだろう。

胡蝶は鳴り止まない拍手にカーテンコールを繰り返している。

舞台裏はひっそりとしていた。楽士、歌手、口上あわせて九人がいるのだから、もう少し生活臭というか人のいた気配があっていいものなのに、なにもない。

「あいつ…」

彼女が疲れた声でケース越しに話しかけて来た。

「あの楽士や歌手はあいつのからだの一部よ」

「一部？」

「そうね。尻尾みたいなもの」

「尻尾？」
「あいつ、そうとう古い、魔神の一族よ」
「古い魔神？」
「しかも、この国の神じゃない。むしろわたしたちに近い」
「わたしたちって？」
「わたしも神だもん」
「あ…」
「あいつ、血に飢えた愛欲の神よ。人々を喰らいながらこの国に流れ着いたのね、きっと」
「血に飢えた……愛欲……海の向こうからやってきた……尻尾……九人……〈初音の鼓〉の力……あ」
「どうしたの？」
「ひょっとして……え？　まさか……そんな」
「ねえ。どうしたの？」
「ここにおられたか」
与四郎がご主人さまを連れて現れた。
「フロレ……」
ご主人さまがなんか変な呼び方してくれた。
「ご主人さま」
近寄る。肩を抱く。あら、身をこわばらせたよ、この人。
愛でたいところだが、それより聞きたいことがある。
「ご亭主。舞姫胡蝶はどこの生まれかご存知ですか？」
「よくは知らないが、下野の那須の生まれで幼いときに舞々の百足屋善兵衛に拾われて舞の才覚をあらわしたとかいう話だ」
ソースは公演パンフットのプロフィールでした。
「那須！」
「どうなされた？」
「いや…」
「ちょいと。なに人の過去、洗ってんだい？」
本人が現れた。
「おま……舞台と口調がちがうじゃないか」
「お互いサマだろう？　あたしだって営業してんだよ？」
「では、わたしは先に戻りましょう。フロレンテ丸どの。のちにまた茶など」
与四郎が背を向けて出てゆく。そこには胡蝶を拒絶するような空気が漂っている。陰から源三郎が出て来てお伴してゆく。

「で、人の過去を知ってどうしたいのよう？　結婚でもしてくれるの？」
ご主人さまが動揺している。いちいちかわいい人だ。
「結婚はさすがになあ。それより、〈初音の鼓〉を返してくれないか？」
「〈初音の鼓〉？」
「その手にしている鼓のことさ」
「これ？　そうねえ。その南蛮楽器となら交換してもいいわよ」
「そうなのか？」
ご主人さまが乗り気だ！
「ちょっとご主人さま、黙っててください！」
「くすくす。漫才ができそうよね、あんたたち」
「措け。この子を手放すつもりはないよ」
「じゃ、鼓もあげない」
「盗品だぞ」
「関係ないわさ」
「そうだよね」
「同意してどうする！」
ご主人さまのツッコミ。
「胡蝶とやら。その〈初音の鼓〉は将軍家代々の御家の重宝。このたびゆえあって御所様のもとより盗み出されたものだ。すみやかに返すがいい」
「しらないよ、そんなこと。でもね。こいつとあたしと相性がいいんだなあ」
「そりゃあ狐同士だもんなあ」
「え？」
一瞬の間。ぼくは胡蝶を指差して、ゆっくりと言う。
「〈初音の鼓〉は千年生きた女狐男狐の革を張って音を出す。それをここまで操るお前は」
「「九尾の狐」」
「さすがだね。その南蛮楽器から聞いたのかい？」
「まあね」
「でもねえ。あたしゃここでは九尾の狐なんていわれてるけどね。もともとは天竺の生まれなのよう。カーリー姐さんの妹分でねえ」
「カーリーって血と酒を好む戦いの女神よ」
彼女がこっそりと注釈。
「こら。そこのムーサ。変な知識植え付けるんじゃないよ」

「間違ってないじゃない」
「そうだけど」
「そうなんだ?!」
「さて。そういうわけでさ。こいつは、あげないよ」
ぽんぽんと右手で鼓をお手玉する。
「返してもらうさ」
「ほう?」
「近いうちにね」
「楽しみにしているよ」
「今日はここまでだな」
「いい考えだ」
踵(きびす)をかえそうとして言いたいことがあったのを思い出した。
「あ、そうだ」
「なんだい?」
「今日はステージに呼んでくれてありがとう。楽しかった」
「あたしもさ。たっぷりイケたよ」
「鼓の件が片付いたら、また一緒しよう」
ニコっ。
彼女が一瞬、たじろいだように見えた。ほんのわずかな間。
「そ、そうね。ぜひ」
「ああ。楽しみにしているよ」
なにか言いた気にしてながら放置されていたご主人さまの肩を抱いてその場を去る。
「フロレ、どうするのだ?」
「とりあえず、魚屋(ととや)に帰りますよ。おおごとになって来ましたので」
いそいでその場を去るつもりだったのだが……
「胡蝶(こちょう)。その者を放っておかれては困る」
と登場したのは、胡蝶の連れだった編笠(あみがさ)の男性。
思わずタメイキついちまった。
「あたしゃ、知らないねえ。好きにおやんなよ」
胡蝶が去ってゆく。
「ご主人さま、またこの子をお願いします」
彼女を預ける。
「ひょっとしてさあ。山崎からずうっとつけてきてたわけ?」
「……」

「ねぇ。編笠とろうよ。失礼だよ？」
つかの間の沈黙。
「ご主人さま、行きましょう」
ご主人さまの肩に手をまわして外に出ようとする。
「やらぬ！」
斬りつけてくる太刀筋（たちすじ）は、ぼくより未熟。さらりとかわして手刀で男の刀を落とし、当身を食わせる。キュウといってあっけなく気絶した。
「模範的悪役をありがとう。これからもよろしく」
と捨て台詞を残して楽屋口から竹矢来（たけやらい）の外に出る。波止場前の広場にはまだ人が多い。
とゆーか、市女笠（いちめがさ）の女子集団が楽屋口の周辺にたむろってるのは何だ？　出てゆくなり注目を浴びたぞ？
女の子集団はきゃあきゃあいいながらぼくらを注目しつつ、さりとて話しかけてくるでなく、ギャラリーのようにとりまいている。
相手をする必要もなさそうなので、そのまま魚屋（ととや）の方に歩き出す。女子連中がそろそろと着かず離れず付いてくるのでその会話が聞こえてくる。
「ねえねえ、となりの美少年って、ひょっとしてフロレンテさまのアレ？」
「でしょうー？　なんかいいわあ」
「想像しちゃうわねえ」
「やっぱりウケなんでしょうね」
「あんがいセメだったりして」
「うん、それもいい」
腐ってやがる……。
「ご主人さまぁ……」
「ふん！知らんわ」
不機嫌です。
「ねえ、ご主人さまですって」
「え～?!　じゃあじゃあやっぱりフロレンテさまがウケ？」
「どんなプレイしてるのかしら」
こいつら、なんとかしてくれ！
胡蝶との戦いよりよほど精神的に疲労して魚屋（ととや）にたどり着く。店の前までやってきた女子連中は源三郎（げんざぶろう）や魚屋の若い衆に丁重（ていちょう）に追い払われた。
「どうするのだ？」
部屋でふたりきりになって、ご主人さまが聞いてくる。

「奪うしかないでしょうねえ」
「どうやって」
「戦うしかないんですけど」
「九尾の狐を相手にか？」
「どうやって殺生石に封印したんでしたっけかねえ」
「そうか。封印してしまえば……」
「とはいえ簡単にはいきませんよ」
「その楽器の力ではできないのか？」
「気楽にいわないで！」
彼女が会話に入って来た。ご主人さまにも聞こえたのか、驚いている。
「封印なんか、できないわよ。あれでいて神なのよ？　カーリーほど残忍じゃないけれど、それだけに厄介」
「どういうこと？」
「……教えてあげない」
「えー」
「殺生石って何？」
「昔、九尾の狐がやっつけられて石になったんだよ。石になったくせに妖気を出して、上を飛ぶ鳥は落とすわ、近くに寄った人は殺すわ。ついた名前が殺生石」
「それ、封印じゃないわね」
「え？」
「傷ついたのを癒すために石の姿になっただけよ」
「でも傷をつけることはできるんだ」
「さあね」
「お前にはあいつを倒す力はないのか？」
ご主人さまがナチュラルに彼女に問う。
「馬鹿にしてるの？　それくらいの力は……あるわよ」
くすっ。彼女が苦戦したのをぼくは知っている。
「じゃあ、頼む」
「いやよ」
「！」
「わたしはこの人のためなら戦うけど、あなたのためになんか何もしてあげないわよ」
「神様がお願いを断った?!」
「あたりまえじゃない。なんで神が人間のいうことなんかきかなきゃならないのよ」
「それが神様だろう？」

「はあ？　なにそれ？　意味わかんない」
彼女とご主人さまのやりとりって聞いててけっこう楽しい。
「まあまあ」
仲裁しよう。
「南蛮の神様だから日本の神様とはちがうんですよ。ついでにいえば九尾の狐もどうやら天竺の神様みたいだから彼女も戦いにくいんですよ」
「そうそう」
「そんなものなのか？」
「ともあれまずは殺生石のこと……あ、そうか」
「どうした？」
「どうしたの？」
「申楽に殺生石ってあったな」
ひょっとしたら謡本でもないかと亭主をたずねる。どうやら商売関係で出かけたらしく手代の者しかいなかったが、さすが豪商。謡本をそろえていた。しかも手代が主人の許可なく貸してくれた。
「いえ、なかには旅宿のお客様でご入り用な方も多うございまして。使い終わられたらお返しください」
なるほど。お客様のためにそろえてあるのか。
左阿弥作曲の「殺生石」は九尾の狐が自ら殺生石に変化したいわれを語った演目だ。問題の箇所。

〜両介は狩装束にて。両介は狩装束にて
数万騎那須野を取り込めて・草をわかって狩りけるに。
身を何と那須野の原に。現れ出ずるを狩人の。追っつまくっつさくりにつけて。
矢の下に射っ伏せられて。即時に命をいたずらに・那須野の原の露と消えても・
なほ執心は。この野に残って。殺生石となって。人を取る事多年なれども・
今会いがたき御法を受けて。この後悪事をいたす事・あるべからずと御僧に。
約束固き石となって。約束固き・石となって。鬼神の姿は・失せにけり。

「どういう意味？」
さすがに彼女に謡の詞章は難しいみたいだ。
「数万騎で狩り立てて、矢を射かけて傷つけたんだってさ」
「数万騎……」
「刀一本じゃむりだなあ。てか、女の子に刀はむけられないなあ」
「あら、あなたの刀なら、うけいれたいわ……」
「意味がちがう！」

ご主人さまは意味がわからずきょとんとしている。
「といってそういう方面で攻めるのもむずかしそうだな。こっちが落とされそうだ」
「……」
彼女から殺気がただよってくる。
「それにきみもご主人さまもいるし」
「あ……」
やっと意味がわかったのか、ご主人さまが頬を赤らめる。
けっきょくいい考えも浮かばないまま、下ネタと妄想に走ったので、午後は少し昼寝をして、夕方に一人辻に出て営業をする。
「わたしは宿にいる」
でかける間際にご主人さまが不機嫌そうに言った。
「不安です」
「だいじょうぶだ。与四郎殿もいるしな」
「じゃあ、おとなしくここにいるんですよ？　絶対外にでないでくださいよ。不審な誘いにはのらないように。いいですね？」
「わかったわかった」
まあ魚屋なら安全だろうと、彼女を持って外にでる。
さすがにこの時間になるとおっかけ女子も家に戻ったようだ。酒場を渡り歩くのはほとんどが旅の商人。そして接待する地元の小商人。
昼の胡蝶との舞台が評判を呼んだのか、稼ぎがいい。昼のコラボについて語りかけてくる客もいるし、南蛮音楽について聞いてくる者もいる。ある南蛮人は故郷が懐かしいと泣いた。明の曲芸師は一座に入れと金を積んだ。
流し疲れて魚屋に戻ろうと裏路地に入ったところで前後を挟まれた。気配がなかった。
「あの女の尻尾よ」
彼女が教えてくれる。漏れた町家の明かりが色白の顔を照らす。昼間の楽士の顔だ。
「フロレンテ丸さま、こちらへ」
男とも女とも区別の着かない声で、案内が立つ。
一瞬、宿に置いて来たご主人さまのことが頭を過る。でも表に出さえしなければ魚屋の者が守ってくれるはずだ。ここはおとなしく案内に着いてゆこう。
油屋という大店の裏手に小さな酒場があった。中にはいると予想通り胡蝶がいた。
「来てくれたのねえ」
うわ、酔ってんじゃね？
「何のようだ？」
「ん。一人じゃさびしくて。飲も？」

「あの男は？」
「ハチロー？　知らないわよ」
「喧嘩でもしたのか？」
「はあ？　なんであたしがあんなのと喧嘩するのよ？　あたしとは何の関係もないんだから。いい？　あたしはねぇえ、フロレンテと飲みたいの！」
「どうしてぼくなのさ？」
「昼、一緒にシて気持ちよかったから」
「やめろ、その言い方」
「座って♡」
となりの席を叩く。
「悪いな。帰るわ」
「だめよん」
九人の〈尻尾〉に周囲を囲まれる。
あらためて店内を見回すと、店主から板前から、様子がおかしい。操られた目。
「お前、術を使ってるな」
「だってねえ。うるさいのよ。人気者はツライわ」
と横を向いてタメイキをつく。
「だってねえ……外を歩こうものなら、すぐにオヤジが寄って来くるしぃ。といってねえ。いい男なんてさあ……」
チロっと斜め上目遣いでぼくをみる。うわ、妖艶。
「あんた以外にいないのよう」
と首に腕をまわしてくる。そのまま席に座らされる。
「ちょっと！　なにすんのよ！」
ケースの中から彼女が吼えた。
「うるさいわねえ。手も足もだせないヤツは黙んなさいよ」
「黙んないわよ！」
と、南蛮と天竺の神（？）が罵っている間、ぼくはというと、胡蝶の胸の中に頭を押し付けられていました。かなーりボリュームがあります、はい。
書くのがはばかられるほど罵り合う間になんとか頭を脱出させて、胡蝶を見ると、単なる酔っぱらいだった。
「きみもお黙り」
と彼女をなだめる。言葉を重ねて
「楽器は、美しくないとね」
といえば、彼女が黙る。

「一曲、弾いてあげよう」
胡蝶に言う。
「「ええ？」」
おそらく別の意味でなのだろうが、二人の驚きの声が重なる。
「舞姫胡蝶さまのお召しで花の都のフロレンテ丸、南蛮音楽を捧げましょう」
すばやくケースから彼女を取り出す。
「いやよ！　こんなヤツのために、なんで?!」
「ぼくの言うこと、きいて？」
優しく声をかけて彼女を構えて、静かにセレナータを弾き始める。〝酔客に幸せを〟がぼくのモットーなのさ。
くぴっと胡蝶が杯（さかずき）をあおった。〈尻尾〉たちが消えてゆく。胡蝶の目がとろんとしてくる。傾国（けいこく）の妖狐とはいうが、ぼくらよりはるかに長い時を生きてきたんだ。そこに敬意をもったっていいじゃないか。それはぼくが彼女を想う気持ちに通じる感情なんだ。
弾くこと数曲。目の前に胡蝶がつぶれている。
店主と板前が拍手をくれた。会釈をして彼女をしまい酒場を出る。
「優しいのね、どうしようもなく」
切なげに彼女が呟く。
「さあね。優しいのかな？」
「ふふん。ねえ？　酔いつぶれたあいつから、なんでお宝を取り返してこなかったの？」
「あ、そういう手があったか」
「気づかなかったの？」
「うん」
「ドジ」
「うーん……」
「ほんと……バカ」
魚屋（ととや）に戻ると戦闘果てた戦場だった。使用人があわただしく動き回っていて、中には外に使いにでるものも少なくない。
「ああ、フロレンテ丸さん！」
嫌な予感がした。背筋に走るものがあり、にわかに汗がにじみ出てくる。
「なにか、あったようですね」
「いやそれが…」
使用人たちは気ばかりせって話の要領を得ないが、すぐにわかったことがある。
ご主人さまがさらわれた。

# 第四章　山城国八幡山下

落ち着いた説明は魚屋の亭主与四郎から受けた。最初はぼくからの使いを装ってご主人さまを連れだそうとしたらしい。しかしご主人さまは相手にしなかった。

「わたしには関係ない」

と偽の使者に冷たく言い放ったそうだ。見かねて店の者がかわりについて行こうとするのを使者は断った。

この段階で亭主はご主人さまが狙われていると判断したらしい。店の者に警戒をうながしたという。

しかし魚屋とて旅宿として他の客への配慮も世話もある。武装するわけにもいかない。せいぜいが不審者のチェックをするくらいだ。

中途半端な緊張感を破ったのは、店前の路上でおきた喧嘩の声だった。かなり派手な声がして言い争っていたかと思うと、数人の男が一人に暴行を加えようとしたらしい。襲われた方は勢いに押されて店の中に転がり込んで来たという。あわてたのが店の者で、仲裁しようとしたり追い出そうとしたりするうちに数人が巻き込まれた。魚屋旅館は大きな建物ではあったが、数人の喧嘩場となるには狭く、劣勢の者が奥に逃げ込んだ。おりしも騒動を聞いて亭主が奥から出て来たところで、その巨体におどろいたのか逃げ込んだ者はそのまま二階にかけ上ったのだという。一方で追いかけてきた者も亭主の風貌に圧され、立ち淀んだところを店の者によって外に追い出された。

与四郎は二階に逃げ込んだ男を連れおろしてくるように店の者に命じたが、そのとき鶏冠井八郎と名乗る武士が魚屋の前にあらわれた。

「ハチロー？」

「そう名乗りました」

なるほど。胡蝶がぼくを酒場に呼び出したのはそういうわけか。

鶏冠井八郎は店の前に追い出された暴漢を刀を抜いて追い払い、魚屋の中に入って来た。名を告げると、自分の従者が喧嘩にまきこまれ、この屋の中に逃げ込んだと聞いた。迷惑をかけたことをわび、従者を連れて帰ろうと思うと述べた。その声を聞いてか、二階に上がっていた彼の従者らしい男がすぐに降りて来た。二人で亭主に迷惑を謝り、しずかに外にでていった。

騒動の後始末で、店の者は宿泊客に迷惑のわびをいれに散ったが、そこでご主人さまの不在が発見された。

階段下での騒動の中、表から一人で出て行ったとは考えられず、どこかに隠れたかと探したが見つからない。そういうところにぼくが帰って来たというわけだ。

「申し訳ない」
と亭主が謝る。
「いいえ」
と返事せざるをえないよね。
「おそらくその喧嘩自体、ご主人さまの誘拐をねらったものでしょう」
「やはりそう思われるか」
「ずうっと狙われておりましたし、おそらくその鶏冠井八郎というのは大物浦からの舟に同席していた不審な侍。今朝もあやしい者に襲われましたので」
「これから、どうなさいますか？」
「もちろん、ご主人さまをとりかえします」
「見当はあるのですか？」
「ない、わけでもありません」
「ほう？」
「鶏冠井という名に心当たりがありますので……」
「なるほど」
与四郎がニヤリと笑った。
「やはりお連れのあの方は革嶋の……」
この人、何者？　なんでそこまで知ってるの？
「……すぐ出られますか？」
「はい」
「かしこまりました」
お客さまの急の出立と店の者に伝える。
「もうすこしゆっくりしたかったのですが」
「またいらしてくださいませ。こんどはお二人がゆっくりできる個室を準備いたしますね」
「え？」
なんともいえない笑みを浮かべる亭主。
「無事とりかえして、お幸せになってください」
「え？　え？　あ？　いや、は、どうも…」
ケースの中でコンと鳴った。……与四郎のいうほど簡単にはいかなさそうだ。
店の者が請求書を持ってくる。宿代に迷惑料を加えて精算。
「一晩だけとはいえ、たいへんお世話になりました」
「こちらこそ大切なお方をお預かりしながら、お守りできず面目ございません」
「どうぞ、お気になさいませんよう」
「それでこのあとはどうされるおつもりですか」

「とりあえず都に向かいます」
「では、八幡までうちの馬をお使いください」
「え？」
「道筋ご宗家に寄られて、対馬殿に堺の魚屋から借りたと申し上げれば、送り届けてくれるでしょう」
「は？」
「父上さまや伯父上さまをよく存知あげておりますよ、――――」
ぼくの捨て去った実名を呼んで、与四郎が初めて人間的な、いたずらっぽい笑顔を見せた。

○

暗闇の中を、急ぐ。堺を出るときに木戸の番人から聞けば、木戸がしまる直前に京の方角に向かった商団が確認された。魚屋の手配で木戸を通過し、南八幡にむかう。東高野街道にでるのが一般的だが、生駒の山腹に点在する寺の明かりを目印に裏道を野崎村にむけて直進する。
「どうして、そんなに一所懸命なの？」
彼女がきいてくる。返答につまった。でも足は止まらない。
「わたしがいるのに」
何か言おうとしているのだけど、言葉がみつからない。
「自由に音楽するんじゃなかったの？」
そうなんだけど……。自問自答。なぜ、こんなに焦っているんだろう。
「ねえ。なぜ？」
返事ができない。
「……ごめん。ぼくにもわからない…」
「なに。それ」
冷たい彼女の声。
「わかることは。わかることは、ご主人さまを手放したくないんだ！」
「わたしは？」
「きみもだ！」
一瞬の間。
「なにそれ？」
「ぼくはきみを愛してる！　だけどご主人さまも手放したくない」
「わたしが、楽器だから？　あの子が人間だから？」
「楽器だとか人間だとかは関係ない。ぼくはぼくのまわりにいる者を、ある者を手放したくない」
「わがままね。わたしの気持ちは？」

「ぼくを愛してる！」
「……」
一瞬の絶句のあと、彼女の笑い声が響いた。
「あなた、そんなキャラだったかしらね？」
「そうさ。実はそうだったんだ。ハーレム王におれはなる！」
「ふうん？」
彼女の声は笑っているようで。
「わたしは楽器。あなたがいないと歌えない。でもあなたはわたしがいなくてもあの子とやっていける……」
「ぼくは演奏家。笑えないときみを弾けない」
「……」

魚屋の馬は立派なもので、疲れを見せることもなく夜半には東高野街道に入り、野崎の村に近づいた。ここまではほとんど田野の中の道だったが、人家が増えてきたので用心に歩みを落とす。村に入る街道には常夜灯がともっている。その先に御堂が見えた。明かりがついて賑やかそうだ。そういえば今日は庚申の夜。
「何者だ?!」
堂の前で誰何された。村の警備の者らしい。
「驚かせて申し訳ない。急ぎの旅の者です」
馬から降りて右手に手綱を巻き付け、挨拶をする。
「ふむ」
警備の者がからだを眺めまわし、あたりの様子を探ってこちらの言葉を信用したらしい。
「これは失礼した」
「伺いたいことがあるのですが、今夜、ここを京の方に隊商が通らなかったですか？」
「ああ、ここは通らなかったが、さきほど村を迂回するように、急いで過ぎていった荷馬車があったぞ」
「それでしょう。ありがとうございました」
「うむ」
そこに奥から人が出て来た。
「お急ぎでしょうが、白湯でも一杯いかがですか？」
尼さんだった。手の盆に碗が乗っている。
「お光さん…」
ちょっと嬉しそうに警固の者が声をかける。尼さん、美人だものな。
「ありがとうございます。では一杯」

と碗をいただき白湯を飲み干す。

わけありそうな陰影をもった尼さんである。なんだか一曲弾きたくなるが、いまはご主人さまを追いかけないと。

ふたたび馬上に揺られ街道を急ぐ。街道筋では諸処で庚申待をしていたので尋ねると、ある村では通り過ぎたといい、ある村では見なかったといい、足取りがつかみきれない。

やがて東の空が白んできたころ、洞が峠を越えて見慣れた場所に入った。入り口でいったん馬を止める。

「どうしたの～？」

「うん……ちょっと決心が」

「嫌なの？」

「いや……大丈夫」

八幡の集落へ馬を乗り入れる。男山が朝日に照りだしている。街道に沿って八幡の社家がいくつか並ぶ。その中でもやや大きめのが、ウチの家の宗家の館だ。その一角がウチの屋敷となっている。ぼくと兄はここで生まれた。ただ、ここが実家というわけではない。

街道の東側に川が流れていて、下ってゆくといくつかの川が流れこむ大きな池となっている。そこから北からの流れを少し上がった左側、西岡と呼ばれる地域の東端に古くからの領地がある。代官を置いて管理していたのだが、父のときに宗家周辺を伯父が、西岡の領地を父が管理することになった。

西岡には、ウチみたいな弱小氏族が連合して自分たちの領地を死守している。もともと公家の荘園なども多く地頭を務めた家柄などもあり、禁裏様や御所様とつながりが深い。京の西の守りとなる地なので、自分の勢力下におさめたいのだろう、騒乱に巻き込まれることも多く、群れいるうちのような小領主は土地を守るのに大変なのだ。革嶋の家ももちろんそういう家だし、鶏冠井の家もそういう家だ。宗家はもともと八幡の社家であったこともあり、八幡社の守りが常にあるけれど、西岡では付近と連合し、守ってくれるより大きなお殿様――大名という――と契約を結んで経営する必要がある。ウチの場合は、どうやらぼくが出ている間に近江国の大守と契約を結んだらしい。最近は細川だの山名だの執事家が御所さまそっちのけで喧嘩して、なんだかややこしいことになっていて争いが絶えず、ご近所で争い、川や山の向こうからくる大名と争い、その争いでまたご近所争いが生まれ……。だから兄もぼくも、近所の小領主の息子たちと一緒に競わされ鍛え上げられたってわけだ。

宗家の屋敷の裏手から乗馬したまま中に入る。ちょうど朝の準備に外に出ていた家人たちがぼくの姿を見て驚く。身構える者もいるが、見知った顔もあった。とくにその中の最も老けた顔をした家人。

「若さま?! おい、お館さまに！」

老家人が若い者に命令する。若い者が奥庭にかけてゆく。ぼくは馬から降りて手綱を老家人に渡す。

「堺の魚屋さんから借りた馬だ。お返ししてくれ」

老家人は受け取った手綱を別の若い者に渡して指示を出す。

よく駆けてくれた馬に感謝の気持ちをこめて顔を撫でる。

ぶひん

笑ったようだ。ありがとう。

「おかえりなさいませ」

「ただいま」

にこっと笑う。老家人は安堵の表情を一瞬みせたあと、怒りの表情を繕った。そしておきまりのお小言。

そう。この老家人はぼくの守役だった者だ。

「悪かった。心配をかけて。でも、ほら、無事だから」

老家人はタメイキをついて、やっと喜びの顔になった。

「お館さまがご心配でしたぞ」

「聞いた。兄さんに会ったんだ」

「ほう。いつ、どこで会った？」

奥庭の方から父が歩き出て来た。稽古中だったのか、弓を手にしている。登場の仕方があまりにナチュラルで、ぼくは、あやまることもなにもできなかった。家を出る前の時間がそこにあった。だから自然と会話が続いた。

「五日ほど、前かな。山崎の横山峠の阿弥陀堂で夜露をしのいでいたら出くわした」

「何か、言っていたか？」

「宝探しをね。そのことで話があるんだけど」

父の目が細められた。

「茶室で聞こう。次兵衛、朝餉の支度をしてやってくれ」

「御意」

老家人をおいやり、茶室に向かう。てか、「茶室」？

「兄がな、茶を始めて、ついでに私も始めたのだよ」

「そっか。魚屋さんとは茶つながりか」

「与四郎殿に会ったのか？」

「たいへん世話になったよ」

「そうか。次に会ったときに礼をいっておこう」

奥庭の隅に小さな建物があった。

「ところで」

茶室に入る前に父が振り向いた。
「？」
いきなりゲンコツが飛んで来た。あわてて避けようとしたが、油断した。頬を殴られた。
「心配させおって！　バカ者が！」

「それで？」
茶室の中である。湯が沸くのを待っている。どこか照れた感じの父の声。
「まず、〈初音の鼓〉を見つけた」
「ほう？」
「舞姫の胡蝶というやつが持っている。たぶん、今まだ堺にいると思う」
「与四郎殿に世話になったと言っていたのはそれか？」
「うん。まあ、待って。それで、えっと……」
ご主人さま……ここでは革嶋の姫としたほうがいいか、姫のことを言いかけて淀んだ。
「順にはなすと、西国街道を京に向かっていて、山崎の峠の阿弥陀堂で雨をしのいでいたんだ。そこで兄さんと鉢合わせした」
「ふむ」
「革嶋のおじさまが亡くなったと聞いた」
「事情は聞いたか？」
「そこで〈初音の鼓〉の件を知らされて、探すのを手伝えと言われた」
「新之允はどうした？」
「兄さんから連絡はないの？」
「うむ」
どこまで話したらいいのだろう？　悩みながら言葉を選ぶ。
「兄さんとはそこで別れて、ぼくは再び西国街道を下ったんだ。そして尼崎の大物浦から堺行きの舟に乗った。その舟に舞姫胡蝶が乗っていた。そしてね。大物浦にあらわれた知盛の亡霊を、その舞姫が〈初音の鼓〉を使って消したんだ」
「ほわ？」
「由緒ある〈初音の鼓〉でしょ？　普通の鼓とはわけがちがうさ」
「そういうものなのか？」
「そう思っていればよろしい」
「えらそうだな」
「父さんよか知識はあるから」
「面白くない」

「そして、堺に着いた。せっかくだから〈初音の鼓〉の奪取にチャレンジしたけどね。ダメだった」
「ダメとは？」
「魔物相手に戦っても手も足もでない」
隅に置いた彼女がケースの中でコンと鳴いた。
「それで与四郎殿に世話になったわけか？」
「ま、だいたいはそんなところ。ところで、一つ聞きたいんだけど」
「なんだ？」
「鶏冠井八郎って名前に聞き覚えある？」
「鶏冠井のところの息子だろう？」
「そいつが舞姫胡蝶と一緒だったんだよね」
「鼓を持った舞姫と？。……」
「……寝てないよね？　ボケウケねらってないよね？」
「……なるほど。そういうことか」
「あ～、一人で納得しない」
「ふむ……」
父の目がぼくを値踏みしている。
「新之允からどこまできいた？」
「二条殿支持派と失脚派がいるそうだね？」
「舞姫胡蝶といったな。今評判の舞々の者だろう？」
「そうだよ」
「二条殿が評判を聞いて召して舞々を見たいとの仰せでな」
「おや、ま」
「その評判を吹き込んだのが、失脚派の大物だ」
「おやあ？」
「その舞姫は〈初音の鼓〉を使うのだろう？」
「そうだよ」
「舞姫を呼ぶ。舞姫が〈初音の鼓〉を使う。お宝発見。手柄は失脚派のものとなる。そうなるとお宝詮議を命じられた左京大夫様の面目がつぶれる。失脚派が勢力を持つ」
「左京大夫様のところの若様はお親父さんと仲が悪いと聞いたけど？」
「そうだ」
「若様はエロで姫に欲情してるとか」
「もうすこしオブラートに包めんのか。……その通りだ。だから革嶋殿が狙われた」
「姫は？」

「落ち延びたと思うのだが、覚えているか？　革嶋のところの爺」
「あの人のよさそうな爺ちゃん？　与市兵衛さん、だっけ？」
「あの爺が連れて逃げた。しかし、まもなく死体で見つかった」
幾度と会ったわけではないが、幼心に印象に残った人だ。優しくてお人よし度百％の笑顔の記憶がフラッシュバックして胸がつまった。
「山崎街道の谷に落ちていた。背中から刀で一突き」
「姫は捕まったの？」
「であれば、左京大夫様と四郎殿との間は決定的になるのだろうが……」
「ふうん？」
「無事であって、ほしい…」
静かにその身を案じる言葉を口にした父の声が切実だった。ご主人さまの顔が浮かんだ。そしてともに旅した数日も。にわかに焦りがわいてきた。
湯が沸いて、父が茶を点てる。いつの間にこんなワザを学んだんだ？　この人は。
「四郎殿は今どこに？」
「近江に戻っているのではないかな」
「京の屋敷はどこ？」
「仏光寺のあたりだ」
ご主人さまは京か、近江か。あるいは西岡の鶏冠井か。少なくとも連れ去られた先のゴールの見当はつく。
「ほれ。朝茶だ」
「なんだ、それ？　そんなのあるのか？」
「いま思いついた」
差し出された茶を飲む。うん。与四郎さんの点てた茶の方が美味い。
「かつて、革嶋の姫をな…」
「へ？」
「お前の嫁にもらおうか、と思ったことがあった」
茶を吹き出しそうになった。
「越前殿もまんざらではなかったのだが…」
「いつの話？」
「お前が家を出る前だ。いなくなったから、立ち消えになった」
「あ～…、そりゃ、どうも」
しばし沈黙。
空きっ腹に茶のせいか、腹がぐうと鳴る。
「朝餉にするか」

父が促した。

ご主人さまの行方の見当がついたので、心配ではあったが、朝餉を取りつつ父に家を出てからのことを話して聞かせた。旅芸人の生活をしていることはあまり父は喜ばなかったが旅の道中で巻き込まれた数々の事件の話には満足したらしい。要するにぼくが武芸を忘れていないというところにだ。

腹を満たしたら眠くなった。父の顔をみて安心もしたのだろう。食事後に横になって伸びをしたら、そのまま意識を失ったらしい。気づけば、陽が高く上っていた。

「こうしちゃいられない！」

と口に出して起きたら、

「あわてない、あわてない」

と人を食った声がした。

「兄さん?!」

「あっさりお宝を見つけたって？　さすが自慢の弟」

「父上は？」

「西岡に発ってもらった」

「へ？」

「歴史が動いた」

「は？」

「今朝方、四郎殿の京屋敷に不審な隊商が到着してな。やがて東に馬が走った。何かが運び込まれたらしい。そこで聞きたい」

「ほ？」

「山崎で拾った子、どうした？」

兄の目が鋭いよう。

「はぐれたのか？」

兄の目が詰問している。

「あいつはあんな姿だったが革嶋の姫だぞ」

「知ってる……」

「あいつは……」

「攫われた！　今、追っているところだ。その不審な隊商が攫った連中だと思う」

兄の視線を見返して宣言する。

「ぼくは、あいつを取り返す」

視線がぶつかる。

「……よし。では、教えてやる。左京大夫さま隠居の届け出があった」

「え？」
「四郎殿の名でな」
「どういうこと？」
「二条殿を輔(たす)けていた左京大夫(さきょうのだいぶ)さまが近江(おうみ)に戻られた。四郎殿もついて戻った。そしてすぐの隠居の届出。何かあったと考えるのが自然だろう」
「それで？」
「三人衆は、四郎殿を味方につけることに成功した。つまり執心だった革嶋の姫を手にいれたということだ」
「うん」
「四郎殿は今は近江」
「だから？」
「その間、革嶋の姫が京に拉致されているのならば貞操(ていそう)は無事ということだよ」
「え？　そっち？」
「なんだ？　それしか関心ないんだろう？　どうせ。政道(せいどう)なんかどうでもいいんだろう？」
「そ、そりゃそうだけど」
「おまえは四郎殿の京屋敷を見張れ。必ず姫は近江に移送される。そのとき奪いかえせ」
「なるほど」
「京にむかうぞ。」
「うん」
「久しぶりに、馬比(くら)べだ」
「おう」

# 第五章　洛中二条御所

兄と二人で京への街道を駆ける。夕刻前には京に入る。兄は綾小路の大きな屋敷に遠慮なく入ってゆく。ぼくらの着いた気配に二人の男が出て来た。

「やあ。久しぶりだね」

片手をあげて迎えてくれたのはヨイチだ。本当は与一郎なのだが、ヨイチと呼んでいる。彼を守るように無表情でつきそっているのがゲンザ。本当は源三郎という。魚屋の源三郎よりクールで恰好いい。

「動きは？」

兄がせわしく聞く。

「ない。それより久しぶりに弟くんと会ったんだ。挨拶くらいさせてくれよ」

くすりと笑う。

「元気にしていたかい？」

「ええ」

ヨイチという男は武芸だけでなく歌やら有職故実やらにも詳しい文化人だ。その見識に憧れて、四六時中彼のまわりにつきまとっていたのが昔のぼくだ。おそらく彼も気に入ってくれていたのだと思う。

「なによりだ。なんだか面白そうなものを背負っているね。武器ではなさそうだ。なんだい？」

「南蛮楽器……」

「へえ？　それは面白い。是非聴かせてもらいたいものだ。ねえ？　ゲンザ」

「そうですね。でもまずは中に入りましょう」

ゲンザがぼくをギロリと睨む。いつもどこか醒めたやつだが今一瞬会った視線には厳しい感情があった。

乗って来た馬の世話はヨイチの屋敷の者にまかせた。魚屋の馬である。返そうとしたのだが、帰ろうとしなかったのでそのまま乗ってきた。

「四郎の屋敷の周囲は見張らせているからだいじょうぶだよ。動きがあればすぐに連絡がはいる」

ヨイチの書斎である。花が飾られた押板の前にヨイチが脇息にもたれて座る。その左隣にゲンザが座し、ぼくと兄が並んでヨイチに向いあう。ヨイチの右隣にある書院には読みかけなのか書籍が開かれたままだ。

「神楽岡から借りてきた本なんだけどね。なかなか読めない」

ぼくの視線に気づいてヨイチが苦笑気味にいう。神楽岡とは宮廷の神官を勤めるヨイチの伯父の家のことだ。

「さて、以上が現在の状況なわけだ」

兄が〈初音の鼓〉のことと革嶋の姫のことを説明する。ソースはぼく。

「とりあえずお宝は後まわしだな」

「そうですね。有名人のもとにあるのなら探す手間がない。いつでもとりにゆけますね」

「まずは革嶋の姫さんだな」

兄はチラリとぼくを見る。

「見捨てる手もある」

ゲンザの言葉。目の前が暗くなって頬が熱くなったのを自覚した。

「それは弟くんの仕事だね。弟くん、姫君のことはまかせたよ。われわれは二条殿をお守りするのが役目さ。わたしは今夜から御所詰となる」

ヨイチが一同を見回す。

「明日、奉行衆が左京大夫の隠居にともなう人事会議を行うんだ。奉公衆は番方待機」

「なんでだ？」

「例の、新之允の拾ってきた三人衆一味の連判状に名を連ねる者の多くが奉行衆だった」

話題がぼくの関心事からそれていった。

「すみません。ぼくは自分の役目につこうと思います」

「ああ、ごめん。そうだね。弟くんには退屈だろうね。いいよ。ゲンザ、蘇鉄の間に連れて行ってあげて。そこが弟くんの部屋だよ。連絡が入るまで待機しているといい」

「いや、ぼくも四郎殿の屋敷を見張ります」

「だめだよ。それはよくない。本営は動いてはいけないんだ。連絡を待つ。そして連絡がきたらすぐ動く。だから待機していなさい。落ち着かなくて動きたいのはわかるけどね。それは失敗のもとだ。ああ、そうだ。今見張っている者はきみの配下につくように下知してあるから、自由に遣っていいよ」

有無を言わせない勢いでそう言われて立ちすくんでいたらゲンザに腕をつかまれた。

「ほら。来い」

あわてて彼女を持つと部屋から出た。

「こっちだ」

ゲンザに従って廊下を歩いてゆく。ヨイチの部屋から少しはなれたところで、急にゲンザに胸ぐらをつかまれた。

「おい。お前、どんだけヨイチを心配させたかわかってんだろうな」

「え……はい……すみません」

というや腹に一撃。

「甘えてんじゃねえぞ」
「ごめんなさい…」
一撃といっても手加減されている。形ばかりの制裁だ。
「あ、すっきりした」
ゲンザの顔が明るくなる。といってもその表情の変化はぼくらくらいにしかわからないだろうが。
「革嶋の姫さんのことは尉太夫さんが仕切ってるからな。いうこと聞けよ」
「はい……」
待機しろといわれた蘇鉄の間には尉太夫さんが穏やかに座っていた。この人も西岡の小領主の一人だ。
「尉太夫さん、このバカをよろしくお願いします」
「そういう物言いをするもんじゃありませんよ。いくら仲がよくても」
プイと顔を背けてゲンザはヨイチの部屋に戻っていった。
「久しぶりですね。話は聞いていますよ。今、四郎殿のお屋敷は四方に四名の者を置いて見張らせています。それぞれ二人ずつ小者をつけて連絡係にしてあります」
「だれが見張っているんですか？」
「少五郎と新三郎、新八、格助ですね」
「ああ…」
みんな知っている。西岡にいた頃の遊び仲間だ。うちくらいの小領主の息子集団。
「みんな、ヨイチのもとに集まっているんですね」
「あの子はね、西岡の希望なんですよ」
「希望？」
「西岡はあの大きな戦争の前までは将軍家直轄ということもあってわたしたちは奉公衆として勤める者も多かった。だからプライドも高い。ところがいまは将軍をないがしろにする陪臣たちが大きな顔をしている。わたしたちは弱小だからとりあえず強い者に頭をさげますけどね。それでも心は屈していない。あの子は将軍家御落胤だし、岡崎で生まれたとはいえ西岡で育った。そして今、二条殿をお守りする役目についている。応援したくなるのは心情でしょう？」
「そういうものですか……」
「さて、わたしはあちらで控えていましょう。夕餉を持たせますからね。腹ごしらえしなさい。もし動くなら、今夜でしょうから」
「ありがとうございます」
では、と尉太夫さんが下がってゆく。老人というわけではないのだが「あの子」と呼べるくらいにはヨイチよりは年上で、貫禄がある。彼女と二人になって、ほっと息がぬけた。

「はあ……」

柱にもたれて座り込み、タメイキをつく。

「ゴシュジンサマが心配？」

彼女がこれまでにない口調で聞いてくる。その通りだと思うけど、返事ができない。沸いてくる想いはそんな単純なものではなくて。

ぼくは彼女をケースごと腕で抱きしめる。膝の間にいれて締め付ける。

「どうしたの？　泣いてるの？」

首を横に振りながら抱きしめる。捨てたはずのものとの再会。新しい出会いのはずが運命の出会い。大きな力が覚悟をきめろと強迫してくるような観念。

「残念だなあ…人のからだを持っていたら抱いてあげられるのに……」

追いつめられたような感覚に抱きしめていた腕をほどき、彼女をケースから出す。

「いいわよ……思いっきり、弾いて」

呼吸を整えて部屋の中央に立つ。彼女を構える。乱れた想いのままに、ボウを引く。音が震える。波動が広がってゆく。今の気持ちをのせて、ぼく自身の曲を弾く。革嶋の姫のこと。彼女のこと。兄、父、ヨイチ、ゲンザ、昔の仲間、尉太夫さん、重兵衛。さらには――胡蝶。今、ここに導かれて来るまでに巡り会った人々とのかかわりを音に直して、静かに弾く。心が鎮まってゆく。

ふと気づくと、部屋の入り口に若い女性が一人立ちすくんでいた。その手には夕餉の膳。曲を止める。

「あ、ごめん」

「あ、い、いえ…」

ぼくの声にびくんと震える。我をとりもどしたようだ。

「ゆ、夕餉をお持ちしました」

蘇鉄の絵が描かれた唐紙の陰にもう一人の女性が膝を付いている。

「ありがとう」

彼女をケースの上に置く。

女性たちが夕餉の支度を整える。

「あの、今のは？」

おずおずと女性の片方が聞いてくる。

「南蛮楽器。珍しいでしょ？」（ニコっ）

こくり、と返事。

「ちょとね。弾いてみたくなった」

「切ない、やるせない曲でした」

「……かもね。今のぼくの気持ちをそのまま弾いたから」

「そうなんですか？」
「そうなの」
「な～に、甘っちょろげたこといってんのよ！」
「うげっ?!　この声…は…」
「なにが『うげっ』よ、なにが！」
凛とした声に女性たちがそそくさと去っていった。
姿をあらわしたのは細面の眼光鋭い美女。
「じゃ、ジャコウ?!　なんでお前までこんな所に?!……」
といったところで気づいた。スレンダーだったジャコウのからだが奇妙にアンバランスなスタイルになっていることに。とくにお腹の前のあたりが膨らんで。
「……あ。……そうか。そういうことか」
スコーン！
草履で頭をひっぱたかれた。
「だから、てめー手を動かす前に口はたらかせろってーの！　痛ぇわっ」
ちょっと涙目。でもジャコウの頬も少し朱い。
「うるさい！」
「なんだよ……その……おめでとう」
スコーン！
ジャコウというのは、ぼくらの、つまり兄とかヨイチとかゲンザとかマンスケとかの仲間の紅一点。一緒に腕を競い合った仲だ。幼なじみってやつ？　たぶん、ぼくより度胸があって、腕もたつ……はず。
「な、なんで？　なんでお祝いの返事がこれ？……てか、当然ヨイチの……でしょ？」
ジャコウはプイと横を向いて照れながら、小さく、
「そ、そうよ…」
と肯定。そうか。やっぱりな。
「よかったね」
きッと睨みかえすジャコウが怖い。昔から苦手なんだ、この女。気が強くて、なんだかしらないけど、やたらぼくにつっかかってきて。小さいときはほとんどイジメじゃないかってくらいいろんな目にあわされた。うん。語りたくない。忘れた。忘れよう。忘れ……られないかも。
ジャコウの目に捕われながら、語りたくないあ～んなことやこ～んなことが思い出される。
そしてジャコウにそんなヒドいことをやめさせてくれるのがヨイチだった。そうだな。そんな暗い過去もあったんだ、ぼく。
「ほら。夕餉よ。食べなさい」
「あ、うん」

置かれた膳に付く。ジャコウも座る。
「なんかさ…」
「ん？」（もぐもぐ）
「あんたらしいよね」
「ん？」（ずずっ）
「南蛮音楽なんかやっちゃってさ」
「ん」（ぱりぱり）
「で！」
「ん?!」（んごくっ）
「どこいって、なにして、どうしていまごろ戻ってきたのよ！」
「んひゃ?!」（んぐぐっ）
「みんな、心配してたんだからね！」
「戻る気はなかったんだけどね…」
ちょっと虚無的に言ってみる。
「気取るな！」
　スコーン！
だから草履で殴るなってば、ジャコウさんや。
「痛いなあ！　なんだかしらないけど事件に巻き込まれてこうなっちゃったんだよ！　こんなとこ戻りたくなんか、なかったさ！」
「戻りたく……ない？　こんな……とこ……？」
「え？」
ジャコウの表情がこわばる。
「そ、そんなに、あたしたちのこと、キライだったの？」
「え？　あ、いや、そういうわけではなくて…」
「そうなんだ。そうだよね。いっぱいイジメたもんね」
床に目をおとすジャコウ。
「えっと……そうじゃなくて」
「心配して、ばかみたいだね」
ちょっとまって。なに、泣きそうになってんの？　キャラちがわね？
「ちょっと待てって！」
ジャコウの手首を握ってこっちをむかせる。え？マジに涙目？
言葉がつむげなくなった。
「その…心配してくれて、ありがとう。嬉しいよ」
「……本当？」

「うん。みんな、嫌いじゃないよ。本当に嫌いだったら、ここにこうしていないさ。本当はいつだって帰りたかった」
「じゃあ、帰ってくれば……帰ってくる？」
「……帰ったようなものじゃないか。なんかさ……」
握ったジャコウの手首を離す。
「なんかさ……運命って信じたくなった。あらがえないものってあるのかなって」
「？」
傍らにおいてあった彼女を手に取ると彼女の声。
（「な～に、やってんだか、このエロ男」）
「ちょ…黙って」
彼女にささやく。
「え？なあに？」
これは、ジャコウ。
「いや、なんでもない。お前のために一曲弾こう」
「南蛮楽器？」
「そう。ぼくは南蛮音楽士。花の都のフロレンテ丸。母親になった君のために。ぼくの気持ちを楽器にのせて。一曲サービス」
即興曲。心にまかせてボウを動かす。左指を踊らせる。
ジャコウの目が閉じられる。曲に飲まれるように身体の力がぬけてゆくのがわかる。ゆっくり左手がお腹の上に置かれた。
兄がいて、ヨイチがいて、ゲンザがいて、マンスケがいて。女の子だけどジャコウもいて。西岡で悪さしまくりの幼い日々。いつでも帰りたかったあのころを思い描いて曲にする。
「……それが南蛮音楽？　なんていう曲なの？」
「いまのは、ぼくが勝手に作った曲」
「優しくて切ない曲だね」
「ぼくらの昔を思い出して作った曲だよ」
「ふうん。……じゃあ、その曲、あたしにちょうだい」
「よろこんで」
「ねえ、もう一曲。今度はちゃんとした南蛮の曲を弾いて」
「おっけ」
フォンタナ作曲のソナタを弾いてみた。
「……それも悪くないわね」
「奥方様」
侍女なのだろうか。廊下にさっきとは別の女性が現れた。

「なあに？」
「御屋形様御出勤です」
「わかった。すぐ行く」
立ち上がって部屋の口で一瞬立ち止まったジャコウの背中は、何かものいいたげだったが、何かを振り切るように黙って部屋を出て行った。

○

待機が続く。その晩は動きがなかった。ぼくは部屋で彼女にジャコウのことや幼い時のことを話してすごし、ときどき報告がてら尉太夫さんが様子を見に来て話し相手になってくれた。見張り番の悪友たちも交代で戻ってきて回顧談に興じたりする。ヨイチは御所詰。ジャコウとゲンザは上京の屋敷に帰って行った。兄はどこかに出ているらしく姿が見えない。

夜が明けて朝のうちは静かだったが、午をすぎて、変な慌ただしさがでてきた。一つには、堺からの連絡で胡蝶が堺を出て京にむかったらしいという情報。これは与四郎から実家経由で届いた。さらに兄が、貫禄のある人物を連れて来た。弾正忠という官名で紹介された彼は、ユスト君の義理の兄君にあたるらしい。左京大夫様に仕えている関係で知り合ったらしいが、その配下に諜報活動を得意とする集団があるのだそうだ。その中の三雲佐助と名乗った若者が四郎殿の屋敷に忍びこみご主人さまの様子を見て来たという。ヒドい目にはあってないらしい。こと細かな報告からは、それほど見ているなら助けてこい！　とツッコミたくもなったが、ご主人さまの無事に安堵したのも事実だ。そしてヨイチから御所の中の様子を伝えた書簡が届く。ゲンザが上京の屋敷とこの屋敷との間をせわしく行き来している。

「胡蝶が？」
「そうだ。明朝から御所で舞々を披露する」
「なぜ急に？　もう少し堺で営業していると思ったのに…」
「そこさ」
いま、ゲンザと兄に弾正忠を交えて話し合っているところだ。
「なぜこのタイミングで御所さまに舞々を見せるのか」
「お宝を持っているのだろう？　失脚派は舞姫に来られては困るはずだ」
「……あのさ。確認しておきたいのだけど、失脚派っていうのは三人衆だよね？」
「そうだ」
「左京大夫様の一件は三人衆が四郎殿を味方にして攻めに出たと見ていいんだよね？」
「その通り」
「その発端が〈初音の鼓〉の盗難事件にあったわけだよね？」
「うむ。本当は左京大夫様を退けようとしたのだが革嶋殿によって守られたわけだ」
「で、今回、左京大夫様を押さえこめることができたわけだ」

「かなり強引だけどな。四郎殿が京に戻れないわけだから」
「ご主……革嶋の姫がそこにいるから四郎殿は三人衆に味方していると考えていいのかな？」
「全てではなかろうが、大きな動機にはなっているだろう」
「その中で、胡蝶が御所で公演を行うわけだよね？」
「そうだ」
「御所様ってどんな人？」
「どんな、とは？」
「舞姫の色気におぼれそうな人？」
「いや、女より武芸を好む方だな」
「土佐入道の弟子だしな」
「直接〈一之太刀〉の秘伝をうけた二人のうちの一人だそうだ」
「こわ。それじゃあ、性格も武骨？」
「武骨というわけではないが、強気な方ではあるな」
「舞々は以前からお好み？」
「あまり熱心ではないが、文の道もそれなりにたしなむ方だからな。関心はあったみたいだ」
「バカ殿じゃないわけね？」
「むしろ御所の威光を復活させようと躍起になっている英明な方だよ。だから三人衆が反発するんだ」
「三人衆は二条殿を何度も武力で都から追い払ってるくらいだぞ」
「そもそも将軍宣下をうけたのが都じゃないし」
「……三人衆側には次の将軍にしたい方がいるんだっけか？」
「ああ。二条殿には従弟にあたられる方だ」
「じゃあ、今のタイミングで御所様を葬ろうと企ててもおかしくないね？」
皆が息をのんだ。
「……あり得る……」
「舞々の公演の最中に暗殺ということか？」
「よくある手だな」
「いや、兄さん、ゲンザ、思っているような方法じゃないと思うよ」
「どういうことだ？」
「たぶん、胡蝶自身が刺客だ。得物は、〈初音の鼓〉」
「鼓？」
ゲンザがバカにしたような口でいう。
「普通の鼓じゃない。魔力を持っている」
「魔力？」

「千年生きた狐の革を使ってるんだよ？　源九郎狐の故事を知らないわけじゃないよね？」
「とはいえ…魔力？　ぷぷっ」
「さらに信じられないことを言おうか」
「この上なんだ？」
「胡蝶は、〈九尾の狐〉だ」
「「はあ?!」」
さすがに黙って聞いていた兄さえ声をあげた。
「バカか、お前」
ゲンザがポーカーフェイスを崩して唖然とする。
「いや、本人、言ってたし。それに、ぼくは大物浦で胡蝶が〈初音の鼓〉で知盛の亡霊を退治するのを見た。見たままでいえば、知盛の亡霊が〈初音の鼓〉の音に霧散してゆくのを見た。知盛だけでなくそこにいた平家の亡霊の全てをね」
さすがに堺では胡蝶を相手に彼女と戦ったということまでは言えないよなあ。
「お前、山崎で会ったとき、南蛮楽器で敵をふっとばしたよな」
「え？　そんなことあったっけ？」（汗）
「オレも一緒にふっとばしただろうが！」
「え～と、さて、何のことかな…」
「その南蛮楽器も魔力を持っているんじゃないのか？」
彼女がケースの中でコンと鳴いた。
「今の音。そうだ、という返事か？」
「いや、そうじゃないと思うよ…」
魔物と一緒にしないで、という抗議だろう。
「お前の南蛮楽器で〈初音の鼓〉に勝てるか？」
「え、と…その…」
言いよどんでいると彼女が全員に聞こえるように吼えた。
「バカにしないで！　勝つわよ！」

○

結局、堺でのことを逐一話させられた。弾正忠がユスト君に聞かせると喜ぶだろうといっていたが、どうかなあ。
胡蝶との共演の話は、連中――兄たちのことね――にいらぬアイデアを与えたらしい。ぼくも御所で公演となりました。だいたい彼女が乗り気だったし。

「革嶋の姫さんのことは心配するな。尉太夫や新三郎たちにまかせておけ」
ポンと兄が肩を叩く。
「戦は、嫌いだ」
「お前はオレが守ってやるよ。お前はそいつのために戦え」
そいつとは彼女のことだ。
「やっぱり、お兄さん、すてき」
「うるさい！」
山崎以来、彼女は兄が気に入ったらしい。
「うふ。ヤキモチ」
「ちがう！」
「おい、弟。楽器と話すときは気をつけろ。アブナい人に見える」
「大きなお世話だ！」
「小さな親切ぅ～♪」
夜が明けて、二条の御所に向かう。
京の街には殺気が満ちていた。見た目は穏やかな街の姿でも、辻々の裏手から、奇妙な気配が漂ってくる。胡蝶のものとも違うこれは、おそらく三人衆の兵からにじみ出る緊張が空気を変えているのだろう。間違いない。戦になる。
「心して、いくわよ」
彼女も珍しく真剣な声だ。
二条の御所の通用門に着く。ヨイチが来ていた。
「たのんだよ、弟くん」
爽やかに笑う。
「できれば、無事に御前公演を終わらせたい」
「かなり無理なことでしょう」
「それでも、ベストを尽くしてほしい。人間のことはこっちでするから」
「彼女次第です」
「ちょっと、わたしに責任ふらないでよ！」
ぼくに与えられた任務は胡蝶――九尾の狐が御所様を攻撃しようとしたら彼女でそれを守るということ。
御所様の周辺はヨイチたちが万全を期す。問題は京の街にうごめいていた兵たちだが、奉公衆総出で御所内を警固することになっている。
御所の常設舞台の裏手の長屋が楽屋となる。一室がぼくの部屋。隣が胡蝶の部屋。まだ来ていないようだ。

部屋に入る。ご主人さまの不在が大きく心に響く。出会って数日ではあっても、ずうっと一緒にいて、あっという間に大きな存在に育っていたらしい。あらためて自分の気持ちに驚く。深く息をして、気持ちを切り替える。これから「花の都のフロレンテ丸」の営業時間だ。

「まさかこんなに早く一緒するとはねえ」

胡蝶があらわれた。

気配なくあらわれたためか、珍しく兄が緊張したが、ぼくが制した。

「純粋に舞台を楽しみたかったけどな」

「ほんとだよう。で、大切なゴシュジンサマ、すいぶん成長しちゃたわねえ？」

流し目で兄を見る。

「兄だよ。つまらないボケかますな」

兄からめったにない殺気がただよいだしている。顔が笑ってない。

それを平然と無視して胡蝶が視線をぼくに戻す。

「ホントのゴシュジンサマは？」

「わかってんだろ」

「いや？　なにかあったの？」

「拉致されたんだよ」

「え？　あんたいいの？　こんなところにいて？」

「よくねーよ！　おまえがこんなとこにくるから、かりだされたんだよ！」

「えー？　だってえー、お仕事だしいー。てかぁー、そっかー。あの子よりあたしを選んでくれたんだぁ♡」

ぼくの胸にしなだれかかりやがる。

「な、わけねーだろ！」

「あん、いけずう」

ちょっとドキドキ。ごめんなさいご主人さま。

そして、こういうノリにとまどっている兄。

「御所様に手は出させないからな」

「ふふ。こちらもお仕事だからねえ」

「じゃあ、舞台で」

「こんどは上に上がってくれるんだよね？」

「いいや。ぼくの居場所はオルケスタ・ピットさ」

「え～」

「さ、行けよ。次はステージだ」

「ふん。……ねえ。あたしのこと、好きかい？」

「……一緒のステージは楽しいさ。キライじゃねえよ」

「そう…」
胡蝶の姿が消える。
「！　いまのは幻？」
兄が動揺している。ちょっと気持ちいい。
「いや。実体だけどね。魔物を相手にしてるんだ。いくらでも不思議はあるさ」
「おまえ、実はすごくね？」
「何が？　で、どうだい？　あれが九尾の狐だよ」
「九尾の狐とボケツッコミするおまえのほうが怖いわ」
彼女をとりだす。チューニング。そして楽屋を出る。
鏡の間。舞台と楽屋の境界に位置する、現実と虚構の交感する部屋。胡蝶がスタンバイして尻尾を楽士に仕立て上げていた。
「出し物は？」
「何がいい？」
「華陽夫人」
ニヤっと笑うと、胡蝶も意地の悪そうな笑みで返してきた。
「用捨しないわよ。ついて来てね」
「ぼくが、リードする。黙ってついてきな」
視線をかわして笑顔でサムアップ。
揚幕があがる。彼女を持って橋懸かりをゆっくり舞台に進む。
舞台の向こうに御座所が見える。中央の男が御所様だろう。右の脇にヨイチと弾正忠がひかえている。左に並ぶのが三人衆なのだろう。さすがに歴戦の勇者というか、ぼくらとは年期がちがう迫力をただよわせている。ダテに征夷大将軍と争ってきたわけではないことがわかる。御所様は三人衆より若いが気魄に満ちている。少しとんがったような口元に背負っているものの重さが現れているようだ。
舞台を通り過ぎて階段から芝居に降りる。脇に毛氈の敷かれた台と椅子。ぼくの席だ。腰をおろす。左手に彼女。右手にボウ。
続いて尻尾楽士たちが座に着く。
緊張の一瞬。
　ひよ～ーーー
竜笛の一声。
　カーンンンン
大鼓の乾いた打撃音が響く。これが九尾の狐の第一撃。
すかさず彼女を構えてボウを引く。Soの開放絃で防衛。
御座所に異常はない。

揚幕が上がって胡蝶がすべるように出てくる。水平に上げた手に持っているのは〈初音の鼓〉。御所様は気づいていない。ヨイチは気づいたようだ。

竜笛が高音でむせぶ。うちけすように低音で和音をかぶせる。攻撃相殺。

その中をすりぬけるように舞台に出た胡蝶が歌いだす。

〝さるほどに、天竺摩伽陀国に班足太子と申せしは、三国一の美丈夫にておはするに……

アルトの声。異国風の衣装。スリットが深い。魔物とはわかっていても目がいくなあ。

と、ほややんとしていてはいけない。胡蝶の紡ぎだす即興の詞章に曲を充てなくては。天竺風の旋律をひねり出す。

目にはみえないが、おそらく胡蝶と彼女との間で大きな戦いが始まっているのだろう。胡蝶の顔が厳しい。ぼくもボウの動きが重い。なんというか、ボウを走らせたいのに、抵抗されるような力を感じるのだ。音をだすことを阻まれるような。

物語はイケメン王子班足太子が狩りに出て一匹の狐の命を助けるところから始まる。太子の優しさに魅かれた狐が美女に化けて後宮に入る。一身に寵愛を得て華陽夫人と呼ばれるようになった狐が、後宮の妬み嫉みや、とりいろうとする卑しい貴族の言葉に乗せられて次第に狂ってゆく。そして血の味を知ったとき、狐は魔物に化してゆく。

〝生首ひとつ一菩提、首を重ねて八正道……

はじまりは純粋な感情だったはずなのに人の世のあれこれで邪な憎しみを味わうことに楽しみを見いだしてゆく悲劇。その悲劇の中にいる自分を自覚しながら、どうしようもないまま虐殺を重ねる、矛盾して分裂した自己を抱えて、その解決を愛する太子にもとめてゆく。

それは胡蝶の過去の物語。情の深さゆえに恐れられ拒まれてきた数千年の過去の語りを慰めるように旋律をつむぐ。

たしかに胡蝶の歩んで来た歴史にはかなわない。けれど、矛盾して分裂した自己の解放を他者への愛に求める気持ちは、わかる。だからその気持ちを受けとめて旋律に託す。彼女が歌う。切なく、悲鳴にも似た高い音で。

胡蝶の物語はクライマックスに達する。

〝されども王宮の鏡をあてればその正体は狐なり……

歌う胡蝶の声も絶叫に近い。堺での公演でも聞いたことのない、余裕のない追いつめられたような叫び。異国風の衣装で舞う姿も跳び旋り身体を傾げのけぞりほとんど神懸かりに近い。スリットから出る生脚の色気が官能的だ。

〝恨むぞや、恨むぞや太子どの。かほど慕うているものを。あれほど深く契りてに。つまらぬ男のことばにまどい、かかる非道をなせるかな。

そして胡蝶は、〈初音の鼓〉をひときわ高く鳴らせた。彼女の絃が飛び駒が倒れた。波動が爆走した。御所様はじめ並み居る要人たちが奥の壁に打ち付けられ、三人衆は杉戸ごと隣室まで吹き飛ばされた。舞台の屋根は跳ね上がり、崩れた。白州の砂塵が舞い上がる。

そのまま塵幕が薄れゆく中に乱れた衣装に包まれ手に〈初音の鼓〉を持って呆然と立つ胡蝶の泣き顔が見えた。ぼくは壊れた彼女を抱えて胡蝶の目を見つめる。ほんのわずかな間見つめ合ったところに、兄が駆けつけてきた。御殿のほうからは「御所様！」という複数の声。

胡蝶はぼくから視線をはずしてあたりを一瞥すると寂し気に笑った。

「フロレンテ丸。また、逢おう。ムーサ。次こそ決着をつけるよ」

タンと舞台を踏むとそのまま跳躍して楽屋になっている長屋の屋根に飛び走り去った。

直後、鬨の声が周囲に響いた。同時に背後の御殿の中でどたばたした音がする。ふりかえると御所様を襲う三人衆からヨイチや弾正忠ら奉公衆が御所様を守って奥に避難しているところだった。

「逃げろ。芸人の居る場所じゃない」

兄が顎を楽屋のほうにしゃくる。

「兄さんは？」

「もちろん、逃げる」

といいながら目はヨイチの方に向いている。

「わかった。先にいく。一人で切り抜ける」

「できるか？」

「それ、言う？」

「……よし。信じる」

「死なないで」

「あたりまえだ。ヨイチを手伝ってすぐいく。ヨイチの下屋敷に戻ってろ」

「うん。信じる」

「急げよ。戦争だぞ」

「わかってる」

楽屋に駆け戻る。

「だいじょうぶ？」

彼女にやっと声をかけられた。

「だいじょうぶじゃ、ない……」

「すぐに絃を張り直して駒を戻すね」

「うん……」

「ごめんね……」

「ううん……」

絃を張り戻して駒を立てる。さらに彼女のボディを眺め回す。

「ちょっと……」

「うん。傷はない。ひびもなにもない。キレイなままのきみだ」

「う……。な……」
「よかった」
彼女を抱きしめる。
「は、恥ずかしいじゃないよ！」
「だって。きみが大切なんだよ。よかった。無事で」
涙が出て来た。
「な、なに泣いてるのよ。さっさと逃げましょ」
「うん」
彼女をケースに戻す。背負って腰に刀（あいかわらずの金属製棍棒）をさす。深呼吸一つ。
御所に兵がおしよせているらしい。このまま素直に戻れるとは思えない。今日は彼女をもう戦わせたくはない。もちろんぼくもできるだけ戦いたくない。
楽屋を出て廊下を通用口の方に静かにむかう。壁の格子窓の向こうから戦いの気配が漂ってくる。外を兵士が駆けているのがわかる。御所様の兵だろう。防衛隊を務める奉公衆にちがいない。
先の内膳所のほうが騒々しい。襲撃者たちが侵入しようとしているらしい。怒号が聞こえるのは防衛隊の面々が指示を出しているのだろう。
刀の柄に手を添えて内膳所方面は避けて進む。しかし、そうなると道がわからない。とりあえず渡り廊下から外に下りて前栽の陰を伝って、通用口にむかう……はずだったが、迷った。
「誰だ！」
襲撃者ではなさそうな兵士に誰何された。
「あ、御前で演奏した芸人ですう。帰りたいんですけど、どうしたらいいんでしょう？」
「！」
え？あれ？なんで刀抜くの？
「御所様襲撃の罪でとらえる！」
「はいー？　それ、誤解だから！」
「後で聞く。おとなしく付いてこい」
いや、そういう状況じゃないでしょう。
「いえ、お断りします」
「黙れ！」
と襲ってくる。しかたないよね。こちらも刀（くどいようだけど金属製棍棒）を抜いて、打ち振られて来た一撃をかわし兵士組のリーダーらしき人物の腹を突く。かわした勢いで脇の兵士の武器を撥ね首筋を叩く。もう一人が槍を突いて来た。かわして長柄を手に取りひねり上げる。そのまま踊った身体にさらに一撃。急いでその場を去る。とりあえず近くの建物の陰に。

どうやら情報が混乱しているらしい。当然だろうけど、舞台のあった御殿で謎の爆発。同時に外からの襲撃。まず疑われるのは芸人だよね。実際胡蝶の仕業なんだけど。ぼくは守ったほうなんだけど。でも知らないよね、そんなことは。舞台でどんな戦いがあったかなんてぼくですらよくわからないのに、わかれというほうが無理だ。

なんて理解がよくてどうする！　それより脱出だよ。

奉公衆の配下がこうとあれば、どうやら味方はヨイチと弾正忠、兄くらいしかいなさそうだ。なんか、絶望的。でも、ちょっと楽しい。だって、生きたいという気持ちが沸いてくるのを感じているから。絶対、逃げてやる。そしてご主人さまを助けて、あの細い華奢な身体を抱いて、「よかった」と言ってやるんだ。これ、死亡フラグじゃないからね！

襲撃軍の攻め入る音から離れるように、防衛軍すなわち奉公衆の配下の兵士たちから隠れて庭木や建物の陰を伝って逃げてゆく。とうとう奥庭へ。御座所の中でも最もプライベートな空間だ。そこで、とうとう兵士に見つかった。が、

「あれ？　対馬様の若？　……の弟君？」

知った顔。以前ぼくの家に仕えていた者だ。たしかシンスケといった、めっぽう腕のたつ男。槍を構えた同じ組の兵士を手で制する。

「あなたが騒ぎを？」

「ちがう。騒ぎをおこしたのは舞姫の方。ぼくは騒ぎを防いでたんだ」

「でしょうね。ヨイチさまとの仲を考えれば、あなたが裏切るとは思えない」

「信じてくれてありがとう！」

「こちらへ。今、御所様、兄上さまヨイチさまたちが来られましたから」

御座所の建物の裏手に連れていかれる。

そこは異様な空間だった。中央に積まれた、刀、刀、刀。ヨイチをはじめ奉公衆とその配下の者が武器蔵から刀を運び出して積み上げている。

「兄さん！」

「なんだ、お前、逃げなかったのか？　というより逃げ損なったな」

「だって味方にまで追われていたんだもん。シンスケに会わなかったらヤバかったかも」

「ありがとうな、新左衛門」

「いいえ。では、警固に戻ります」

爽やかに笑って戻ってゆく。争乱の音が近づいてくる。

「彼は今、誰のところにいるの？」

「さてな。よくわからん。ただ、腕前はすごいぞ」

「へ？」

「大胡武蔵守の弟子だ」

「え？　あの新陰流の？　だって一刀斎に学んでなかったけ？」

「武蔵守に勝負をいどんで負けて弟子入りしたんだそうだ」
「はあ～……と、それどころじゃないな。いよいよ最終決戦？」
兄が皮肉な笑顔を浮かべた。
「二条殿が強情でな……」
「そんなことをいってはだめだよ、新之允」
ヨイチがやってきた。弾正忠もいる。
「弟くん、ちゃんと逃げないとだめじゃない」
「だから逃げ回ってここに来ちゃったんですってば」
「しょうがないね。ぼくら一蓮托生だ」
「ぼくは、死にません。逃げ出して革嶋の姫を助けるんです」
「死亡フラグたてるんじゃないよ」
そのネタ使ったって。
「さきほどの南蛮音楽士だな」
バリトンの声が、大きくなる争乱の声を伴奏に力強く響く。
「御所様」
ヨイチや兄が膝まづいて敬礼するのにぼくも倣う。
「南蛮音楽士。礼を言おう」
「は？」
「あやかしから守ってくれたな」
「は」
「少々痛かったが」
「失礼しました。予想だにしませんで」
「楽器は無事か？」
「いま、休ませております」
「そうか。あの舞姫の持っていたのは、〈初音の鼓〉だな」
「御意」
「あの鼓をあそこまで発動できるのは、普通の者ではない。どこぞの名のある狐の化身であろう」
「かの九尾の狐でございます」
「やはりな」
「さて兵部大輔、弾正忠にその仲間たち」
「は」
ヨイチや弾正忠、兄たちが頭を下げる。
「命令する。これからここを脱出して興福寺に向かえ」

「は？」
「一乗院の弟を助け出してほしい」
「猊下を？」
「弾正少弼が大和にむかっていると聞く。足利嫡流を絶やすわけにはいかぬ。わたしも死にたくはないが、万一ということもある。弟をお前たちに託す。守ってやってくれ」
沈黙。争乱の音がさらに大きく聞こえる。
「そうだ。南蛮音楽士。大和に着いたら、郡山の源九郎稲荷に立ち寄ってみよ」
「源九郎稲荷？」
「〈初音の鼓〉の革の子ギツネだ」
「あ、佐藤忠信に化けたあの源九郎狐」
「助けてもらえるかもしれぬぞ」
爽やかに笑う御所様。これ、真面目なのかシャレなのか……。
「さあ、行け」
ぼくらの沈黙を、御所様は積まれた刀の一本を手にすることで破った。
「ここはわたしが守る。お前たちを守り弟を守る。すごいだろう？　わたしは征夷大将軍だぞ。部下や肉親を守れないでどうする」
凄絶な笑みを浮かべ、敵の来るであろうほうに身構えながら、背中越しにぼくらを一瞥した。
そのとき防衛戦が突破された。
場所は三方を建物に囲まれた狭いところだ。背後を取られることはない。ただし、御殿の裏口をのぞけば。木も繁り上空から矢を降り注がれる心配もない。狭いところにせいぜいが三四人で斬り込めるようなところだ。
敵兵士襲来。
御所様の刃がきらめく。
すごい。次々と屍が重なる。重なった屍が自然の要害となる。刃こぼれしたり脂がついて切れ味がおちた刀はためらいなく捨てて、積まれた刀を次々と使う。すべて銘のある名剣なのだろう。お宝でなく、実用されているのが凄い。
「行けい！」
底力のある号令。
「命令である！」
ぼくらは、深く敬礼して別れを告げる。
「拝命しました！」
ヨイチの、これまで聞いたことのない太い声の返事。弾正忠が傍らの建物の木戸を開ける。
「さあ、ここから」

ぼくらは建物の中に入り、木戸が中から見つからないように戸棚を移動して隠す。
外からは肉を切る音と叫び声が聞こえている。御所様のキメゼリフと高笑いもなかなかだ。
ぼくらは自然と隠した戸棚にむかってそろって頭を下げた。
土間から上がって廊下に出ると右手に御所様の私室がある。雨戸を閉じて暗くした室内にうっすらと人影が見えた。女性たちらしい。
「行きましょう」
弾正忠が表の間の方にむかう。襲撃者のたちの声と押し込む音が聞こえる。暗がりの中をぼくらは抜刀して進む。
むこうから襲撃者たちが様子をさぐりながらやってくる。目はこちらの方が闇に慣れている。
最初に動いたのは弾正忠と兄だった。黙ってひるむことなく手前の二人を切り倒す。動揺した隙をぼくとヨイチが駆け抜ける。気づいておそってくる敵を、あるいは突き、あるいは斬り、ときには引き倒し、殴って敵兵を倒しながらの四人一丸となって突破する。御座所奥書院から、さっきまで舞々を見物していた大広間へ抜け、さらには式台へと向かう。できるだけ、建物の中で戦う方が少人数のこちらには有利だからだ。
式台を出ると敵味方死屍累々。それでもなお戦いが行われている。城門にむかって切り抜ける。御所の馬は解き放たれてどこかに消えてしまっている。ぼくらは離れないように城門から逃げ出すしかないのだ。幸い多くの襲撃兵は奥にむかったらしく手薄である。ぼくらに気づいて襲いかかってくる兵士も若干名いるが、ぼくらの敵ではない。ヨイチだって御所様ほどではないにせよ同じ土佐入道の弟子であって、そんな彼と剣戟を訓練したぼくたちだ。それがチームを組んで敵にあたるんだ。強くないはずがない。
開け放たれた城門に達する。城門の陰からうかがうと、門前の室町通に襲撃軍の本陣が設営されている。中央にいる若者が司令だろう。陣幕には桐紋。両脇に参謀らしき年寄が数人。その周囲に長銃を持った者が警固して城壁のように立ち並んでいる。
「さすがに歩行で突破はきびしいか」
「鉄砲がなければな」
「ほかにまわる余裕はないし」
「ほかだって同じだろう」
一つだけ、手がある。
あっさり崩れる決心。だって死にたくないもの。ご主人さまを助けるんだから。
背負ったケースをおろした。優しく撫でる。
「ねえ。助けてくれる？」
「もちろんよ。やっと頼ってくれたのね？」
「休憩は、できた？」
「なに言ってんのよ。あれくらい朝飯前のちょちょんのちょん、よ」

ふっと思わず笑みがこぼれてしまう。うん。きっとだいじょうぶだ。
「兄さん、ヨイチ。強行突破するよ」
「どうする気だ？」
「彼女に助けてもらう。一気に陣営を吹き飛ばすから、石垣の後ろに隠れて。敵陣が崩壊したら、一気に駆け抜ける。いいね？」
「「「よし」」」
城門の石垣の裏手に隠れる。
まずは調弦。大きくraの開放絃を響かせる。ゆるやかな波動が風となって敵の陣幕をゆらす。次にleの開放絃。そうして門の中央まで歩む。敵の陣営が緊張し、兵士が長銃を構える。その瞬間。全開放絃の和音を力強く、鳴らして、高いmiの音を引っ張る。さらに低いsoの開放絃を響かせる。音の波動が広がってゆく。敵の陣営が崩壊する。若い司令は吹き飛び、向こうの町家に激突する。年寄たちも地を摩って町家に頭から突っ込む。長銃を構えた兵士たちは宙に舞い上がり、地に叩き付けられる。城門の櫓が軋む音がした。
「いまだ！」
ヨイチが、弾正忠が、兄が、走る。シンスケまで走っている。どこから出て来たんだ？
ぼくも彼女を持ちながら走る。兄たちが路地に逃げ込むのを確認したあと、もう一撃。中二本の開放絃の和音を弾いたあとに、軽く早いパッセージをガリガリと弾く。立ち上がった兵士たちを再び波動が断続的に襲い、それはさらに町家の軒先をも破壊した。無事だった城門の櫓が、この一弾きで臨界を越えたのかギギギ…とうなってゆっくり崩壊を始める。ちょうど音を聞きつけて城内から戻って来た一隊を下敷きにして崩れ落ちたのを目の端に認めて、ぼくもすばやく現場を走りさる。
襲撃軍は町家の中に兵を残してはいなかったらしく、少し走れば静かになった。人気はない。戦の予感に町衆はどこかへ避難したのだろう。小さな空き地の祠の裏に駆け込み、彼女をケースにしまう。
「ありがとう。助かったよ。ぼくも兄さんもヨイチたちも」
「もっと凄いこと、できたのにな」
「きみには仇敵ができたじゃないか。そのときのために、むだな喧嘩はしなくていいよ」
「気遣ってくれてるのよね。ありがと♡」
「じゃあ、また少しおやすみ。ヤバくなったら呼ぶから」
「うん」
再び彼女を背負ってヨイチの屋敷にむかう。背後から追跡の気配は、ない。
ぼくらはほとんど同時に屋敷に戻った。
「なんで、シンスケまでいるんだ？」
「まあいいじゃないか。彼は今、弾正忠の配下にあるのだからさ」

ヨイチである。ま、いいけど。

御所の状況はサスケが知らせてくれた。だからそこまで見ているなら加勢しろよ、とツッコミたくなるほどに。

壮絶な御所様の戦いぶりと最期は、そのまま胡蝶に演じさせたいくらいに劇的だった。ぼくらが脱出したときにかすかに気配を感じた女性陣――御所様の母君様と侍女たち――の兵士たちによる陵辱と殺戮の物語は哀れだった。それを淡々と語るサスケが怖い。さすがにヨイチが自室に引っ込んだ。弾正忠は庭に出た。兄は顔から表情が消えていた。身動きせずにじっとしていて、静かに涙が一筋、垂れた。

ぼくは暗い思いにうたれて、彼女を手にした。短く一曲、弾いた。その物語の悲しさを。どうしようもない、やり場のない怒りと悲しみを旋律に乗せて、解き放った。彼女は黙ってぼくの気持ちを旋律にのせていた。

「それが、南蛮音楽ですか」

とそのまま居着いているシンスケ。こいつだけは表情を見せない。

「切ない響きですね」

あまり感動したようには思えない口ぶりに、かえってこちらの気持ちが醒めてくる。まあ想いを歌い上げたあとだからということもあるけど。

兄がなにか言いたそうにしている。でも言葉がみつからないのか、口を真一文字に引き締めている。こういう顔は珍しい。

そしてヨイチが戻ってくる。弾正忠もだ。

「すまなかった。これから大和にむかう。新左衛門も同道する」

「え～と……」

「弟くん。すまないがもう少し力を貸してくれないか？」

「あの子を……」

「わかっている。動きがあったらすぐにそっちにむかってかまわないよ。すぐ連絡させるように手配しておくから。尉太夫や新三郎たちを信じてやってくれ。ほんとうはぼくの守りとして御所の方に出向きたかったのを、君のために、四郎の屋敷に張り込ませているのだから。だから君は彼らに報いるのが義務だよ」

く。正論。

「わかりました」（タメイキ）

「それに御所さまからいわれたじゃないか。源九郎稲荷に行くように」

「ええ…」

「じゃあ、みんな。腹をこしらえ仮眠をとったら大和にむかうよ」

先だっての侍女たちが膳を運んでくる。湯漬けに香の物だけ。

さすがに疲れが出てきて、食後に転がるとすぐ寝入ってしまった。

○

夕刻。兵部大輔邸を駆け出る五騎。ぼくと兄がいるからか、まずは桂川西地の父の領地に向かった。このような形で実家に舞い戻るとは思わなかったが、意外なほど感慨がない。

すでに連絡が届いていたのだろう。父が出迎えた。

「兵部大輔」

「対馬殿。お手数をかける」

「むこうでは孫六がお迎えいたします」

父は力強く笑んでヨイチに握手した。続いて兄とぼくをチラとみたが、何を言うでもなく、配下の者に下知を下す。

実家の館は東側が桂川に臨み、船着き場を持っている。そこには搬送用の舟が二艘と警備の船団が待機していた。ぼくと兄、ヨイチと弾正忠、シンスケとに分かれて乗るとすみやかに川を下りだした。

「御武運を」

父はヨイチに深く頭を下げている。ヨイチが答礼する。

すぐに水路に入り巨椋池に出る。夕日があたりを黄金色に染めている。

京から奈良にむかうとき、伏見から山沿いに宇治にぬける陸路もあるが、むしろ鴨川か桂川を舟で下り巨椋池を直で渡るほうが早い。今回はうちの船団を使って、沈む夕日を眺めながら宇治の槙島まで水面を滑る。

槙島城は宇治川が巨椋池に流れ出るところの中州に構築された館である。ぼくらを乗せた舟は槙島城の船着き場に到着した。出迎えたのは父より若いが真面目で頑固一徹そうな武骨な領主であった。

「猊下を、よろしくお願いいたしますよ、兵部大輔殿」

声も力強い。

挨拶もそこそこに僕らは馬を駆る。すでにあたりは暗い。

走りながら気づいたのだが、在地領主間に御所様のネットワークが張られているみたいで、父から槙島の領主、さらに大和国にむけて点々とわれわれを受け入れてくれる領主がいた。大和は弾正少弼の勢力下なので隠密に行く必要があったのだが、より安全なルートが在地の小領主から指示されて、ぼくらは手渡しで運ばれる荷物のように戦うことなく奈良に入ることができた。このネットワークがヨイチの、あるいは父の手配によるものなのか、御所様が生前に築いていたものなのかはわからない。でも一乗院にむけて安全で短いルートが構築されてたのだから御所様と弟君とをつないでいた、兄弟間の絆のようなネットワークだったのではないかと思う。

「弟くん」

ヨイチが呼ぶ。この人はぼくの名を呼んだことはない。この人にとってぼくは〈親友の弟〉という位置づけなのだ。

「源九郎稲荷に行くにはあっちの道だ。地図は頭に入っているね？　ここからは一人で、かつ弾正少弼の支配下だから、気をつけて行くんだよ」

「え？」

「君の仕事だろう？　早くすませてぼくたちに合流してくれ」

そう。この人にとって〈親友の弟〉ではあっても、信頼は寄せてくれているし、存在を認めてくれてもいるのだ。

「ぼくらは一旦、新左衛門のところで対策を練る」

「え？柳生は弾正少弼の配下では？」

「新薬師寺の和尚が通じてくれているのです。柳生に通じる道の口ですしね。古くから親しくしてきたのですよ」

「へ～」

「だから、そっちが終わったら新薬師寺を訪ねて来るんだよ？　弟くん。いいね？」

黙ってうなづく。

「よし。行け」

馬の胴を蹴る。すべるように走りだす。ふりかえることはしない。暁の闇の中を走る。次第に左手、龍王の山の稜線が浮かび上がってきた。

それほど時間をかけることなく郡山の集落群の近くに達する。田圃の広がる中に所々濠に囲まれて家々が黒く浮かびあがる。南に遠く灯火が見えるのはここの領主の住む筒井館だろう。できるだけ音をださないよう、地響きをおこさぬよう、馬の速度を落として集落を避けて抜ける。源九郎稲荷はこの先にあるはずだ。進むにつれて道の右手の森の陰から、灯明が見えて来た。手前に鳥居があるらしい。あそこか？

「！」

いきなり宙を舞った。ふわっとしたのも一瞬。すぐに地に叩きつけられる。背中の彼女をかばってひねった身が痛い。十分に受け身がとれなかった。てか、顎、擦った。

落ちて身を立て直す隙もなく、男が数人現れ、縄でくくられた。どうやら道に張った縄にひっかかって宙に舞ったらしい。

「藤太様に知らせろ」

「おう、すでに走らせた」

この身を縛った連中は小者らしい。やがて松明が見えると、一人の上司らしい男がかけてきた。

「上出来、上出来」

と、はしゃぐ甲高い声が癇に障る。

「こやつが例の南蛮音楽士か。ふん。おそれいったか」

なんだ？　こいつ。丸顔の、どっかおどけた感じのする軽そうなヤツ。とは言うものの、しっかり縛られているので、いまのところどうしようもない。上司はどこかおとぼけでも周りの連中はしっかりしていそうだ。部下に守られてるな、この人。

「南蛮渡りの外道の妖術で御所様を手にかけた極悪人め。この逸見藤太が生け捕った！」

一瞬、意味がわからなかった。が、なんだか、すごい噂が流れているらしい。

逸見藤太と名乗った目の前の剽軽者は、どこか浮かれているようで、捕まった身で言うのもなんだが、まったく緊張感がない。御所様のあの姿を見たこの身にとって、またあのヨイチの様子を知る者にとって、胡蝶と戦ったぼくにとって、あまりに平和で暢気すぎる。こういう輩にはハッタリをきかせるにかぎる。

「ふふ。ふふふ…。ふむふ。むふ。むは。むは。むはははははは！」

とまずは高笑いをしてみせる。案の定、ぎくっとしやがった。

「これしきで生け捕ったとは片腹痛いわ」

低めの太い声を響かせてすごんでみせる。予想通り逸見藤太はビビりながら上から目線で答えてくる。

「ふ、ふん。何をぐるんぐるんに縛られたまま、強がりをいっておるのだ」

「愚か者め。南蛮魔術にかなうと思うか！」

上目遣いで睨んでみせる。剽軽者が怯えている。さあ、どうでる？

「え、ええい。さっさとお館さまのところに連れて行け！」

そうきましたか。つい、剽軽者につられてハッタリかましてみたものの、けっこう縄はきつめに縛られ、簡単にはぬけだせない。いささか困った状況だ。

奪われて剽軽者の手にあるケースがコンと鳴った。

松明の光は、まだ夜にとどまろうとするように、あたりを明るく照らしていたが、一迅の風が松明を消した。空が光を蓄えた深い藍色に変化している。漆黒に包まれた周囲が少し輪郭を浮かばせてくる。夜明けが近い。

明かりが消えて立ちすくんだ剽軽者たちをうっすらと霧が包んでくる。部下に緊張が走る。

「お？」

道の先の霧の中に人影がまぎれている。

そのものは赤地に金糸の御所車紋様の衣装を着、尻端折りをして、さらに紫の仁王襷をかけている。むき出された腕と脚が白い。顔には白地に赤で彩色された狐の面。正直、怖い。

ヒョー

と風が竜笛のように鳴った。

狐面の男の左手と左膝が持ち上がり、やあっとばかりに踏み落とす。ぼくをとりまく半数が尻から倒れて気絶した。

ヒョー

と風がまた鳴った。

今度は狐面の右手と右膝が持ち上がり、やあっとばかりに踏み落とす。ぼくをとりまく半数が尻から倒れて気絶した。

無言のゆったりとした動き。仮面だから表情がない。なのでかなり怖い。

ことばを失って立ちすくんでいるのが剽軽者で、目がとびださんばかりだ。

きッと狐面が剽軽者に顔をむける。面の向こうの視線が凝(こ)り固まった剽軽者を射抜く。

「な、なにやつ！」

狐面が剽軽者にむかって右手をのばす。くいっと手首をひねると

「ひゃっ」

もんどりうって剽軽者は背中から地に落ちて目を回した。

宙を舞ったケースの中で彼女がコンと鳴った。

狐面はケースを受け止め、ゆったりと力強くぼくのほうに歩み寄り、縄を解いた。ぼくが立ち上がると踵(きびす)をかえし、ついてこいというように鳥居にむかって歩いてゆく。

導かれて鳥居をくぐる。近くの灯明の明かりで前を歩く狐面の赤地に金糸(きんし)の御所車紋様(ごしょぐるまもんよう)がひときわ浮かび上がったあと、その姿が参道の闇の中に消えた。お約束の展開。きっと美女が出て……

「やあ」

さわやかな青年だった！

「ぼくのご先祖と両親が迷惑をかけてるみたいだね」

「あなたが？」

「そう。九郎判官源義経(くろうほうがんみなもとのよしつねこう)公より名前を賜った源九郎狐(げんくろうきつね)さ。いまはここのお社(やしろ)を預かっている」

頭を下げておいた。ようやく明けて行く夜の暗さが薄らいだ中で見る源九郎狐の面長(おもなが)の顔はどこかで見覚えがある気がする。

「覚えていてくれたかな？」

ぼくの表情を読み取ったのか、にこやかに語りかけてくる。が、思い出せない。

「ふふ。ぼくらは一度、会っているんだよ、フロレンテ丸くん。堺でね」

記憶を手繰ってみる。

「この女神さまとぼくのご先祖、両親と戦っている現場でね」

「あ、スタンディング・オベーションした人！」

「そう。思い出してくれた？」

上演中、一度も笑顔を見せなかったくせに、真っ先にスタンディング・オベーションをしたので印象に残っている。今見る笑顔はあのときのような無表情ではない。

「覚えていてくれてうれしいよ」
彼女を渡してくれて、すうっと片手をあげると、付近が歪(ゆが)んで、タペストリに囲まれた石作りの一室となって、ぼくらの前に卓が一台、後ろに椅子が現れる。
「座ってくれていいよ。べつに馬草(まぐさ)でもなんでもない、本物さ」
そういって自ら先に座る。手を叩くと童女が飲み物と菓子を持って来た。
南蛮茶碗に童女が銀の容器から注いだ飲み物は、焦(こ)げを溶(と)かしたような臭いと色をしていた。菓子は黄色いふわふわしたものだ。
「これも馬のゆばりや馬糞ではないからね？　ちゃんと堺から買って来たものだから。君の公演を聞いた帰りに福富屋さんからね」
源九郎狐(げんくろうきつね)は、卓に置かれた壷からおそらく砂糖と思われる薄茶の粉を焦げた液体に入れてかきまぜて呑んだ。
「これはマメを煎(い)って砕いて粉にしたものに熱湯(ねっとう)をかけ、濾過(ろか)した飲み物だよ。苦いから砂糖を入れて呑むといい。お菓子の甘さにはよくあうんだ。カステイラくらいは知ってるよね？」
「あ、これカステイラなんだ」
「そう。食べて。それからそこの女神さまの姿も拝ませてもらいたいなあ。話したいこともあるし」
狐につままれたような、ということばがあるが、まさに狐の術中にあるぼく。でももとより源九郎狐(げんくろうきつね)に会いにきたわけだし、おそらく歓迎されているのだろうから、ここは素直に従っておこう、と腹(はら)を据(す)えた。
「さ、座って」
促されるままに彼女を下ろしケースから取り出すして隣の椅子に置く。
「はじめまして。エラトーさま」
「はじめまして…」
「貴女(あなた)に対して私の先祖と両親が無礼をはたらきました。お詫びいたします」
「いいのよ。勝負だから」
「ありがとうございます」
「質問、いいかな？」
これはぼく。渋面(じゅうめん)できくのは飲み物が苦かったからだ。
「はい、どうぞ」
「ご先祖さま、という言い方をしているけど、あなたは九尾の狐の子孫なの？」
「そうですね」
くすり、と笑う。

「まあ、妖狐という括りの最初が九尾ですので。あなた方と違って宗家（そうけ）というものはありませんし」
「そう。まあ、いいや。それで、胡蝶をどうにかしたいのだけど」
「ええ。ぼくも両親をご先祖から解放したいんですよね。いまはご先祖さまの武器でしかない」
「どうにかならないの？　強引に奪うのは無理そうなんだけど」
「わたくしが直接両親に語りかけて、目を覚まさせるしかないでしょうね」
「？　どういうこと？」
「そこで、エラトーさまにお願いがあるのですけど」
源九郎狐が彼女の方を向いて語りかける。
「え？」
「両親の力は、とくに鼓の皮となってからは、鼓の持ち主の力を増幅するような力なんです。だから持ち主の言いなりにもなるし、また御所様の家に代々伝わってきた理由もあるんですよ。ある意味、御所様の力を引き出して天下を守ってきたようなものです。で、いまはご先祖が持っているわけで、ご先祖がえらくパワーアップしているわけですね。ですからエラトーさまがご先祖と戦っている現場で、わたくしが両親の目を覚まさせるしかないのです」
「つまり、いいかえれば、〈初音の鼓〉をあなたが、九尾の狐をわたしが、相手にするってことね？」
「そうですね。そういうところです」
「……わかったわ。でもどうやって目を覚まさせるの？」
「わたしの声を貴女に運んでいただきたいのです」
「え？　わたしは九尾の狐と戦うんでしょ？」
「言い換えましょう。わたしがフロレンテ丸くんに憑いて貴女を演奏するということです」
「え？　……え？」
「貴女を鳴らすことができるのはフロレンテ丸くんだけ。ご先祖と戦えるのも貴女だけ。ご先祖の手にするものに働きかけるためには貴女がわたしを手にしなくてはならないでしょう？　だから貴女を鳴らす彼にわたくしが憑（つ）くしかないのです」
「ちょっとまて！　するとなにか？　ぼくに狐憑（きつねつ）きになれと?!」
「そうだよ？」（ニコっ）
「えぇーっ?!」
「簡単なことだよ。次に君たちがご先祖さまと戦うとき、あなたがぼくを装着してくれればいいだけさ」
「装着？」

「そう。これからぼくは仮面に変身して君と一緒に行動する。そしてご先祖と戦うときに、ぼくを顔につけてくれればいい」

「一緒に行動って…」

「見ればわかるよ。さて。じゃあエラトーさま。よろしくお願いします。フロレンテ丸くん。エラトーさまをケースにいれてまた背負っておくれよ。あ、飲み終わってからでいいからね、ってカステイラまだ手つかずじゃないか。さっさと食べて♪」

「あ、はい…」

カステイラは甘く美味い。これをなんでこんな焦げ臭い飲み物と一緒に食さなければならないんだ？　とか思いつつ、いわれたままぱくぱく食べて、焦げ汁を飲み干す。舌の上の甘さが焦げ汁で払われるようだ。うん。この組み合わせならいいかも。

彼女をケースにいれて背負う。

「では、よろしくたのむね？　フロレンテ丸くん」（ニコっ）

すうっと周囲がぼやけて意識がなにかに吸われるような感覚。一瞬気を失ったのだろうか。気づくと夜明け前の神社の境内の石の上に腰掛けていた。

ぶひん

という馬声は、魚屋さんの馬のものだ。すぐ脇に控えている。目があうと、委細承知という視線で答えてくる。頭のよい馬だ。堺からずうっとぼくを乗せて走ってくれている。なんかいい名前を付けてやりたい。

それにしても、やっぱり狐に化かされた感が残る。いま飲んでたの、お前のゆまりじゃあるまいな？

ぶひん

立ち上がると膝の上から何かが落ちた。拾い上げると狐の面だ。

「装着？　これを？」

「そうだよ。よろしくね」

「あ、話せるのね…」

「戦うときにぼくを顔の前に装着すればいいからね」

「了解」

源九郎さんを懐にしまい、馬に乗る。深呼吸一つ。龍王山の彼方から光が溢れてくる。明るくなったが、急いでヨイチたちのところに戻ろう。目指すは新薬師寺。足で馬の胴を軽く叩いた。ゆっくりと馬が走り出す。

あ、神社拝んでくるのわすれた。ま、いいか。ご神体の源九郎狐と一緒なんだから。

# 第六章　近江国大守館

新薬師寺まで目立たぬように並足で向かった。

正面から朝日を浴びて東にむかう。左手の遠い森の上に薬師寺の塔の相輪が輝いている。右手前方の森の普請現場は大安寺だろうか。

目指すのは左手前方の山麓に広がる森の一角。早朝の風がさわやかだ。

しかし、若草山の手前の奈良の町付近、大仏殿や興福寺の五重塔の付近にちらちらと見える旗の紋からは、弾正少弼の陣営が一乗院一帯を囲んでいるのだと知れる。針路を右よりに直して、集落を避けるようにして山裾まで近づき、ほとんど獣道みたいなところをゆっくり北に上がって新薬師寺についたのは午近くになってからだった。山に近い塔頭の一つに兄たちが待っていた。さらにゲンザとマンスケも京から下ってきていた。一つの知らせを持って。

「ご主人さまが?!」

「弟くんは近江に行くかい？　ぼくらとともに猊下救出作戦に参加するかい？」

「もちろんすぐにご主人さま救出作戦を展開します」

ヨイチが苦笑した。ゲンザが渋面を作る。

「少し、たくましくなったかあ？　こいつ」

野太い声でマンスケが人を指差す。マンスケ、万助と書くが、ぼくらの中で最年長。むしろ尉太夫さんに近い。ヨイチを兄貴分的な位置から支えている男だ。

「そうだね。いいじゃあないか。生きる目的を見つけたみたいなのだから。ゲンザ、情報提供してあげたまえ」

「革嶋の姫を乗せたと思われる輿が今朝早くに仏光寺の四郎の屋敷をでた。編笠をした武士と十数人の兵士が警固している。進んで行った道から考えて、逢坂を越えて大津から海路をとって沖島で一泊。明日の朝、沖島から長命寺を経由して安土から観音寺に向かうと考えるのが自然だろう。いま新三郎と少五郎、サスケが追っている」

「じゃあ、ここからなら……」

「ギリギリだな。一晩駆けて長命寺で追いつくかどうかだろう」

「そのまま長命寺に行くことは考えられないのか？」

これは兄の質問。

「おそらく沖島の衆を無視できまいさ。左京大夫殿ならともかく、四郎殿レベルではな。沖島に関銭はらわないと身動きとれまい」

ゲンザが答える。

「弟くん、がんばれ。新之允、きみも弟くんと一緒だよ」

「え？」
「この中ではね。きみと弾正忠が左京大夫の配下なんだよ。ぼくらは猊下をお助けしたら甲賀の弾正忠の館に逃げる。きみの活躍の基盤は西岡にあるとはいえ、左京大夫の身内には顔がきくはずだ。だから弟くんを助けて四郎のもとから革嶋の姫を助け出し、左京大夫と連絡をとり、ぼくらと合流する。いいね？」
「左京大夫さまとはどんな連絡をとればいいんだ？」
「二条殿亡き今、猊下を守るか、四郎とともに三人衆に味方するか」
「わかった」
「そして弟くんには、最後に活躍してもらわなくてはね」
「……アレっすか？」
「そう。きっと、あらわれる」
「胡蝶……」
「足利嫡流を滅ぼそうとしているように見える。それが魔物の性なのか、三人衆との契約なのかはわからないが、一つだけ、確かと思われることがあるんだ」
「なに？」
「南蛮音楽士との決着」
だよね。
「われわれが猊下を助けに来ていることはもうバレているだろう。そして南蛮音楽士が一緒であることも知られている。であれば、九尾の狐はきっとまた現れる」
「ふう……」
コン！
タメイキをついたらケースの中の彼女が鳴った。やる気満々らしい。
「わかった。こいつを連れて近江へ往き、革嶋の姫サンを助け、左京大夫様の真意を聴き、甲賀の和田館へ戻ればいいんだな。いつまでに？」
兄が確認を取る。
「猊下救出は今夜。明日の昼には和田館に着く予定だ」
「明日の夜か、明後日の朝までには和田館に着くようにしよう」
なんだかな～。ぼくの知らないところであれやこれや決まってゆくな～。
「じゃあ、行くか」
兄がぼくをうながす。ちょっと眠いんだけどな～。腹も減ったし。
「おいおい。少しは休ませてやれよ」
そういってくれたのはマンスケだ。
「お前は着いてすぐ休んだろうが、弟は夜通し駆けたんだろうが」
「そうか。そうだな」

「庫裏(くり)にいけば食い物がある。腹を満たして、一眠りしろ」
「うん」
年長者は優しい。

○

ヨイチたちと別れて、再び兄と馬を走らす。心が逸(はや)る。
途中までシンスケが並走する。シンスケは柳生の領主の息子ということもあって（それがなぜウチにいたり弾正忠のところにいたりするのか、よくわからないが）、よい護衛だった。
夜半、笠置(かさぎ)で護衛がヘイジという甲賀衆に変わった。年齢不詳でやや自己顕示欲が強いが、腕はたつようだ。殺気がすごい。
山の中をかなり早い速度で抜けて明け方には淡海(あわうみ)が見えた。日の出の方角に左京大夫の居城が見える。正面遠く海に浮かぶのが沖島だ。その手前の山の麓に、おそらくご主人さまが着くであろう長命寺の湊がある。
堺を見た目には長命寺の湊は貧弱にみえるが、それでも交通の要所なのだろう、蔵や商店が立ち並んでいて、どこか自由な風がある。内陸の、とくに大和にみられるような濠をめぐらした中に肩を寄せ合って生きているのはどこか窮屈だ。ぼくの故郷も濠で囲んだ集落を形成してはいるが、川には船着き場があって少しは解放感があった。だから、そこから衝動的に飛び出した。そしていま再びそこから兄とともに出立したのだった。前に旅立ったときには彼女と出会い、そして今度は……。
「おい」
船着き場にむかいながら想いにとらわれていると兄から声をかけられた。
「あ。ごめん」
「使いがきている」
「え？」
サスケだった。かたわらにもう一人、ヘイジと同じ気配をもった痩せた目つきの鋭い若者がいる。デンゾウと名乗った。
「あれだ」
デンゾウの指差した向こう、西の海に白帆が見える。
「おそらく安土(あづち)の豊浦(とようら)の湊(みなと)に向かうのでしょう。あそこからだと四郎様の屋敷に近い」
「すでに新三郎殿が向かっております」
「兄さん」
「うむ。追うぞ」

西の海の向こうになだらかな岬が見えそのまま右のほうに高い山となって続く。ただ、その山はほとんどが石垣で武装された、巨大な石の怪物のように見える。その向こうから後光のように陽が上ってきた。

「すごい城だね」

「お前は初めてか？」

「兄さんは来たことあるの？」

「左京大夫さまのお伴で何度も来ている。屋敷はないがな。知り合いもかなりいるぞ」

「へえ～」

「大守の館は山頂と麓にあるんだ」

「大守館にはいま四郎殿がおります」

ヘイジの解説。

「では左京大夫さまは？」

「箕作（みつくり）の館の方に」

「このまま姫を救出して箕作の館に逃げ込むことはできるか？」

「どうでしょう。いま箕作の館の周囲には四郎殿に味方する手勢が陣を敷いています。むしろ左京大夫さまに近いお方のところに一旦寄られてから向かう方がいいのでは？」

「それは近江国衆が分裂しているということだな？」

「御意」

「蒲生……いや、但馬守様はどちら側に？」

「後藤……様ですか？左京大夫さまをお守りして箕作の館におられます」

「左兵衛大夫殿もか？」

「いえ。蒲生様はお屋敷の方におられるはずです」

「よし。大守館に運び込まれる前に奪うぞ。サスケ、左兵衛大夫殿に言づてを頼む」

「なんと？」

「新之允兄弟が後ほどご挨拶に伺いますと。それだけでいい」

「御意」

「デンゾウくん、サスケを案内してあげなさい」

「わかった」

甲賀衆二人が加速して去って行く。海に目をやると目標の舟が近づいている。向かう先に町がある。もう船着き場が見える。

「あそこだ。よし。一気にいくぞ。船着き場で襲う」

加速。この馬もよくついてきた。つい頭を撫でてやる。

ぶひん

気持ちが伝わったのか喜んでいるようだ。

舟が接岸の準備に入ったのを見て、一気に町に走り込み、朝の支度をしている町の人たちの驚きと非難の目を一身に受け付けて、湊に駆け入る。港湾警固の兵士が身構えている。おそらく事前に連絡がしてあったに違いない。かなりの数だ。

舟はちょうど着岸したところで舳綱（ともづな）を水夫が固定している。

兄と、ぼくと、ヘイジの三騎で騎乗したまま兵士の壁に突入。勢いで突破。兄とヘイジが頭をかえして下馬。刀を抜く。ぼくはそのまま桟橋へ突進。舟の中から兵士が出てくる。ぼくも馬を下りて、刀（くどいようだけど刀型金属製棍棒）を抜く。そのまま勢いをつけて兵士二名を海にたたき落とす。舟に飛び乗ると屋形から出て来たのは見覚えある体つきの男。笠をかぶっている。

「鶏冠井（かいで）八郎か」

「いかにも」

笠をとる。初めて正面から顔を見た。

「ん？　昔、どこかで、会った？」

「……知らん」

刀を抜く。打ち込んでくる。こちらの刀型金属製棍棒で鍔元（つばもと）を受け止める。そのまま刃先にむかってツィーと擦る。

キーーン

と金属のこすれ合う音。

払う。たたらを踏んだ鶏冠井八郎にむけてうちおろすが、やつめ、そのまま転がって避けやがった。

あれ？既視感。

立ち上がってぼくを睨む目。あれ？　既視感。

疑問符を立ち上げている隙に踏み込んでくる鶏冠井八郎だが、脇が甘い。刀をはねのけると手を離してしまう。飛んでゆく大刀。そのひるんだ隙に足払いを食わせて海に落とす。

「ちくしょー」

と叫んで

どぼん。

あれ？　既視感。

それよりご主人さまを助けないと。繋留（けいりゅう）された舩の屋形にはいる。

凍った。

「うふ。いらっしゃい」

「胡蝶……」
「うれしいわ。白馬の王子さま。助けにきてくれてありがとう」
「ご主人さまは……」
「さあ。いまごろは四郎さんの毒牙にかかっているんじゃないかしら？」
「くっ……」
踵を返して屋形を出る。
「囮（おとり）だ！」
叫ぶ。兄とヘイジが反応する。
「あん。待って」
ケースが鳴る。懐が重くなる。
「待たない」
「だーめ♡」
すうっと目前にあらわれる胡蝶。走りだそうとしたぼくに抱きつく。
「うわっと。あぶねえ！」
「あらん、らしくないセリフ」
「じゃねーよ。遊んでるヒマねえんだよ！」
「え？　遊びじゃないわよ。わたしだって囚われのお姫様なんだから」
「馬鹿やろう！　なにいちゃついてやがる！」
兄が怒鳴る。
「ちがーう！　襲われてんだ！」
「幸せなことしてんじゃねーよ！」
兄たちが馬に乗る。
「勝負は、あとだ。ぼくはまずやらなきゃならないことがある」
胡蝶をひきはなす。
「あん。いや」
上目遣いでぼくを睨む。ちょくしょうめ、ドキっとしちまったよ。
「また逢うぞ、胡蝶。そのときは存分に相手してやる」
ダッシュで向こうで待機している馬のもとに向かう。
「イロにはまってんじゃねーよ！」
「わるい。大守館だ」
馬に乗るや駆け出す。見ると敵兵は壊滅（かいめつ）。切られまくってのたうち回ったり死屍累々（ししるいるい）。
こいつら囮（おとり）で殺されたり重傷を負ったりしてるんだよな。かわいそうに。
ふりかえる。胡蝶が笑顔で軽く手を振った。あれ、魔物なんだよなあ。残念だなあ。
そう。いまは、あの、カワイイご主人さまだけのことを考えよう。

背中で彼女がコンと鳴いた。

豊浦の町並みを騎馬三騎が疾走。しかし商業街を抜けて、国人衆屋敷街に入ると辻々の警備小屋から衛士が現れる。次々叩き伏せてゆくが、次第に繰り出す人数が多くなってきた。

道はまだ緩い斜面で、上ってゆく先の右側に大守館の望楼(ぼうろう)が見える。その坂道に段々に衛士が出てくる。幸い鉄砲部隊はいない。

「蹴散らすぞ」

「おう」

騎乗戦だ。敵は馬を狙ってくる。それをかわすのが第一。かわす勢いで敵をうち伏せるのが第二。踊るように突き進む。

しかし、敵も予想していたのだろう。繰り出す手勢が尽きない。もう少しなのに。もう少しで大守館なのに。

馬が疲れだしてきたらしい。動きが鈍い。脇の兵士が槍を繰り出して来た。さすがにまずいかというときに、

ヒュン

矢が兵士の腕にあたり槍の軌道がそれた。すかさず打ち据えると同時に馬をとびおりる。周囲の兵士を叩きつぶしながら道を進む。馬は主人が下りて安心したのか、脇道に休憩に歩いて行った。もちろん寄ってくる兵士は蹴り倒して。そうだよ。馬に蹴られてしまえ。じゃまするやつは。

寄せ来る敵をばったばったとなぎ倒し、大守館につきすすむ。ぼくの太刀筋をじゃましないよう、上手に敵兵を射抜く矢。味方だ。

道脇の並木の陰から若者が一人。

「やあ」

新三郎(シンザ)だ。

「久しぶりですね。おかえりなさい」

「うん。ただいま。そしてありがとう」

「何がです？」

「ぼくの都合につきあってくれて」

「そりゃあ。あなたの大事な恋路ですから」

優し気な言葉だが、すご～くいやらしい笑顔付き。

「……あのな……」

という会話を死闘中でもかわす仲。西岡の小領主の息子たちの中で、ヨイチたちのテンションについていけないグループで、ヨイチ組の中ではおとなしめの――ほんとだよ――ぼくと仲が良かった連中。ただし、こいつら腕は抜群。とくにシンザは弓と槍を得意とする。

矢を射ち果たし、シンザは敵の槍を奪い取った。

「よお」
兄も馬を下りて白兵戦で近づいてくる。
シンザは笑顔で挨拶を返す。
「いきますよ」
ヘイジが促す。いよいよ大守館の正門だ。いままで軍勢を送り出していた門が閉じてゆく。

ドオオオオン

爆発。ヘイジが爆薬を投げたらしい。
爆風と地響きで閉(とじ)られなかった門扉(もんぴ)の間(あいだ)をすり抜ける。中にいる兵士を兄やシンザが即座に叩きのめす。
大守館とは言え、ごく普通の屋形だ。正面の式台(しきだい)から左手奥へ書院(しょいん)が続く。裏手には内膳(ないぜん)関係の建物があるはずだが、おそらくご主人さまは四郎の居室の奥座敷にいるはずだ。
正門から石敷を駆け抜けて式台にあがる。座敷を駆け抜ける。廊下を渡る。そして奥座敷。
杉戸を開ける。まっさきに目に飛び込んで来たのが、
「ご主人さま！」
衣装は別れたときのまま。着衣の乱れもほとんどない。安心。でも衰弱した姿で後ろ手に縛られて床にうずくまっている。
「フロレ……！」
とぼくを見上げていう声がかすれている。やつれた顔が心をつかむ。ぼくの血が滾(たぎ)る。
奥に座っているのが四郎だろう。銀杏(ぎんなん)のような頭に不健全な目がついている。
そして手前に、
「お前……すばやい奴……」
鶏冠井(かいで)八郎。刀を抜くとご主人さまにむけて刃をかざす。
「八郎。それはだめだよう。ぼくのだよ、それ」
制する四郎の声はだるい。八郎が軽く舌打ちするのが聞こえた。
「武器を捨てろ。背中のソレもな」
八郎がぼくにすごむ。
「それでご主人さまが助かるっていうのかい？」
「もちろんそうだとも。」
「けど、そいつの毒牙にかかるんだろう？　あ、ご主人さま、ツッコミいいです。おつかれみたいなので」
何か叫ぼうとしたご主人さまだったが、声にならなかったみたいなのでフォローする。
「あたりまえじゃないか」

いやらしい笑いを浮かべる八郎。
「じゃあ、いっそ殺してもらったほうがいいかな」
ご主人さまの目が開かれた。鶏冠井八郎の笑いも引きつった。
「だってそうだろう？　そうしたら奥の人、残念だよねー」
「そうだよー。殺しちゃだめだよー、八郎」
「――……」
ひょっとして頭回らなかったのか？　こいつ。
「だからさ。ぼくは武器を捨てない。背中の彼女も捨てない。そして、いまご主人さまが殺されたら、この場でその仇（あだ）を討つ」
力強く言い切って四郎と八郎を睨みつける。
「ちょっとお。ぼくは仇なんかになりたくないよう」
それにしても、四郎というやつ。不健全でたるいセリフまわしのくせに異様な殺気を出してやがる。
「お前、トンパチじゃあないか」
遅れてやってきてそのまま観客を決め込んでいたシンザが口を出した。鶏冠井八郎の目が、ぎょっと開く。
「トンパチ？　え？」
船着き場で戦ったときの既視感の正体がわかった。こいつ、知ってる。小さいとき、それこそシンザやシンパチ、カクスケ、ショウゴたちと遊んでいたとき、いつもエラそうにからんできては、ぼくらにヒドい目にあわされて「ちくしょー」と捨てゼリフを残して帰っていってた西岡のどっかの小領主の子。トンマのハチロウ、略してトンパチ。鶏冠井のところの子だったんだあ。そっかー。などといろいろ考えて、
「お前、何やってんの？」
結局出て来たのはこの言葉。
「利用されたんだよな」
兄が出て来た。
「小さいときにいじめられたオレたちに仕返しできると思って三人衆の口車に乗ったんだろう？〈初音の鼓〉を盗み、革嶋越前様を切腹に追い込み、姫にご執心（しゅうしん）だった四郎殿に渡すことを条件に味方に引き入れ左京大夫さまの力を削ぐ。そうして二条殿を孤立させようとしたのだろう。実際、最期は西岡衆のオレたちしかあの場にいなかったしな。お前にとってみると二条殿とオレたちが一緒に滅んでしまえば、それが小さい時の恨みをはらすことだったのだろうよ」
兄の解説を聞いて、やりきれなくなってきた。

「ついでにいえば、あちこちで本名を名乗ってたのもオレたちに気づいてほしかったんだろ？　な？」
「なんだかなー。あー。うん。残念」
出て来た言葉がこんなもの。途方にくれて言葉を失っているトンパチ。その隙に、
「いい加減、寝てろ」
すばやく近づいたシンザが当て身をくらわす。トンパチが気を失って倒れる。
「まったくう。騒々しいんだからあ」
ゆらりと四郎が立ち上がった。ご主人さまに近づく。ぼくが踏み出すより早く、四郎の手がご主人さまに伸びた。
「この子はね。ぼくのもの」
四郎の手がご主人さまの顎をつかむ。ご主人さまの目が見開かれ嫌悪の息を吐き出す。
「やらない」
「うごいちゃ、だめだよお。うごくときみの目の前できみの大切なひとがヒドい目にあうよお」
もう片方の腕がご主人さまの胸の前に回る。場が緊張する。背後で兄たちが隙をうかがっている。でも四郎はだらしなさそうでいて、隙がない。近江国の大守だけのことはある。
「三人衆のことはねえ。以前から考えていたんだ。でもね。父上さまはお祖父さまを夢見てたんだろうねえ。三人衆と張り合おうとしていたんだけどね。やっぱさあ。時流に乗るってあるじゃない？　ここはね。むしろ三人衆にまかせておいしい汁を吸ったほうが楽じゃないかと思ってねえ。そしたらさ。そこの……トンパチだっけ？……いいネーミングだね。そいつがさ。この子を届けてくれたんだよね。しかもこんな格好させてさあ。さらに緊縛？人の好みがわかってるよね」
「「そうじゃない！」」
ぼくとご主人さまの声が重なった。
「お宝紛失の罪を背負った父の無念をはらそうと、慣れない男衣装に身を包み、おびえながら刀を手に旅に出たんだ。その覚悟を穢すな！」
怒鳴ったぼくをご主人さまの目がとらえた。
「でもお、ステキだよう、少年姿」
「う、それはそうだけど…」
ご主人さまの目が　クタ！　と音を立てた気がする。背後でずっこけてる気配がする。
「フロレ……」
お願いご主人さま、そんな残念な者を見る目でみないで。
「確かに似合ってるけどな。ほれぼれするけどな！　でもそれはご主人さまの生き様のあらわれなんだ！」

「ごまかしにしか聞こえないよねー」（ボソ）
「そうですよねー」（ボソボソ）
「後ろ！　ごちゃごちゃ言わない！」
兄とシンザから脱力系の気配がただよってくる。
「ふうん？　じゃあ脱がせたら生き様も剥がれるのかな」
襟元に手をはわす。ご主人さまの目がきゅっと閉じられる。ぼくが踏み込もうとしたとき、背後から足音が響いた。
「四郎殿！」
怒りをこめたような足音。
「但馬守（たじまのかみ）さま」
兄がつぶやく。
やってきた実直そうな初老の男は一礼した兄を一瞥すると
「おお、対馬（つしま）の倅（せがれ）。大義（たいぎ）」
とだけ言って、四郎の正面に仁王立（におうだ）ちする。
一歩遅れて続いて来たのも同年代のすっきりした顔立ちの男性。
「遅いから心配して探したぞ」
と兄に声をかける。
「すみません。手違いがあって」
どうやら、この男性が左兵衛大夫さんらしい。兄の傍らに立つ。
但馬守（たじまのかみ）と呼ばれた男性が、ことばをしぼりだす。
「四郎殿。あなたさまはなあ…」
諫言（かんげん）の場面。
「あ、いいから、それ」
あっさり切りやがったよ。こいつ。
「よくはありません！」
「てゆーかさあ。もういいかげん、隠居してくれないかなあ。父上と一緒にさ」
見るからに重臣と思われる人にこの態度。左兵衛大夫さんと兄が息を飲んだ。但馬守さんも二の句が継げないようだ。
「……ご一門が、崩壊しますぞ」
「ねえ。あんた、それほどの大物なの？　古くからいるだけじゃん。京の情勢も見えてないしさあ。感覚も古いし。代替わりしようよ」
左兵衛大夫さんが額に手をあてて俯き、兄がしゃがみ込んだ。ヘイジはとっくにどこかに消えている。
シンザとぼくは。

そう。
ご主人さまの奪取をめざしている。但馬守さんが四郎の気をひきつけている隙にとりかえす。
「そう、言わるるか。ならば、いた仕方あるまい。父上とともに」
「ちょっとお待ちを！」
左兵衛大夫さんが声を上げた。
「ん、もう。こんどは何？　邪魔するとキミもどいてもらうよ？」
「ちがいます！　但馬殿。短慮はなさいますな」
「短慮ではない。どうやら若君はまだ寝ぼけていらっしゃるようでな、すこし痛い思いをしないと目覚めないようでな。左兵衛殿、あとをお任せしますぞ」
「な～にいってんだか」
四郎が苛立ち始めたのがわかる。口調は変えていないが、目つきが険しくなっているし、手に力が入りだした。
「黙れ！バカ息子」
但馬守さんが大声を出した。
「バカとはなんだ！」
「お前だ！」
わあ、但馬守さん、斬り返しお見事。
怒った四郎が刀を取ろうとつかんでいたご主人さまの襟をはなした。チャンス！　シンザが音をたてて踏み込む。ハッとした四郎がシンザの方をむく。そのすきに反対側からぼくは踏み込んでご主人さまを抱えて離脱する。シンザはすばやく身を翻(ひるがえ)した。四郎が抜いた刀を振り下ろす。

ダク！　ブシュ！

「見るな！」
ご主人さまの頭を抱えて胸に押さえつける。片手でからだを抱きしめる。華奢だなあ。
「「但馬殿！」」
兄と左兵衛大夫さんの声が重なる。
仁王立ちしていた但馬守さんの脳天をめがけて振り下ろされようとした四郎の刀は、シンザの牽制で軌道が揺れたらしい。但馬守さんの頸動脈を斜めに斬り込み衣装の前を切り崩す跡を残した。
吹き出す血。
予想もしていなかったのか、さすがの四郎が凍る。
「いくぞ」

ご主人さまをお姫様だっこして、逃げる。後ろから、
「うぬ！」
という四郎の声とドダンという音。ぐうという声を打ち消すように走ってくる足音。
「シンザ？」
「逃げましょう」
四郎の叫びが聞こえるが、あとは兄たちにまかせよう。
奥座敷の裏庭から裏門と思われる方に走る。
「フロレ…」
弱々しいご主人さまの声。すがりついてくる手。
「いまはあとで。しゃべると舌かみますよ」
表で騒いだだけあって、大守館内の人員は少なく、また奥座敷の異変に気付いたのか、館内に動揺が見て取れる。
「四郎殿が但馬殿を無礼討ちにしたぞー！　奥座敷だあ」
シンザが叫んで館の兵を揺動する。四郎の家の者は皆、ぼくらのことより奥座敷に駆けつけようとしているのだが、
「む？」
シンザが構えると人影がさす。
「よかったねえ。愛しのゴシュジンサマを助けられて」
「胡蝶……」
「なんかさあ……うらやましいってゆーかあ……おもしろくないのよね…」
胡蝶の目が妖し気なひかりを宿してぼくを見ている。妖艶というのか。色気をまとった殺気というか。
「あのバカ殿がその子をめちゃくちゃにしてくれるとおもったんだけどなあ……」
「それはないぞ」
「ん？」
「バカだから」
「く」
鼻で笑われたが胡蝶の目はますます冷えていく。
「あんたもさあ……とことんバカだけどお……かわいいのよね」
胡蝶の背に九本の金色の尻尾が広がったような威圧感を感じる。ひょっとしたら魔物の目ならそう見えるのかもしれない。
「シンザ」
「へ？」
胡蝶の気魄に押されていたシンザに小さく声をかける。

「左の藪の中にダッシュ。逃げるぞ」
胡蝶の左手に〈初音の鼓〉が現れた。背中と懐に、別の気魄を感じる。彼女や源九郎さんが反応している。
「それ！」
〈初音の鼓〉が鳴る。
ターーーーン！
襲ってくる波動を藪に飛び込むことで半減させる。灌木が葉をちぎらせ高木が葉を舞わしてぼくらへの攻撃を吸収してくれる。それでもかなりの衝撃だったが、持ちこたえて走る。
「やらないよ！」
ザザザザザ
葉を揺らして逃げる。とにかく距離をとらなくては。どうやってご主人さまを守る？　いつ彼女を取り出す？　いつ源九郎さんを呼び出す？　考えながら走る。うしろから波動がおしよせる。
「フロレ…。わたしのことはいいから、戦って」
返事をする余裕はない。
前方の厩の脇に椎の巨木を発見。やや広くなっているのも良さげだ。
椎の木の根元の窪みにご主人さまを横たえる。ケースを開ける。
「ヤルわよ」
珍しい彼女のドスのきいた声。
「シンザ」
「はい」
「ご主人さまを頼む」
「了解です。フロレさま」
ずっこける。緊張感のないやつ。
でも椎の木の根元の窪の前に立つシンザは頼もしい。
「準備はいい？」
胡蝶である。さすが狐。足が速い。そして問いかけているくせに、ぼくの答えなんか待たずに〈初音の鼓〉を打ってくる。
ターーーーン！
ゲーーーーー！
最も低い絃を解放で鳴らして防戦。やっと彼女を構えたところだ。
二つの波動がぶつかり合って渦を巻き静寂を呼ぶ。
ラシドレーーーーー
そのままスケール。そして次の開放絃。

デーーーーー！
タタタタタタン
「おいおい。ぼくの出番は？」
源九郎さんが装着しろと催促する。装着する余裕がいまはない。胡蝶の攻撃はこちらに時間を与えないように仕掛けて来ている。これまでの、半分興行みたいなゲーム感覚はない。
なお、この二回の波動の衝撃で厩の屋根板が飛び、塩蔵の庇（ひさし）がもげている。大音響に少し離れた大守館の厨房口から従業員が顔をだして、あわてて引っ込む。
とにかく音を出し続けなくてはならないような勝負になった。
「ちゃんと曲弾いて！」
彼女から叱られる。まだ、曲のイメージがわかないから、スケールやボウのアップダウンの練習みたいになっているのだが、胡蝶の方も二条の御所でのときのような物語がないので、鼓が鉄砲のように打ち鳴らすだけになっている。それだけに始末が悪い。連打されている間、絃を鳴らし続けなくてはならないから、源九郎さんの面が装着できない。
「ねえ！　胡蝶の動きを止めるにはどんな曲を弾けばいい？」
「なんでもいい！　パワーのある曲！　そしたらわたしがなんとかする！　熱い想いを弾いて！」
彼女が絶叫するように、でも悲鳴というより呪詛（じゅそ）のような声を出す。
「いいのお？　フロレンテの熱い想いを、あなた、うけとめられるのお？　あの娘への想いよ？」
瞬間、弾いているのに楽器の音が絶えた。鼓の波動をまともに食らって、軽くふっとんだ。幸い灌木の中に突っ込んだだけだったが枝が痛い。そして、やっぱり波動をうけたダメージはでかい。一瞬、息が止まった。
「フロレ?!」
あ、ご主人さまの声だ。
「ほらほら。ふたりはラブラブよう～。嫉妬するわよねえ～」
胡蝶が彼女の心を揺さぶっている。攻撃が効いたのに気をよくしてか、鼓を手にしたまま、嬲（なぶ）ってやろう意識絶賛発散中でゆっくりと歩み寄ってくる。
「ほんと。罪な男よねえ、フロレンテ。あんたさあ。オリュンポスの女神と雪の棲み家の女戦士をここまで魅（ひ）き堕（お）としといてさあ。人間の女にまで手をだすのお？」
彼女の絃を弾（はじ）いてみる。音がしない。
「ねえ。聞いてる？」
軽い鼓の音。だけど、吹き飛ばされて地を滑る。

「ねえ？　そこのムーサ。あたしとあんたって似てるわよねえ。こんなに人間が好きなのに。最後は裏切られるのよ？　きっとこんども実らない。いいえ。実るどころか、あたしなんか。さいしょから敵同士」

ターーン

「ぐはあ！」

絃がならない。彼女に何があった？

「でもね。楽しかった。たった二回しか手合わせしてないけどね。でも一緒に演奏しているときの充実感。イケたわ」

タン

「ぐぼっ」

「一番嬉しかったのは、あれかなあ。堺でね。わたしのために演奏してくれたとき」

タン

「げほ」

「あなたの優しさが溢れてた」

タン

「うぐっ」

「でもね。癪に障るのはさ」

タン

「ばふ」

「それをムーサのやつがさ」

タン

「うぶ」

「上から目線で鳴らしたことなのよ……」

胡蝶が遠い目をしてすくっと立つ。ちなみにぼくは波動を受けてぼこぼこですが、まだ、生きてます。てか、まだ気力はあります。

「そんなムーサがあんたに捨てられるってさ」

彼女を一瞥して、胡蝶の手が転(ころ)んでいたぼくの髪をつかむ。顔を覗(のぞ)き込んでくる。

「気分いいんだけど」

彼女の息がかかる。彼女の手がぼくの頬を撫でる。切ない目をしている。

「ねえ？　ムーサ」

視線を彼女に移動する。

「あたしさ。この人を」

キッとぼくを睨んで

「永遠にわたしのものにしちゃうよう……」

目をとろんとさせて迫ってくる。

これって、なんですか？　キスでもしようと？　ってか、どう見ても餌になるわたし、みたいな構図なんですけど…。

ビーーーーーーーン

ずうっと左手で弾いていた彼女の絃が鳴った。胡蝶が吹き飛んだ。

「いやよ！　この人はあたしのもの！」

彼女が復活した。

「おい、今だよ。わたしを呼び出しておくれ」

源九郎さんだ。

右手を懐に差し込み、狐の面をとりだす。

「このまま顔に？」

「あててくれ」

「デュワッ！」

気合を掛声にして、面を顔に装着する。面は紐（ひも）もなにもないのに吸い付いたように顔に装着されている。手足に力が漲（みなぎ）る。すっくと立ち上がって、彼女を構える。曲想が沸いてくる。

ビーーン　デーンデ　デーンデンデン　ズッタラー　ズッタラーーーー

和音！和音！和音！　ポーーーン

和音！和音！和音！　ポーーーン

彼女の音色。波動が広がってゆく。胡蝶が〈初音の鼓〉で打ち返す。

ティーヤ　ティヤタタターン　　ポーーンポーーン

ティヤーータータターーン　　ポーーンポーーン

いや、むしろコラボ演奏というべきだろうか。

しかし、迷惑なのは、フレージングの合間合間に波動が衝突して、周囲に多大な影響を与えていることだろう。厩は半壊して、怯（おび）えた馬が逃げ去ってしまっている。塩蔵は庇だけでなく壁に亀裂が入りだした。米蔵（推定）のいくつかは覆い式の屋根が飛んでいる。

ご主人さまのいる椎の木のところは、想定通り、椎の木が波動を防いでくれているらしい。

それにしても、何だろう？　この奇妙な視界。

御前演奏のときには、彼女が結界を張った九尾の狐とどのような戦いをしたのか、見ることはできなかった。彼女のボディを通じて感じることしかできなかったのに、今は、その世界が見える。というか。手足の感覚は演奏しかしていないのだけど、両手が動いている。あたりは大守館の景色なんだけど、そうじゃない世界が見える。

タタタターン　タターン　タターーン

ポポポポーン　ポポーン　ポポーーン

演奏が鳴り響く中、狐の化け物が襲ってくる。それをぼくは肉弾戦で防戦している。

どうやら源九郎さん仮面を装着しているおかげで、あっちの世界が見えているらしい。

しかし、化け物としても美人かも。九尾の狐は。ストライドの長い二足歩行のキャットウォーク。からだに密着した衣装なので、きゅとお尻のお山が浮かび上がって、そこから九本の尻尾が……うん、このウネウネした動きは、金毛に覆われた触手だね、まるで。くびれたウエスト。膨らんだ胸。たしかに胡蝶は、あったよなあ。ご主人さまがかわいそうになるくらい。そして衣装が密着しているので、浮いてます、アレが。そして細い首の上に、狐の顔。頭髪は人間風だけど金毛で、ふわっと肩先まで延ばした先が、すばやく身をこなすたびにさらさらと流れるように揺れる。むきだしの肩から伸びたしなやかな手。左手につかまれている杵状の武器。たぶん、あれが〈初音の鼓〉なんだろうな。両端に不思議な光が宿ってるぞ。

心の中に親に対する愛情がうかぶ。きっと源九郎さんから〈初音の鼓〉への愛情なのだろう。同時にぼく自身の親への愛情も浮かんでくる。その想いを旋律に託す。いままでの勇壮な旋律からすこし優しく。

どうやら背景に流れている彼女の旋律は九尾の狐に刺激を与えるらしい。音が小さくなったり大きくなったりしているのが九尾の狐の尻尾の発する低周波との対決なのだろう。目には見えないが耳に聞こえる戦い。でも彼女の姿はここには見えない。

曲を変えたら〈初音の鼓〉の発する光が明滅しだした。

どうやら、源九郎さんの親に対する想いが〈初音の鼓〉の威力を相殺しているらしい。

九尾の狐が蹴りをいれてくる。キレイな脚が円を描いて、くるくる身を回しながら迫ってくるさまは、暴力というより優雅な舞に見える。ただ、蹴られたら、頭が砕けそうだが。

一歩ふみこんで腕で蹴りを止める。わあ、こんな脚を触れるなんて♪

足首を掴(つか)んで投げる。くるっと彼女が回転して着地。と同時にバク転して両足で頭をねらってくる。ぼく…なのか源九郎さんなのかはわからないが、すかさず前回りして避ける。

曲がブレる。親への想いというテーマで、このビジョンはつらいぞ。どうしても勇ましい曲になってしまう。そうすると鼓(つづみ)スティックが光る。光の波動が襲ってくる。

そんなとき、目の端にご主人さまが見えた。そうだよ。ご主人さまも父への想いを抱いて旅をして今、ここに、こうしている。さっき四郎に投げつけた言葉。それを思い起こして、力強く、親への愛を歌い上げよう。優しく、優しく。だけど、力強く。

〈初音の鼓〉の光が消えた。音が大きくなる。九尾の狐が動揺して隙をみせる。源九郎さん（ぼく？）がすかさず九尾の狐の懐に飛び込み一本背負い。背中から地に叩き付けられる九尾の狐。そのまま組み伏そうとするが、触手尻尾が源九郎さんの足をひっぱってひきはなす。そのまま触手が四肢にからみついて締め付ける。ガンバレ！

再び曲が勇壮になる。音が大きく響く。音の塊が、九尾の狐を襲う。半分の尻尾がうねる。うねる音が彼女の送り出す音の塊と激突する。空気が爆散する。
源九郎さんが絡み付いた触手をふりきり、距離をとる。
フィナーレ。神々しくおおらかに美しい和音をひびかせよう。
彼女の歌声でこの戦いを終わらせよう。
彼女の歌声は最高だ。
胡蝶、きみは美しい。
そしてご主人さま。あなたはかわいい。
それはとてもすばらしいことだ。
きみたちの美をぼくは讃える。
源九郎さんが両手を上げる。左右に大きく輪を描いて、素早く胸の前に寄せて、突き出す。
ビーーーーーーーム
光の線に音がからまり九尾の狐を直撃する。

爆発！

カランと狐面が落ちた。
「源九郎さん…」
拾って懐にしまう。
脇では胡蝶が肩で息をして座っていた。頬が朱い。
「わたしの負けだよう。それでいいよう」
「鼓は返してもらうぞ」
「わかったよう。返すよう。だからさ。フロレンテ、わたしのものになって♡」
「ことわる」
「あん。もう。冷たいんだから。でもあきらめないもん」
「いいから、さっさと返せ」
〈初音の鼓〉を取り上げる。
そして、大きな椎の木の下にいるご主人さまのもとにゆく。
「ご主人さま、これ」
〈初音の鼓〉を渡す。
「御探し物の二条殿のところから盗み出されたお宝です」
「ああ……。これを将軍様に返せば、いいのだな……」
そうか。拉致監禁されていたご主人さまはひょっとして二条殿のことを知らないのだ。
「ご主人さま。二条殿は、もういません」

「え……？」
「御所が三人衆に襲われて、討ち死にされました」
「え……では……ではこの鼓は……」
「……」
「将軍様の役にはたたないのか？　せっかくフロレが、こんなに頑張ったのに！　父上だって！　父上は何のために、だれのために、腹を召されたのだ?!」
泣き崩れるご主人さま。
ぼくはそっとその肩を抱く。
「行きましょう、ご主人さま」
「……いまさら、どこへ……」
「二条殿の弟君を、仲間が助けに行っています。次の将軍になられる方です。その方にお返ししましょう」
「次の……将軍？」
「はい。そのお宝は将軍家代々の重宝。お返しすればお父さまもお喜びになりますよ」
「……そうなのか」
「そうです。ぼくも一緒にいきますから」
「……うん」
足音がした。振り返る。
「なんだサスケか」
「わたしもいますよ」
「シンザ」
「お二人の世界に立ち入るのがためらわれたので遠慮していましたが、そろそろ行きませんと、館の者がやってきます」
あらためて周囲を見回す。厩はほぼ全壊。塩蔵も半分倒壊。米蔵は数棟の屋根が吹き飛んでいる。厨房口のあたりの壁には亀裂がはいっている。そしてところどころに館で働く人々が気絶して転がっている。
「あちらへ」
サスケが先導してくれる。まだ嗚咽（おえつ）の残るご主人さまを立たせて支えながら歩き出す。
裏門を出たところで、ヘイジが馬の番をしていた。
「どちらにむかわれます？」
ヘイジが聞く。一瞬、迷う。ご主人さまを見て、シンザを見る。シンザは、どこへでも?という目で返事をする。
ヨイチからは左京大夫のもとへゆけとのことだったが……。兄にまかせよう。
「和田館へ」

「ご案内します」
「わたしも行く♪」
「胡蝶は来なくていい」
「やだもん」
「勝手にしろ。ヘイジさんは、まだ残る？」
「兄君と左兵衛大夫様を待ちましょう」
「兄に、左京大夫さまの件はよろしく、と伝言を」
「御意」
「ご主人さま。馬にのりますよ」
手を添えて馬に乗せる。
「ぼくがうしろから手綱を繰りますからね」
さっさと馬に乗ったシンザが生あたたかい目で見ている。ちょっと照れくさい。
鐙に足をかけてその後ろにまたがる。うん。密着できて、なんか嬉しい。
「だいじょうぶですか？」
ご主人さまを気遣うぼく♪
「フロレ…」
ご主人さまが、キッと振り向く。顔、近い。目が逢った。ちょっと潤みが残ってる？　唇がかすかに震えて、ご主人さまが、切なく歌うように声をあげる。
「聞こえたんだ。お前の、その音楽が。捕まっているとき。だから、怖くなかった。きっと助けにくると思ってた」
一拍の間をおいて、
「だから…その……

ありがとう…」

そうして一気にすばやく

キス

「あ～！」
「おいおいおい」
「ちょっとお！」
と叫んだのは、彼女と源九郎さん、そして胡蝶。
「れ、礼だからなっ。かんちがいするなよっ」

ぼく、硬直。

「さて、それくらいで、行くか」

シンザが促す声で我に返った。嬉しさ味わっとこ。

「ではお気をつけて」

ヘイジが送ってくれる。

「ハイ！」

馬の胴に力をいれて、ぼくらは走り出した。

## エピローグ　近江国矢島御所

和田館につくとヨイチたちが猊下をお迎えして一息ついていた。

猊下は壮絶に戦死した御所様と、気性は似ていても、どこかいまひとつ感のぬぐえない人だった。もっともこれは最上級の剣術使いとしての自信のあった御所様と比べてのことなので、さすがに一乗院門跡として人の上に立っていたわけだし、それなりの風格はある人物だった。四郎よりはるかにましだ。

拝謁し一連の顛末を報告し、ご主人さまが持参した〈初音の鼓〉を奉還すると、鷹揚に受け取ったあと、あらためてご主人さまに下賜された上で、胡蝶への貸与を命じた。さらに還俗の祝賀の余興として、南蛮音楽士のぼくに命じて胡蝶の舞の伴奏をさせられた。上演演目は「烏帽子折」。平和なコラボ演奏だった。

もっとも、上演後にご主人さまと彼女が妬いて苦労したけど。

数日後、和田館に矢島という武骨な領主がやってきた。乱世をなげき、救国の要を説き、京への帰還を薦め、さらには猊下を自分の城へ迎えたいといいだした。矢島の地は和田館より淡海に近く、京を目指すのには適地なのだそうだ。

ヨイチはあまりよい顔をしなかったが、猊下が乗り気だった。和田館にいても道が開けないのも道理なので、しぶしぶヨイチも了承して、そうして猊下ともどもぼくらは矢島の居城に移ることになった。

兄が左京大夫さまの意思を確認すると、もはや心折れたのか、四郎に全てを任せるといい、本当に隠居してしまっていた。左京大夫さまと主従の契約を結んでいた兄は、契約を解除してシンザとともに和田館から西岡に戻っていった。

ヨイチの周辺では、マンスケを中心に禁裏に働きかけ、猊下の征夷大将軍就任運動を進めていた。

矢島御所で、ぼくと胡蝶はしばしば召されて音楽や舞々を演奏した。すっかりお抱え楽士だ。ご主人さまは〈初音の鼓〉の所有者という名目で矢島御所に滞在している……滞在してもらっている。南蛮音楽士のご主人さまで、舞姫の楽器の所有者となると、ようするに一座の座頭みたいなもんだ。などと理由付けてはいるけれど、ご主人さまと離れたくないのさ。「革嶋の姫」にはもどらず男装のまま。

「ご主人さまは、お姫さまには戻らないんですか？」

「戻ってほしいのか？」

ジト目で見られた。

「いいえ。いまの姿、ステキです」

「お前の趣味って最低だよな。あいつと意見あってたよな」
「そんなあ。あんなのと一緒にしないでくださいよう」
「口調、移ってるし」
「え？あ、いや、その…」
ふっと笑うご主人さまが、かわいい。
「……次の探し物ができた」
今度はにやり、と笑った。
「じゃあ、契約更新していいですか？」
「もちろん」
「お守りします」
「たのむよ」
見つめ合うぼくたち。
「「な～に、やってんだか！」」
彼女と源九郎さんである。
「なにこのバカップル?!」
「やってられませんよねえ？」
いつしか仲良くなっている神様たち。というか、源九郎さん、そのまま狐面（ハーフサイズ）で居着いている。ひさしぶりに親のそばにいたいのだとか、なんだとか。
「お社（やしろ）のほうはいいんですか？」
「うん。ま、これまでも仕事は部下まかせだったし」
ツッコミたくてしょうがなかったが、なんだか信じていたものが崩壊しそうな予感がしたので、やめた。
つかの間の平和の中で、最後にもたらされた良いことは、猊下（げいか）に叙位任官の――残念ながら征夷大将軍ではなかったが――知らせが届けられたことだ。しかも意外な人物によって。
「やあ、南蛮音楽士。こんなところにおちついたのかい？」
ご主人さまと旅を始めたときに出会い、一宿一飯のお世話をもらった釣（つり）の若者。
「重兵衛さん？」
「思いがけない早くの再会だな」
「なんで朝廷の使者なんて役目を？」
「知り合いに頼まれた。もともとうちは評定衆の家柄だしな」
「そうだったんだ」
「母上の腰の具合もすこしはよくなって、追い出されたというのもある」
「追い出された？」
「これから、越前の朝倉の知り合いを訪ねてゆくのだ」

「使者の報告はいいのですか？」
「手紙一本ですむだろう」
「そんなもの?!」
「それより貴公のほうが面白いではないか」
「え？」
「天下には興味がなかったのではなかったか？」
「ああ。そうですよ」
「戦もきらいと言っていた」
「ええ。その通り」
「なのに、こんなところでなにをしているのだ？」
「行きがかり上、巻き込まれた、というのが正直なところです」
あの日以来のことを語ってきかせる。興味深く聞いてくれた。
猊下あらため新御所さまの叙位任官の一連の儀式的なことが済むと、重兵衛をヨイチに紹介した。二人とも学識があるので、話がずいぶんと弾んでいた。とくにヨイチが、あんなに楽しそうに話すのを見るのは初めてのような気がする。ぼくらに見せたことのない顔だ。有職故実や文芸の話になると、ぼくらは今ひとつ造詣が甘いのだが、重兵衛は博覧強記的に事例を並べ上げ論理化して意見を述べる。それに対してヨイチがこれまた理路整然と重兵衛の論理の欠点を指摘してゆく。
「すごいなあ」
と感心していたのは源九郎さんだ。話の輪に加わりたそうだ。
「化けて出て話に加わってみたら？」
「いや、議論ふっかけて負けたらいやだから」
「そういう勝ち負けならいいんじゃないですか？」
「だって。負けたらうちのお社の価値半減じゃないか。学業成就ってお願いも受け付けてるんだよ？」
なるほど。そういうもんですか。
翌日、重兵衛は北に旅立って行った。

○

平和は突然にやぶられた。
重兵衛が旅立った日の宵時分（よいじぶん）。西の方角に異変が見られた。陽も落ちて暗く広がる淡海の対岸に点灯する火の数が異様に多い。
「軍勢だね。来ると思うかい？」
呼びつけられた物見台でヨイチが弾正忠につぶやく。

「たぶん。夜明けに渡ってくるでしょう」
「南側は？」
「姿をみせませんが、おそらく」
「東はだいじょうぶかな？」
「四郎殿が動くとまずいですが、いまのところはだいじょうぶでしょう。まだ騒動は収まりきっておりますまい」
「どうしようか？　逃げるのがいいかな？」
「越中殿がどういわれると思います？」
「そうだよねえ。新御所さまも強気だからねえ」
「荒療治になりますが、一戦交えてみるのもよいかと」
「そうだね。戦の現場を知ってもらうのは必要だろう。でも逃げる準備もしようか」
「どこに逃げられます？」
「新御所さまの妹君が嫁いだ先ならどうだろう？」
「若狭ですか。よろしいのでは？」
「弟くん。君はどうするかい？」
「よい機会ですね。御前を辞します」
「姫はどうするつもりなんだい？」
「一緒に旅をしますよ」
「だいじょうぶかな？」
「ぼくが守りますから」
「いっそ祝言あげちゃったら？」
「……それは、考えてなかった…」
「亡くなられた越前殿も喜ぶと思うんだがどうだい？」
「ま、将来的には……できるかな……」
「「する気なんだ?!」」
「で、明日は戦になるけど、手伝ってくれるとうれしい」
「わたしのご主人さまは姫さまなので」
「じゃあ、姫は新御所さまと一緒にいてもらうことにするよ」
「それって、人質っていうんじゃ…？」
「いいじゃあないか。ついでに新御所さまも守ってやってくれ」
「なんか、すごい言われ方してますね、新御所さま…ついでですか」
予想通り、翌朝暗いうちに南と西から軍勢がおしよせてきた。数千騎程度だ。夜のうちに防衛配備は済んでいたので、たぶん破れることはないだろう。半分希望的観測だが。

ぼくとご主人さま、胡蝶、ヨイチ、弾正忠が新御所さまの守りを固める。城主矢島越中守は陣頭指揮だ。張り切っている。

二条御所での戦いをくぐり抜けてきたぼくらだから、これくらいはたいしたことはなかったが、新御所さまは不安を隠しきれない様子でヨイチに安全の確認を繰り返す。ご主人さまもぼくのそばからはなれないので胡蝶にからかわれっぱなしだ。

戦は午後になって決着した。矢島越中守は城を守り抜いた。しかし城中に負傷を負わなかった戦闘員はほとんどいない。血の臭いが満ちて、胡蝶は嘻々としているが（わすれそうだが、本性は血と愛欲の魔神なのだ）、ぼくとご主人さまは吐き気をこらえるのが精一杯。だから戦はきらいなんだ。一番たいへんだったのは初めて戦場を目の当たりにした新御所様だったが。

そして新御所さまは矢島御所を捨てる決意をした。次に攻められたら、保たないのがはっきりしたからだ。それほど戦力を消耗していた。加えて、四郎が復権して近江国衆全体を三人衆陣営に組する方向に誘導したという情報がサスケからもたらされた。もっともそれは近江衆の間の微妙なバランスと左京大夫さまの力にもよるのだそうだが、すくなくとも矢島の地は挟み撃ちにされる形勢となった。

守りきれずに申し訳ないとあやまる矢島越中守に対して、新御所さまは感謝を伝え、息災を祈り、発つことになった。

「弟くん。悪いが湊まで護衛を頼むよ」

新御所さま、ヨイチ、弾正忠、サスケが若狭に付いてゆくことになった。あまりの少人数だが、堅田から朽木谷に抜ければ、そこの領主はかつて二条殿を匿った過去もあるので、きっと若狭国境までは護衛をつけてもらえるだろうとのことだ。ちょっと見込みが甘い気もするが、ぼくには関係ない。

馬で湊にむかう。ご主人さまはもちろんぼくの前に座らせる。が、後ろになぜか胡蝶が乗る。

「だって、わたし、馬、ないもん」

虚空を駆けることができるだろうが。ご主人さまは拗ねるし、肩に下げた彼女は不機嫌だし、胸の源九郎さんはケラケラ笑うし、胡蝶の胸が背中にあたるし、馬は重そうにしてかわいそうだし。これで護衛がつとまるのか？

湊に付く時分、西日（にしび）が水面（みなも）に映（は）えて奇麗（きれい）だった。

ヨイチたちが矢島越中守配下の舟にのる。

「じゃあな、弟くん。いずれまたどこかであえるだろう」

「お前たちの芸はとてもよかった。これからも呼んだらどこにいようとわたしのところに来るのだぞ」

「「御意」」

舟が桟橋を離れ、しずかに夕日に向かってゆく。

彼女をとりだす。

「弾くの？」
「送ろうかと」
「じゃあ、あたしも」
胡蝶が〈初音の鼓〉を出す。
この先、きっとよい将来が開けていますようにとの願いを込めて、静かだけど明るく華やかな曲を紡ぎだす。小気味よくテンポをつくる鼓の音。波動が水面に漣（さざなみ）を作って、舟を押し出す。ヨイチたちが驚きながら、笑顔で手を振る。ご主人さまが振り返す。
思えば今回の冒険で、演奏もうまくなったもんだ。吹き飛ばすだけではなくなった。
「まだまだよ。もっとすごいことできるんだから。わたし、運命を司る女神なんだからね」
へーい。精進しまーす。
顔が見えなくなるくらいまで演奏して、止む。
さらにすこし見送って
「さて、いきましょうか、ご主人さま」
彼女をしまって手を差し出す。
ケースの中でコンと鳴る。だからケースをもう片方で抱きしめる。
「どこ、行くのう？」
「さあね。どこにしようか。ぼくら旅芸人。商売になりそうなところだね」
「じゃあさ、美濃にいってみましょ？」
「井ノ口か。いいね。どうします？　ご主人さま」
「まかせる。お前と一緒なら、どこでもいい」
「はい」
ご主人さまを馬にのせ、手綱をひく。
「行きますよ」
「うむ」
「付いて行くわ」
　ぶひん
ぼくらの、あたらしい冒険が始まる。

（平成二十三年八月八日作）